青森県埋蔵文化財調査報告書第　242集

外馬屋前田(1)遺跡

― 県営津軽中部地区広域農道整備事業に伴う遺跡発掘調査報告 ―

1998年　３月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書第　242集

そ　ま　や　まえ　だ　　い　せき

外馬屋前田(1)遺跡

― 県営津軽中部地区広域農道整備事業に伴う遺跡発掘調査報告 ―

1998年　３月

青森県教育委員会

空中撮影　遺跡南側（北から岩木山を望む）

空中撮影　遺跡南側

序

青森県教育委員会は、県営津軽中部地区広域営農団地農道整備事業に伴い、建設予定地内に所在する鯵ヶ沢町外馬屋前田(1)遺跡の記録保存を図るため、平成８年度に発掘調査を実施しました。

今回の調査により、平安時代の集落の一部が発見され、遺構の中からは土器・石器とともに多くの羽口・鉄滓が出土しました。この遺跡の周辺には杢沢遺跡など鉄生産に関連する遺跡が多く、今回発掘された集落もその中の一つであったと推察されます。この調査で得られた成果が、岩木山麓における古代の鉄生産を研究する資料として、また地域社会の文化財として活用されれば幸いに思います。

最後に、調査の実施と報告書の作成にあたり関係各位から御協力、ご指導賜りましたことに対し、心から感謝の意を表します。

平成10年３月31日

青森県教育委員会

教育長　松森　永祐

例　　言

1　本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが平成8年度に発掘調査した県営津軽中部広域農道営農団地整備事業に伴う外馬屋前田(1)遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査区の範囲は外馬屋前田(1)遺跡と新沢(2)遺跡（県登録番号15-041）にまたがっているが、本報告書では外馬屋前田(1)遺跡として報告した。

3　本報告書は青森県埋蔵文化財調査センターが編集作成した。なお、執筆者名は依頼原稿については文頭に、その他は文末に付した。

4　挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、遺物写真の縮尺は不同である。

5　土層等の色調観察には1994版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄1994）を使用した。

6　遺物の取り上げについては、床面に接しているものを「床面」、床面からわずかに浮いているものを「床面直上」、堆積土中のものを「覆土●層」とした。尚、遺物出土状況図は「床面」及び「床面直上」から出土した遺物を対象にして作成した。

7　竪穴住居跡の規模は、原則として四壁で行った。床面積は、壁の下端で囲まれた部分をプラニメーターを使用して計測し、3回の平均値を用いた。遺構内のピットの深さについては、挿図中に斜字イタリック体で記した。

8　竪穴住居跡の主軸方位は、カマドが設置された壁辺に直交する方向とした。

9　資料の鑑定及び同定、並びに分析については、次の方々に依頼した（順不同、敬称略)。

地形・地質と基本層序、石器の石質鑑定	青森県立板柳高等学校教諭　山口 義伸
放射性炭素年代測定	学習院大学　木越 邦彦
火山灰の蛍光X線分析、須恵器の蛍光X線分析	奈良教育大学教授　三辻 利一
出土植物遺体の同定	パリノ・サーヴェイ株式会社
出土鉄滓・出土赤色岩石辺の分析	岩手県立博物館　赤沼 英男

10　土器の実測にあたり、口縁部および底部が4分の1以上残存する場合は努めて図上復元を試み、残存率は口縁の線の長さで表した。凡例は次頁を参照されたい。

11　遺物観察表の計測値で（　）は、推定される数値を示したものである。

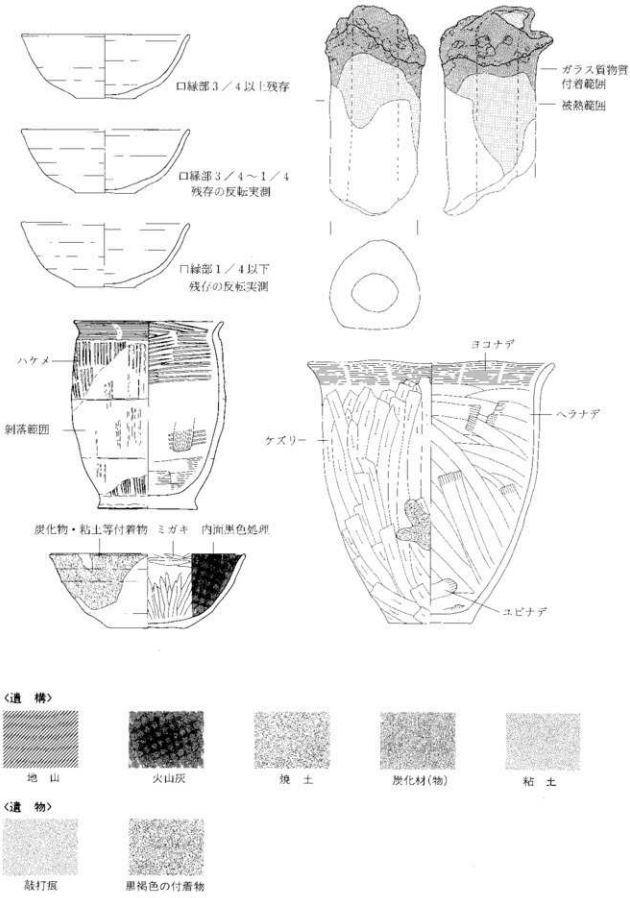
12　鉄製品の観察表中にある「磁着度」とは、実際に保存処理後の鉄製品に磁石をあて、その際の付着力を感覚的に表したものである。Aは持ち上がるもの、Bは片方だけ浮くもの、Cは動く程度のものである。また、「重量」は保存処理後に測定した値である。

13　須恵器は断面図を塗りつぶした。

14　挿図中で使用したスクリーン・トーンの表示は次頁の通りである。それ以外のものについてはその都度挿図中に記した。

15　出土遺物・実測図・写真等は現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。

16　発掘調査及び本報告書の作成にあたり、次の諸氏からご教示、ご指導を受けた(敬称略、順不同)。
宇部則保、大野亮、工藤清泰、長尾正義、田中寿明、古屋敷則雄、新岡巌、小谷地肇、瀬川滋、遠藤正夫、北林八州晴、木村真明



スクリーントーン・実測図凡例

目　　次

序
例言
目次
挿図・表目次
写真目次

第１章　調査概要 …… 1
　第１節　調査要項 …… 1
　第２節　調査方法 …… 2
第２章　遺跡の環境 …… 4
　第１節　地形・地質と基本層序 …… 4
　第２節　歴史的環境と周辺の遺跡 …… 8
第３章　外馬屋前田(1)遺跡の検出遺構と出土遺物 …… 13
　第１節　検出遺構と遺構内出土遺物 …… 13
　　１．竪穴住居跡 …… 13
　　２．掘立柱建物跡　（小結） …… 91
　　３．土坑・工房跡　（小結） …… 99
　第２節　遺構外の出土遺物 …… 113
　　１．平安時代の出土遺物 …… 113
　　(1)風倒木痕出土遺物
　　(2)土師器
　　(3)須恵器
　　(4)羽口・鉄滓
　　(5)石器

　　２．平安時代以外の遺物 …… 113
　　(1)縄文時代の土器
　　(2)縄文時代の石器
　　(3)古銭
　　(4)土製垂飾品

第４章　自然科学的分析 …… 121
　第１節　学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書（学習院大学　木越邦彦） …… 121
　第２節　出土火山灰の蛍光Ｘ線分析（奈良教育大学　三辻利一） …… 122
　第３節　出土須恵器の蛍光Ｘ線分析（奈良教育大学　三辻利一） …… 124
　第４節　出土植物遺体の同定　（パリノ・サーヴェイ株式会社） …… 128
　第５節　出土遺物と組成から見た鋼製造活動（岩手県立博物館　赤沼　英男） …… 134
　第６節　赤色顔料　（岩手県立博物館　赤沼　英男） …… 141

第５章　調査の成果 …… 143
　第１節　竪穴住居跡について …… 143
　第２節　土師器・須恵器について …… 145
　第３節　石器について …… 151
　第４節　住居跡の変遷 …… 153

第６章　まとめ …… 160

引用・参考文献 …… 161
写真図版 …… 163
報告書抄録 …… 197

挿図目次

図1 外馬屋前田(1)遺跡位置と周辺の遺跡
図2 遺跡周辺の地形分類図 …… 4
図3 遺跡周辺における露頭断面図 …… 5
図4 基本層序 …… 6
図5 遺跡周辺の地形
図6 調査区域図及び遺構配置図 …… 11・12
図7 第1号住居跡調査前の地形と完掘状況 …… 14
図8 第1号住居跡 …… 15・16
図9 第1号住居跡 カマド …… 17
図10 第1号住居跡 カマド遺物、炭化材出土状況 …… 18
図11 第1号住居跡 遺物出土状況 …… 19
図12 第1号住居跡 出土遺物－1 …… 20
図13 第1号住居跡 出土遺物－2 …… 21
図14 第1号住居跡 出土遺物－3 …… 22
図15 第1号住居跡 出土遺物－4 …… 23
図16 第1号住居跡 出土遺物－5 …… 24
図17 第1号住居跡 出土遺物－6 …… 25
図18 第1号住居跡 出土遺物－7 …… 26
図19 第2号住居跡 …… 28
図20 第2号住居跡 出土遺物 …… 29
図21 第3号住居跡 …… 31
図22 第3号住居跡 出土遺物－1 …… 32
図23 第3号住居跡 出土遺物－2 …… 33
図24 第4号住居跡 …… 35
図25 第4号住居跡 カマド …… 36
図26 第4号住居跡 出土遺物 …… 37
図27 第5号住居跡 …… 38
図28 第5号住居跡 カマド …… 39
図29 第5号住居跡 出土遺物－1 …… 40
図30 第5号住居跡 出土遺物－2 …… 41
図31 第5号住居跡 出土遺物－3 …… 42
図32 第5号住居跡 出土遺物－4 …… 43
図33 第6号住居跡 …… 45
図34 第6号住居跡 遺物－1 …… 46
図35 第6号住居跡 遺物－2 …… 47
図36 第6号住居跡 遺物－3 …… 48
図37 第7号住居跡 …… 49
図38 第7号住居跡 カマド、出土遺物－1 …… 50
図39 第7号住居跡 出土遺物－2 …… 51
図40 第8号住居跡 第7号・8号住居跡・第10号土坑確認状況 …… 51
図41 第8号住居跡 …… 53
図42 第8号住居跡 新カマド …… 54
図43 第8号住居跡 旧カマド、炭化材出土状況 …… 55
図44 第8号住居跡 遺物分布状況 …… 56
図45 第8号住居跡 遺物－1 …… 57
図46 第8号住居跡 遺物－2 …… 58
図47 第8号住居跡 遺物－3 …… 59
図48 第8号住居跡 遺物－4 …… 60
図49 第8号住居跡 遺物－5 …… 61
図50 第9号住居跡 遺物出土状況 …… 63
図51 第9号住居跡 カマド、出土遺物－1 …… 64
図52 第9号住居跡 出土遺物－2 …… 65
図53 第9号住居跡 出土遺物－3 …… 66
図54 第10号住居跡 出土遺物 …… 67
図55 第10号住居跡 カマド …… 68
図56 第11号住居跡 カマド …… 70
図57 第11号住居跡 出土遺物 …… 71
図58 第12号住居跡 出土遺物 …… 72
図59 第12号住居跡 カマド、出土遺物 …… 73
図60 第13号住居跡 カマド、出土遺物 …… 75
図61 第15号住居跡 遺物出土状況 …… 76
図62 第15号住居跡 カマド …… 77
図63 第15号住居跡 出土遺物－1 …… 78
図64 第15号住居跡 出土遺物－2 …… 79
図65 第16号住居跡 …… 80
図66 第16号住居跡 カマド、出土遺物 …… 81
図67 第17号住居跡 カマド、炭化材、出土遺物－1 …… 83
図68 第17号住居跡 出土遺物－2 …… 84
図69 第17号住居跡 出土遺物－3 …… 85
図70 第17号住居跡 遺物出土状況 …… 86
図71 第18号住居跡 カマド、出土遺物 …… 87
図72 第101号住居跡 カマド …… 89
図73 第101号住居跡 出土遺物 …… 90
図74 第1号・第2号掘立柱建物跡 …… 94
図75 第3号・第4号掘立柱建物跡 …… 95
図76 第5号・6a号・6b号掘立柱建物跡 …… 96
図77 第7号・第8号掘立柱建物跡 …… 97
図78 掘立柱建物跡集成図 …… 98
図79 土坑1（第1号～5号） …… 105
図80 土坑2（第6号～12号） …… 106
図81 土坑3（第13号・14号・16号～21号） …… 107
図82 土坑 出土遺物 …… 108
図83 第15号土坑と第1号工房跡 …… 110
図84 第15号土坑と第1号工房跡 出土遺物－1 …… 111
図85 第15号土坑と第1号工房跡 出土遺物－2 …… 112
図86 遺構外の出土遺物－1（風倒木痕） …… 115
図87 遺構外の出土遺物－2 …… 116
図88 遺構外の出土遺物－3 …… 117
図89 遺構外の出土遺物－4 …… 118
図90 遺構外の出土遺物－5 …… 119
図91 遺構外の出土遺物－6 …… 120
図92 住居跡の柱穴配置 …… 144
図93 住居跡の規模と主軸方位図 …… 145
図94 土師器甕・坏の分類図 …… 150
図95 住居跡集成－1 …… 154
図96 住居跡集成－2 …… 155
図97 土師器壺集成 …… 155
図98 土師器甕・坏集成－1 …… 156
図99 土師器甕・坏集成－2 …… 157
図100 III期の住居跡に伴う土師器 …… 158
図101 火山灰を被った住居跡と住居跡の変遷 …… 159

【第4章 自然科学的分析の図版】
第2節 図1 K－Ca分布図 …… 123
第2節 図2 Rb－Sr分布図 …… 123
第2節 図3 Fe因子の対比 …… 123
第2節 図4 Na因子の対比 …… 123
第3節 図1 Fe因子の比較 …… 126
第3節 図2 外馬屋前田(1)遺跡出土須恵器の両分布図 …… 126
第3節 図3 須恵器胎土分析サンプル集成 …… 127
第4節 図1 炭化材(1) …… 191
第4節 図2 炭化材(2) …… 192
第5節 図1 推定される鋼の製造法 …… 139
第5節 図2 No3鉄滓の外観と組織観察結果（その1） …… 193
第5節 図2 No3鉄滓の外観と組織観察結果（その2） …… 194
第5節 図3 摘出した試料片の組織観察結果 …… 195
第5節 図4 No1から摘出した試料片の組織観察結果 …… 196
第6節 図1 赤色岩石片の蛍光X線分析結果 …… 142
第6節 図2 赤色岩石片の粉末X線回析図 …… 142

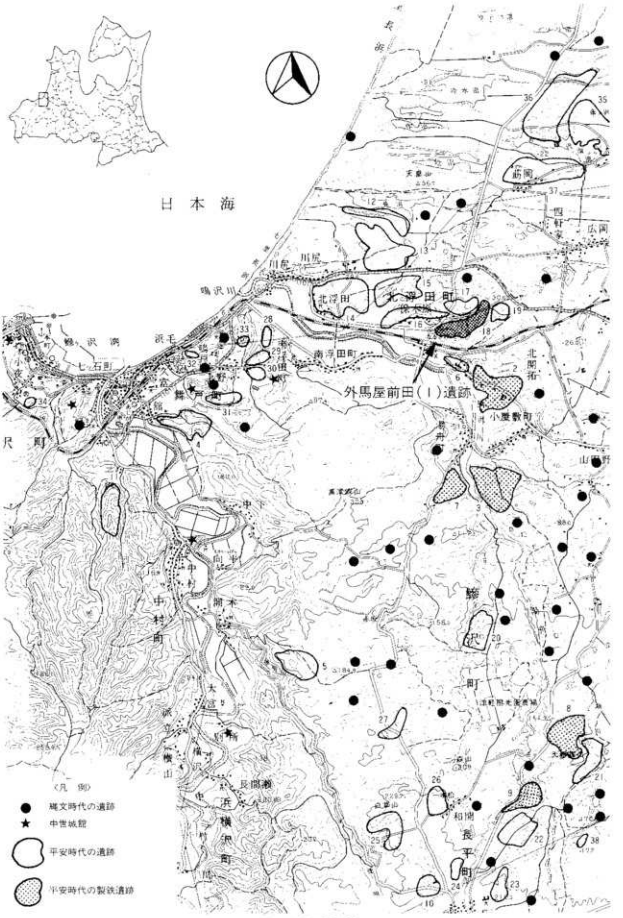

日本海
外馬屋前田(Ⅰ)遺跡
北浮田町
南浮田町
小屋敷町
中村町
長平町
〈凡例〉
縄文時代の遺跡
中世城館
平安時代の遺跡
平安時代の製鉄遺跡

図1　遺跡位置図

第１章　調査概要

第１節　調査要項

1　調査目的

県営津軽中部地区広域農道営農団地農道整備事業の実施に先立ち、当該地区に所在する鰺ヶ沢町外馬屋前田（１）遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

2　発掘調査期間

平成８年６月10日から９月27日まで

3　遺跡名及び所在地

外馬屋前田（１）遺跡（県登録番号15－042）

西津軽郡鰺ヶ沢町大字北浮田町字外馬屋前田136-１、外

4　調査対象面積

4,500平方メートル

5　調査委託者　青森県農林部

6　調査受託者　青森県教育委員会

7　調査担当機関　青森県埋蔵文化財調査センター

8　調査協力機関　鰺ヶ沢町、鰺ヶ沢町教育委員会、西北教育事務所

9　調査参加者

調査指導員　村越　潔　青森大学考古学研究所所長（考古学）

調査協力員　兼平　瑞夫　鰺ヶ沢町教育委員会教育長

調　査　員　高島　成侑　八戸工業大学教授（建築史）

葛西　励　青森短期大学助教授（考古学）

山口　義伸　青森県立板柳高等学校教諭（地質学）

調査担当者　青森県埋蔵文化財調査センター

総括主幹　調査第二課長　鈴木　克彦

主　幹　畠山　昇

主　事　赤羽真由美

調査補助員　佐藤　理、尾崎智恵子、濱田　恵、川村　真史

第2節　調査方法

1　調査区の設定

道路建設用中心杭№312を基準点（E－60）とし№312と№314を結ぶ南北方向の基準線をEライン、幅杭№312を通りこれに直行する東西方向の基準線を60ラインとして4m四方のグリッドを設定した。グリッド番号は、北から南にA、B、Cを用い、東から西方向に算用数字1、2、3を用いて付した。グリッドの呼称は、北隅の交点を使用することとした。なお、グリッドの南北ラインはN－24°－Eである。

測量原点（B．M.）は、調査区域外に設けられていた工事用測量杭H＝35.146mから引用し、調査区域内の任意の場所に必要に応じて設定した。

2　発掘調査の方法

(1)グリッド単位で発掘区を拡張する方法をとった。

(2)試掘的に先行して部分的な粗堀を層位・段階的に進め、遺構・遺物の観察をしてから下層の掘り下げについて判断した。

(3)遺構については、四分法、二分法で行い、土層を観察しながら精査を進めることとした。遺構等の実測図の縮尺は、10分の1、20分の1を必要に応じて使用することとした。

(4)遺物の取り上げは、グリッド単位に層位ごとに行い、必要に応じて平面図を作成し、レベルを記録することとした。

(5)土層の名称は、基本層序については表土から下位に向かいローマ数字を、遺構内堆積土については上位から下位に向かい算用数字を各々付すことにした。土層観察にあたっては『標準土色帖』を用い注記した。

(6)写真撮影は適宜行うこととし、35mmモノクロームとカラーリバーサルフィルムを用いておこなった。

3　調査の経過

調査開始までにプレハブの設置を行った。町道の北脇（調査区の東西ライン42～47）は地権者の土取りによって表土から50cmほど削平されていた。そのため、遺構の残されていないことを確認した上でプレハブを設置した。

6月10日、調査機材等を搬入して調査を開始した。作業員の駐車場が付近に確保できなかったため、調査区の北側（東西ライン5～27）から調査を開始し、町道を挟んだ南側（東西ライン50～60）を作業員の駐車場とした。それと平行して、75～80ラインまでの粗堀り、駐車場としていた50～60ラインのトレンチ掘りを行った。東西ライン5～25はスイカ畑に挟まれているため、調査区外に土捨場が確保できなかった。従って当初東西ライン15～20までを排土置き場として両脇から調査した。

5～27ラインは畑地にするための整地で、場所によっては40cmほど盛り土されていた。その下部は削平を免れていたが、長芋栽培のためのトレンチャーが密に走っていた。少量の土師器・須恵器と土坑3基が検出されたのみであった。東西ライン75～80までは台地斜面となっており、斜面の下の方では厚い砂層を確認したが遺構・遺物ともに皆無であったため土捨場とした。町道の南側では、トレン

チ堀りの結果住居跡が多数存在することが判明した。

７月１日、それまで駐車場としていた町道の南側を調査するために、調査区の北側の５～27ラインの排土を重機で平らにし、砕石を敷いて駐車場にした。町道の南側は重機による表土の除去を行った。７月上旬からは、東西ライン30～42までと町道の南側の粗掘りに移行した。同時に、埋まりきらないで凹みとなっていた第１号住居跡、削平されて床面が露出していた第101号住居跡の精査を開始した。

30～42ラインまでは掘立柱建物跡を１棟検出したのみである。その脇を深掘りし、基本層序を確認した。町道の南側を粗掘りした結果、住居跡14件、土坑11基、掘立柱建物跡３棟程確認し、精査を開始した。晴天が続き、遺構確認面が乾燥してひび割れが激しくなってきたため水道を取り付け、適宜ホースで水まきをしながら精査を行った。

８月上旬、町道の南側に設置していたトイレを移動し、粗掘りした結果新たに３軒の竪穴住居跡を検出し、８月５日から精査に入った。

８月下旬、調査区南側の遺構密度が高く、９月13日までの精査終了は不可能と判断し、９月17日～９月27日までを残務処理期間とし、調査終了日を９月27日に延長した。

９月８日、現地見学会を開催して調査の成果を一般公開した。

９月17日以降は外馬屋前田（１）遺跡の調査と並行して鯵ヶ沢町平野・今須（４）遺跡の調査に入った。そのため、残務処理は作業員を含め15人ほどで行った。

９月27日、調査器材及び遺物を搬出して発掘調査の全日程を終了した。

（赤羽　真由美）

第２章　遺跡の環境

第１節　地形・地質と基本層序

青森県立板柳高等学校教諭　　山口　義伸

外馬屋前田(1)遺跡は西津軽郡鯵ヶ沢町北浮田字外馬屋前田に所在し、日本海に注ぐ鳴沢川下流域の海岸段丘上に立地している。本遺跡よりやや上流側の、支流湯舟川との合流地点近くに平安時代の製鉄炉跡などが検出された杢沢遺跡が立地している。

日本海に面した七里長浜は海岸砂丘からなる単調な海岸線であって、鯵ヶ沢町から北方の岩木川河口にあたる十三湖まで続いている。また、海岸沿いには「屏風山」と呼ばれる海岸段丘が３～４kmの幅で平行して分布し、段丘面のほぼ全面が新期砂丘砂で被覆されている。

一方、内陸側の中村川―鳴沢川間では高津森山など起伏度の大きい丘陵地が分布し、鳴沢川以東では岩木火山起源の岩屑なだれ堆積物からなるやや起伏する台地が広く展開している。丘陵地および台地の海岸寄りには海岸段丘が分布している（図２）。

鳴沢川は最上流部が大鳴沢であって、岩木火山頂上付近の外輪山にあたる岩鬼山に発源する放射谷である。下流域においては上流約４kmの鯵ヶ沢町湯舟付近までは幅0.5～1.0kmの谷底平野が展開し、鳴沢川が蛇行しながら北西流している。山麓部においては鍋森山付近の標高600m付近を扇頂部とする火山麓扇状地が展開し、その勾配は約100/1000とかなり急である。火山麓扇状地の扇端部付近には鯵ヶ沢町長平が位置している。そして、扇状地前縁部には上述の岩屑なだれ堆積物からなる台地が展開し、

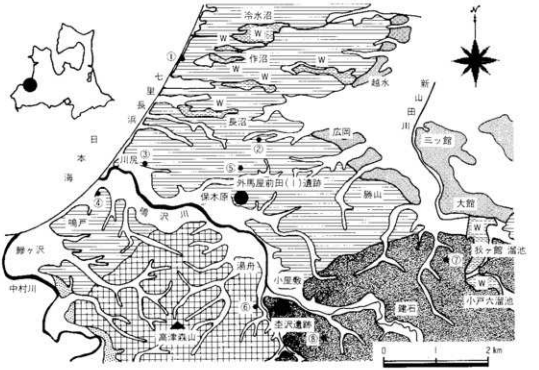


図２　遺跡周辺の地形分類図

浸食谷の開析により起伏の大きい谷間丘陵地をなしている。なお、中村川は岩木火山体西縁をほぼ北流し、下流域には約1.0kmの幅を有する谷底平野として展開している。流域内には沖積段丘が点在し、主に集落が立地している。

日本海沿いの七里長浜に平行する屏風山は中位段丘に相当する山田野段丘からなり、段丘構成層としてローム層下底に指標である洞爺テフラ（Toya）の薄層を載せている。段丘面は新期砂丘砂によって厚く被覆され、海岸沿いには砂丘砂からなる小丘も認められる。また、ローム層下底に堆積するToya下にも塊状の古砂丘砂が約２mの厚さで堆積し、本遺跡の立地する内陸部まで達している。

なお、岩木火山北東麓の十面沢及び十腰内付近には伝次森山、御月山など円錐形をなす小丘群が点在している。いずれも比高90m以下、直径500m以下の小丘であって、十面沢円頂丘群と呼ばれている。この円頂丘群は輝石安山岩質の火砕岩および溶岩からなり、「十腰内石」として採石されている。現岩木火山の噴火活動前の、いわば古岩木火山の一連の活動と考えられる(鈴木、1972)。ただ、これらの小丘群について赤倉沢から流出した泥流堆積物によって形成された泥流丘群とする見解もある（一色・大沢、1967)。

本遺跡は鳴沢川河口から約３km内陸側の、山田野段丘上に立地している。調査区域は標高約35mであって、平坦な段丘面から南端の鳴沢川流域に臨む緩傾斜面にかけて帯状の分布を示している。調査区域は、主にスイカ畑として土地利用され、基本層序第Ⅴ層である軽石層（松山・岩木山団研1980によるカレーパーミス）上面まで削平されている。また、調査区域南端部は雑木林であって、林中から平安時代の第１号竪穴住居跡が検出され、調査区域外にも同時代の遺構跡と思われる埋もれきれない凹地が確認されている。

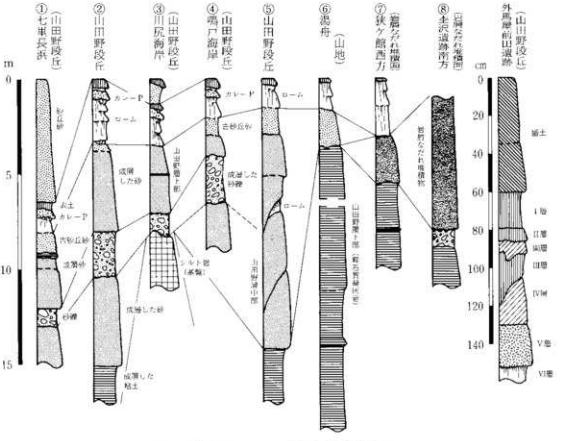


図３　遺跡周辺における露頭の模式断面図

次に、調査区域内の基本層序について記述する（図３・図４）。

Ⅰ層　黒褐色土　（10ＹＲ2/3）　厚さ15～30cm。耕作土である。粘性および湿性がややあり、盛土下では土圧によりかたさがみられるが、全体的には締まりに欠けソフトな感じがする。耕作による撹乱で、ローム粒および軽石粒が豊富に包含され、また所によっては径３cm大の円礫を多少混入することもある。なお、町道以北の調査区域では本層上位に厚さ40～60cm程のローム主体の盛り土が確認され、盛り土上半部は耕作による撹乱が著しい。

Ⅱ層　黒色土　（10YR2/1）　厚さ５～10cm。粘性および湿性があり、多少腐植質である。全体的にソフトであり、ローム粒および軽石粒が多少混入している。

間層　暗褐色土　（10YR3/3）　厚さ５～10cm。粘性および湿性があって多少腐植質である。締まりに欠けソフトな感じがする。全体的にローム粒、軽石粒、炭化粒および焼土粒などが多少混入し、また平安時代の遺物も包含されている。おそらく平安時代の生活面であると考えられ、同時代の遺構内外で確認された白頭山起源の苫小牧火山灰(B-Tm)が本層中に挟在するものと思われる。

Ⅲ層　黒褐色腐植質土　（10ＹＲ2/2）　厚さ０～20cm。粘土質で腐植質であるが、多少かたさおよび締まりがみられる。軽石粒および同ブロック（径１～２cm大）の混入が目立つ。本層は下位層とやや凹凸する面で接している。

Ⅳ層　暗褐色土　（10YR3/3）　厚さ10～20cm。漸移層である。粘性および湿性があり、多少締まりに欠け脆い感じがする。Ⅴ層の軽石粒および同ブロック（径５～10cm大）の混入が多量に混入している。なお、上半部は黒褐色（10YR3/１）を呈し、軽石粒の混入が目立ちやや腐植質である。下位層とかなり不規則な面で接している。

Ⅴ層　明黄褐色軽石　（10YR6/8）　厚さ20～30cm。カレーパーミス（松山・岩木山団研1980）、碇ヶ関浮石（山口1993）に相当し、低位段丘の指標となっている。緻密堅固なラピリ（砂状の火山礫）質の細粒軽石からなっている。径１～２cm大の軽石粒の混入が多少目立つ。下位層とはシャープな面で接している。

Ⅵ層　橙色ローム　（7.5YR6/6）　厚さ10cm以上。粘土質なハードロームで、中位段丘を構成する黄橙色ローム層最上部に堆積する暗色帯に相当する。乾燥すると本層上面にクラックが顕著に発達する。黄橙色ローム層は岩木火山起源の降下火山灰層であり、最下部には中位段丘の指標である洞爺火山灰（Toya）の薄層が堆積し、また海岸部にあってはToyaの上部および下部のローム層中に大陸起源の広域風成塵（loess）が確認されている（鳩澤他、1944）。

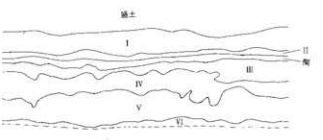


図４　基本層序

ところで、本遺跡調査区域内からは製鉄関係の遺物が多量に出土している。出土した遺物から判断して、砂鉄など原料鉱石から鉄分を抽出する製錬なのか、鉄分を精製し鋼を製造する精錬なのかは不明であるが、ここでは原料鉱石と考えられる砂鉄の産出について若干記述してみたい。なお、調査区域内からは砂鉄を貯蔵する遺構は検出されていない。

本遺跡が立地する山田野段丘は山田野層を構成層とし、層相から上部・中部・下部に細分される。上層部はリスーウルム間氷期の海進期にあたる中位段丘構成層に相当し、成層した中粒砂を主体とし基底に砂礫層が付随している。砂層直上には塊状で均一な細粒砂からなる古砂丘砂が約２ｍの厚さで堆積している。そして、古砂丘砂直上には中位段丘の指標であるToyaの薄層（厚さ約10cm）が認められる。中部層は成層した砂質粘土（シルト質）と砂礫の薄層を含む砂の互層（厚さ10m以上に及ぶ）からなっている。この中部層は内湾性の環境を示す堆積物であって、鳴沢川下流域から岩木火山北麓の森田村にかけて分布するものと思われる。なお、下部層には塊状で粘土質軽石質凝灰岩および軽石質シルト岩からなり、岩木火山東麓の黄金山付近に分布する黄金山層に相当するものと思われる。直上には岩木火山起源の岩屑なだれ堆積物が厚く堆積し、末端部には流れ山が存在するものと思われ起伏に富む丘陵地となっている。山田野層中の中部層に、いわゆる〝山砂鉄〟と呼ばれる砂鉄の薄層が何枚も堆積しているのを確認している。地表から山田野層中部層までは20m弱の高度差が認められる。製錬にどの程度の砂鉄量が必要なのかは不明であるが、多少なりとも採掘可能な量は存在するものと考えられる。なお、川尻など海岸沿いに分布する沖積段丘にも構成層である砂層中に砂鉄の薄層（厚さ５～10cm）が確認され、さらに山田野段丘構成層中にも多少なりとも砂鉄層が存在している。

縄文時代の遺物である剥片石器はその素材として珪質頁岩および出来島産以外の黒曜石が多用され、平安時代の台石および砥石などの遺物（特に礫石器）として安山岩や流紋岩が多用されている。硬質珪岩および珪質頁岩は西海岸沿いに分布する大童子層や赤石層に、流紋岩は塩見崎層にみられ、いずれも深浦町～鰺ヶ沢町にかけて分布している。これらの石材として必要かつ手頃な大きさの円礫は七里長浜の海岸線や鳴沢川・中村川・赤石川などの流域内において十分に確保はできると思われる。ただ、台石の素材など相当な大きさの石材については石材産地からの供給が必要と思われ、たとえば板状の安山岩礫は本遺跡東方の十腰内・十面沢付近および岩木火山北麓の長平付近（白草山など）に点在する十面沢円頂丘を構成する輝石安山岩が格好の素材かと思われる。

次に、本遺跡調査区域から検出された平安時代の竪穴住居跡内から白頭山起源苫小牧火山灰（Ｂ－Ｔｍ）が確認されている。また、蛍光Ｘ線分析の結果では十和田火山起源の十和田ａ降下火山灰（Ｔｏ－ａ）も確認されている。Ｂ－Ｔｍの岩木火山以北での自然堆積層は、鰺ヶ沢町杢沢遺跡、稲垣村久米川遺跡および弘前市下恋塚遺跡などで確認しているが、Ｔｏ－ａ層は浪岡町高屋敷館遺跡など平野東縁から南部にかけて確認されているだけで、岩木火山以北では今のところ確認されていない。

なお、各降下火山灰の降下時期はＴｏ－ａが915年、Ｂ－Ｔｍが923年冬～924年春にかけてと推定されている。（町田・福沢　1996）。

〈参考・引用文献〉

大沢　穠　1961　5万分の1地質図幅「弘前」(青森一第28号) 同説明書　地質調査所

一色直記・大沢穠　1967「岩木火山北東麓の泥流丘群」『火山, vol.2』,№12-3

中川久夫　1972「青森県の第四系」『青森県の地質』青森県

鈴木隆介　1972「岩木山の変位」『地理学評論45号』

松山力・岩木火山団体研究グループ　1980「岩木火山の形成（その1）　周辺の火山噴出物」

『日本地質学会87年学術大会講演要旨204』日本地質学会

青森県教育委員会　1989『歪沢遺跡』県埋文報第130号

生出慶司・中川久夫・蟹沢聖史　1989『日本の地質2　「東北地方」』共立出版

山口義伸　1993「平川流域での十和田火山起源の浮石流凝灰岩について」『年報　市史ひろさき2』弘前市

青森県教育委員会　1994『稲垣村久米川遺跡発掘調査報告書』県埋文報第163号

社会福祉法人　つがる三和会　1996『下恋塚遺跡発掘調査報告書』

町田　洋・福沢仁之　1996「湖底堆積物からみた10世紀白頭山大噴火の発生年代」日本第四紀学会

青森県教育委員会　1998『高屋敷館遺跡発掘調査報告書』県埋文報第243号

鴈澤好博・柳井清治・八幡正弘・溝田智俊1994「西南北海道－東北地方北部に広がる後期更新世の広域風成塵堆積物」『地質学雑誌』第100巻第12号

第2節　歴史的環境と周辺の遺跡

本遺跡の所在する鯵ヶ沢町北浮田は、弘前方面から旧西浜街道（鯵ヶ沢街道）を通ってくると、岩木山麓の山道が終わり、ちょうど海が見え出す辺りにある。浮田の集落は天文年間（1532～55年）に書かれたと伝えられる『津軽郡中名字』にも「浮太刀」と記載されていた古村であるが、今回の調査で検出された集落は更に500年ほど溯るものであり、「浮太刀」の集落との関係は全く不明である。

遺跡位置図にみられるように、岩木山麓から海岸にかけては縄文時代と平安時代の遺跡が多く確認されている。以下、それぞれの時代の遺跡分布状況について概観する。

縄文時代の遺跡は岩木山麓に集中している。特に十腰内遺跡に代表されるような縄文時代後期・晩期の遺跡が多い。

平安時代の遺跡は岩木山麓から海岸近くにまで広く分布する。この中で、鉄生産に関連する遺跡が岩木山麓から北浮田にかけての湯舟川と鳴沢川周辺に多く分布している（遺跡位置図中にスクリーントーンで示した)。これらの鉄生産に関連する遺跡は、昭和33年～36年に行われた岩木山麓の発掘調査、昭和62年・63年に行われた歪沢遺跡の発掘調査によって次第にその実態が明らかになってきた。若山遺跡、大平野III遺跡、大館森山遺跡、浮橋貝塚、歪沢遺跡から精錬炉とみられる遺構が検出されている。その他にも、常盤野遺跡、外馬屋遺跡、甲音羽山(1)・(3)・(4)・(5)遺跡、長平遺跡、上清水崎(1)遺跡、大平(1)・(3)遺跡から土師器・須恵器と共に鉄滓・羽口が出土している。これらの調査の結果、10～11世紀にかけて岩木山麓で大規模な鋼生産が行われていたと考えられるようになった。なお、本遺跡周辺の歴史的環境については歪沢遺跡の調査報告書中で新岡氏が述べているので参照されたい。

（赤羽　真由美）

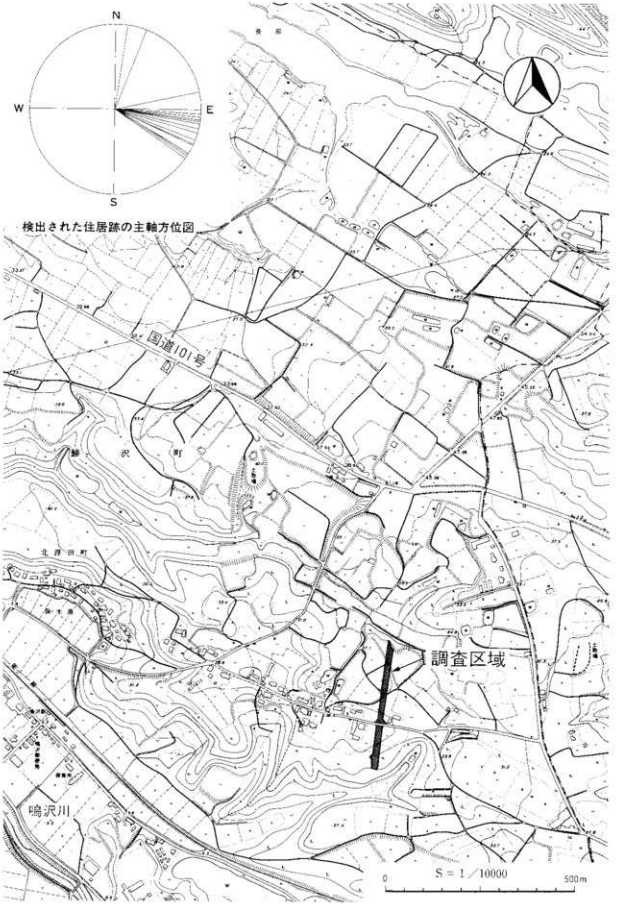


図5　外馬屋前田遺跡周辺の地形と検出された住居跡の主軸方位図

表1　周辺の遺跡

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	備考
15003	浮橋貝塚	鰺ヶ沢町小屈敷字浮橋	縄文（前・中・後）、平安	弘前教育委員会「岩木山」、村越潔「浮橋遺跡出土の土器」「十腰内土器集成」
15004	浮橋遺跡	鰺ヶ沢町字小屈敷字浮橋	縄文（前・後）、平安	
15014	赤沢遺跡	鰺ヶ沢町字若山、七尾	縄文（前・後・晩）、平安	青森県教育委員会「赤沢遺跡」
15016	館遺跡	鰺ヶ沢町舞戸町字鷲見	縄文（中・晩）、平安	
15022	間木	鰺ヶ沢町間木町	不明	
15025	外馬屋遺跡	鰺ヶ沢町北浮田町字外馬屋	平安	弘前教育委員会「岩木山」
15026	若山遺跡	鰺ヶ沢町湯舟町字若山	平安	弘前教育委員会「岩木山」
15028	大平野遺跡	鰺ヶ沢町建石町字大平	縄文（後・晩）	弘前教育委員会「岩木山」
15029	大館森山遺跡	鰺ヶ沢町建石町	平安	弘前教育委員会「岩木山」、西崎泰也「大館森山遺跡出土の土器」「土器型土器集成」
15030	長平遺跡	鰺ヶ沢町長平町	平安	
15033	三ツ沢遺跡	鰺ヶ沢町舞戸町字三ツ沢	縄文、平安	
15035	今須(1)遺跡	鰺ヶ沢町北浮田町字今須	縄文(早・前・後・晩)、弥生、平安	
15037	今須(3)遺跡	鰺ヶ沢町北浮田町字今須	縄文(中・後)、奈良、平安、中世	
15038	今須(4)遺跡	鰺ヶ沢町北浮田町字今須	縄文（前・後）	
15039	平野(1)遺跡	鰺ヶ沢町北浮田町字平野	縄文（後・晩）、弥生	
15040	新沢(1)遺跡	鰺ヶ沢町北浮田町字新沢	縄文(前・中・後・晩)、奈良、平安	
15041	新沢(2)遺跡	鰺ヶ沢町北浮田町字新沢	縄文（晩）、弥生、平安	
15042	外馬屋前田(1)遺跡	鰺ヶ沢町北浮田町字外馬屋前田	縄文(前・中・後)、弥生、平安	
15043	外馬屋前田(2)遺跡	鰺ヶ沢町北浮田町字外馬屋前田	縄文(中・後)、弥生、平安	
15057	湯舟(3)遺跡	鰺ヶ沢町湯舟町字若山	縄文（前・後・晩）、平安	
15063	大平(3)遺跡	鰺ヶ沢町建石町字大平	縄文（前・後・晩）、平安	
15065	甲音羽山(1)遺跡	鰺ヶ沢町長平町字甲音羽山	縄文（前・後）、平安	
15067	甲音羽山(3)遺跡	鰺ヶ沢町長平町字甲音羽山	縄文（前・後）、平安	
15068	甲音羽山(4)遺跡	鰺ヶ沢町長平町字甲音羽山	縄文（中）、平安	
15073	上清水崎(1)遺跡	鰺ヶ沢町中滝字上清水崎、長平町字[illegible]	縄文（前・後）、平安	
15074	甲音羽山(5)遺跡	鰺ヶ沢町長平町字甲音羽山	縄文（後・晩）、平安	
15077	上清水崎(2)遺跡	鰺ヶ沢町中滝字上清水崎、舞戸町字[illegible]	縄文（前・中・後）、平安	
15102	金沢街道沢(1)遺跡	鰺ヶ沢町南字田町字金沢街道沢	平安	
15103	金沢街道沢(2)遺跡	鰺ヶ沢町舞戸町字鳴戸、南字田町	縄文、平安	
15104	金沢街道沢(3)遺跡	鰺ヶ沢町南字田町字金沢街道沢	平安	
15107	東禿(2)遺跡	鰺ヶ沢町舞戸町字東禿	平安	
15110	鳴戸(2)遺跡	鰺ヶ沢町舞戸町字鳴戸	平安	
15111	鳴戸(3)遺跡	鰺ヶ沢町舞戸町字鳴戸	平安	
15115	小夜遺跡	鰺ヶ沢町舞戸町字小夜72-67-1外	縄文（後）、平安	
16004	緩沢溜池中島遺跡	木造町越水神山	縄文、平安	
16033	神山(1)遺跡	木造町越水字神山	縄文（前・後）、平安	
16034	神山(2)遺跡	木造町越水字神山、越水字今村	縄文(前・後・晩)、弥生、平安	
02119	猿沢(2)遺跡	弘前市十腰内字猿沢	縄文（後・晩）、平安	

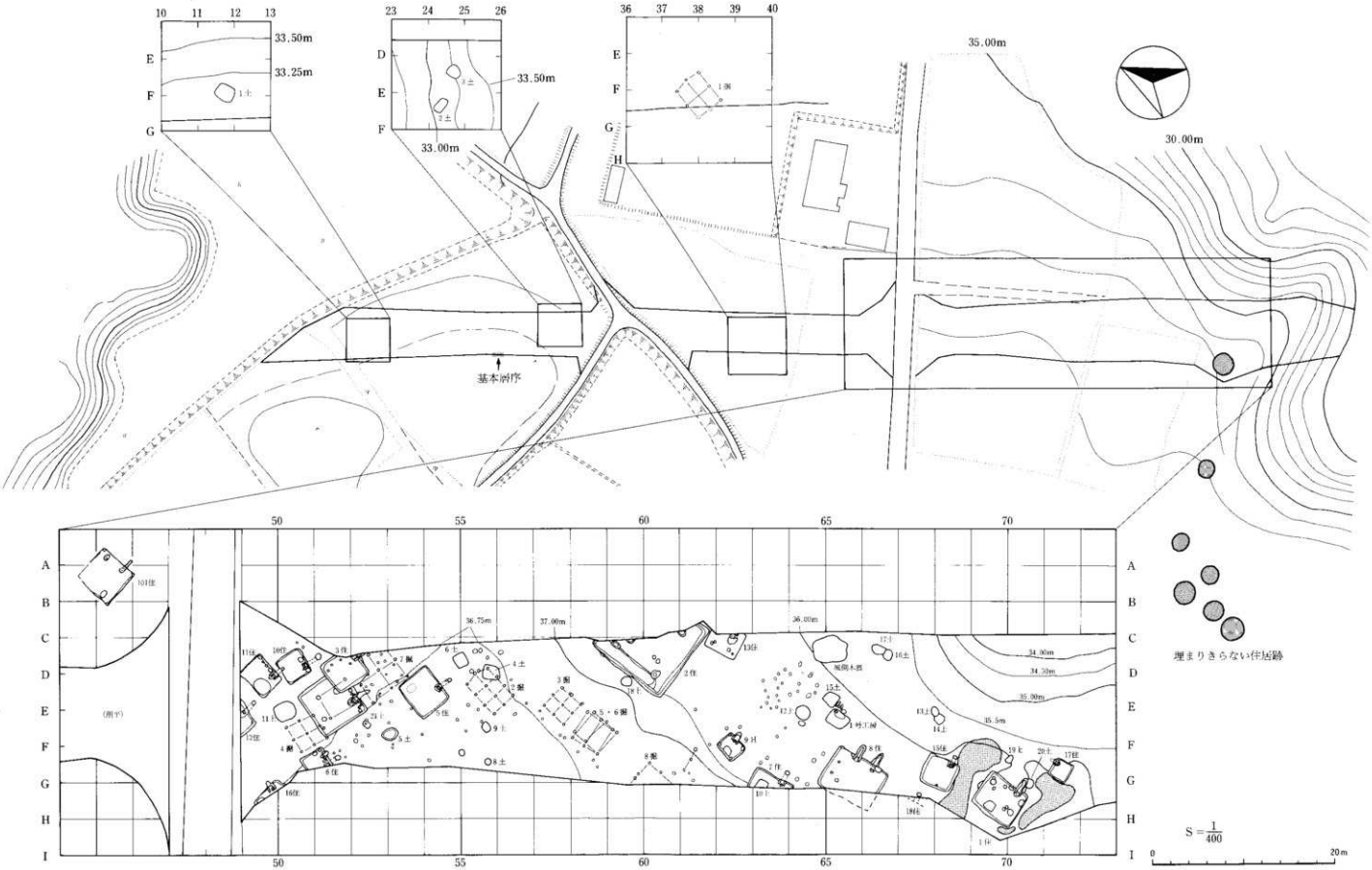

33.50m
33.25m
33.50m
33.00m
35.00m
30.00m
基本層序
埋まりきらない住居跡
S = 1/400
0
20m

図6　遺構配置図

第３章　外馬屋前田(1)遺跡の検出遺構と出土遺物

第１節　検出遺構と遺構内出土遺物

1　竪穴住居跡

第１号住居跡（図７～18、写真２・３・18・19）

［位置］　G－69・70グリッドに位置している。周堤のみられた焼失家屋である。調査のために草刈りをした時点で、径約６ｍ、深さ約40cmの開口部を持つ円形の窪みとして確認し、表土からベルトを設定した。

［重複］　第20号土坑と重複し、これより新しい。

［平面形・規模］　平面形は長方形で、規模は東壁4.80m、南壁4.20m、西壁５ｍ、北壁4.20mである。推定床面積は、20.10m²前後である。主軸方位はＮ－98°－Ｅである。

［壁・床面］　壁高はカマドを有する東壁で35～60cmと低く、南壁・西壁・東壁では70～80cm前後である。床面は中央部やや北東寄りに緩やかな窪みがあり、全般に堅緻である。

［カマド］　東壁の南寄りのところ、壁辺のおよそ三分の一の所に構築されている。同位置での改築が認められ、煙道部は地下式（旧）から半地下式（新）へと改築されている。

新カマドの本体は砂質粘土、整形した砂質粘土・安山岩、羽口とで構築されている。特に焚口周辺の右袖には羽口がそのまま袖として使用されていた。内壁の幅40～50cm、奥行き210cmほどである。支脚は、底面を５cmほど掘って折れた羽口を差し込んで使用している。焚口から支脚周辺までが焼土化しており、羽口の手前では20～30cm程の硬い酸化面を形成している。煙道部は半地下式で、旧カマドの煙道部を崩した上に構築しているが、わずかに旧カマドより北側にずれている。壁辺から150cm外方へ延びており、底面はやや階段状に立ち上がる。３～６層が天井部、７～９層が煙道部覆土である。

旧カマドは、同位置で改築が行われたために煙道部のみを検出した（11～20層）。20号土坑を切って構築されている。地下式の構造で、支脚の奥辺りから外側へ向かって緩やかに深くなるように掘り込まれ、煙出し孔で垂直に立ち上がる。最も深くなるのは煙出し孔部分で115cmである。煙出し孔の周辺には幅20cm、深さ60cm程の掘り方が掘られている（21～24層）。

［壁溝］　壁溝はカマドとカマド北脇を除いて一周するものと思われ、幅10～20cm、深さ10～20cmである。また、各コーナーと北壁・南壁中央部では壁高より深く柱穴状に掘り込まれている（柱穴の項で述べる）。そのほかの部分でもかなりの凹凸がみられる。

［柱穴・ピット］　床面及び壁溝内から15個のピットを検出した。このうち主柱穴はＰ10・Ｐ11・Ｐ12Ｐ13であり、補助柱穴はＰ14・Ｐ15である。Ｐ１～Ｐ９はどれも浅く、鉄滓や焼土ブロック等が比較的多く出土した。

［土　坑］　西壁寄りから東西90cm、南北100cm、深さ50cm程の長方形気味の土坑を検出した。上部には十和田ａ火山灰の堆積が見られた。また、土坑の東壁にもたれかかるような状態で、幅10～20cm、長さ50cm、厚さ2cmの板材が出土した。底面付近からは、炭化した小枝・樹皮・縄・栃の実７点、土玉１点等が出土した。

［堆積土］　表土から床面直上まで17層に分層できた。このうち13～17層は壁溝の堆積土である。7層を主体とする7～10層からは火山灰がブロック状に検出された。また、床面直上の9層からは多量の炭化材を検出している。火山灰は9層上半の炭化材の直下にみられるものもあったが、9層下半の炭化物の直下にはみられなかった。分析の結果、白頭山火山灰と判定された。

［周　堤］　カマドを有する東側を開口部として住居跡を馬蹄形に囲む周堤を検出した。しかし西側が調査区外に出るため全部は調査できなかった。幅は1～4mで開口部付近で最も広くなり、高さは10～25cm程でレンズ状に堆積している。堆積土は3層に分けられ、下に黒褐色土、上にローム土が盛られている。住居の上端から周堤までは60cm程離れており、上端から周堤に向かって緩やかに立ち上がる。従って住居の上端から周堤の頂部までは50cm近くの高低差がある。18層としたものは堆積土ではないが、上面が堅緻で光沢がみられた。

［炭化材］　板材がほとんどである。小枝状またはタルキ状のものは所々に見られたが、構造と関連づけられる検出状況にはない。西壁の南寄りの壁溝内から、住居内に向かって傾いた状態で炭化した3枚の腰板を検出した。腰板は幅・長さとも30cm前後、厚さ2cmで、木目は縦方向である。途中で折れており、同一のものと思われる板材が床面直上から倒れた状態で検出された。

［出土遺物］　焼失家屋のため、多くの遺物が出土した。総数では、土師器の甕片約1320点、坏片約80片、鍋片4点、支脚片1点、須恵器の大甕片約30点、壺片1点、砥石5点、台石5点、敲磨器1点、赤色顔料の付着した石1点、羽口5点、紡錘車・刀子等の鉄製品4点、鉄滓38点、土玉1点、炭化した栃の実7点である。土師器甕はカマドの焚口周辺と、カマド右脇からまとまって出土した。鉄製品・鉄滓・砥石のほとんどはカマドとピット7から出土した。また、図13-1・3、図15-6が第19号土坑から出土した土器片と接合した。更に、第17号住居跡から出土した図67-1、図68-3に本住居跡の7層・9層から出土した土器片がそれぞれ接合した。　（赤羽　真由美）

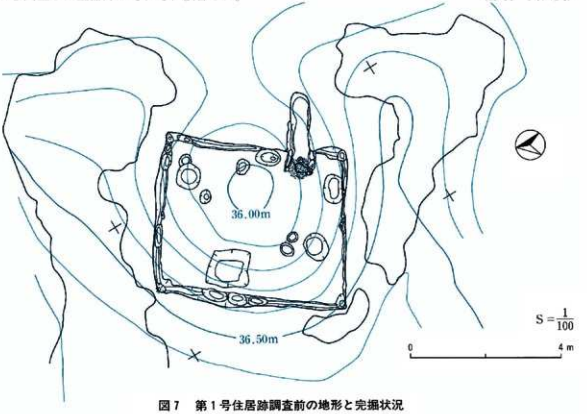


図7　第1号住居跡調査前の地形と完掘状況

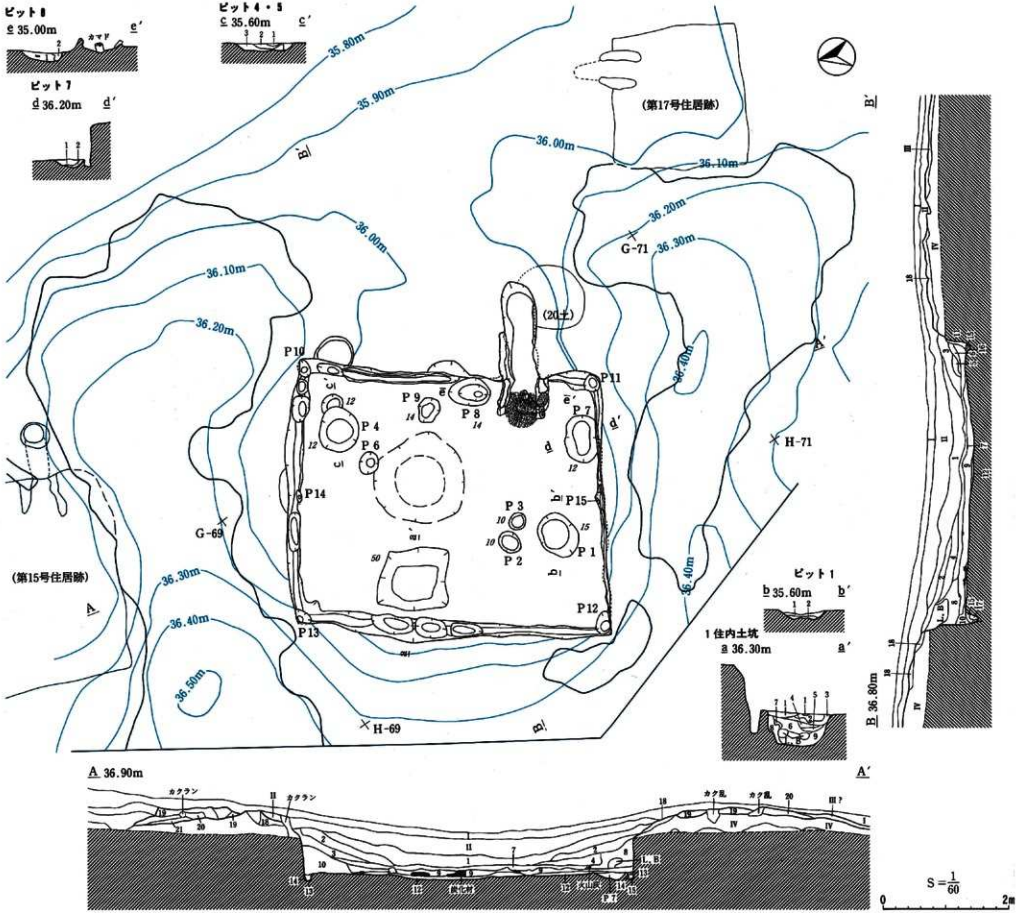


図8　第1号住居跡

第1号住居跡

第1層	暗褐色土	10YR2/1	シルト。しまりあり。壁近くではしまり強い。焼土粒、炭化物微量混入。
第2層	暗褐色土	10YR3/3	シルト。粘性ややあり。焼土粒、炭化物微量混入。L、B少量混入。
第3層	暗褐色土	10YR3/4	粘土質。ローム粒微量混入。
第4層	黒褐色土	10YR3/2	粘土質。焼土粒、炭化物微量混入。
第5層	暗褐色土	10YR3/4	粘土質。しまりあり。ロームを主体とした流れ込み土。
第6層	オリーブ褐色土	2.5YR4/6	床面のように硬くしまる。ローム土主体で焼土粒、炭化物微量混入。6層直下に火山灰をブロックで混入。
第7層	黒褐色土	10YR3/1	粘土質。湿性あり。焼土、炭化物均等に中量混入。火山灰をブロックで混入。
第8層	暗褐色土	10YR3/4	粘土質。しまりあり。上半部にL、B多く混入。下半部は焼土粒、炭化物、火山灰粒少量混入。
第9層	暗褐色土	10YR3/3	粘土質。硬くしまる。湿性あり。焼土ブロック、炭化物中量混入。特に西側に集中。
第10層	褐色土	10YR4/6	粘土質。ローム土主体。7、8層と同レベルに炭化材、火山灰ブロックを混入。
第11層	褐色土	10YR4/6	粘土質。ローム土主体で硬くしまる。焼土粒を微量混入。
第12層	褐色土	10YR4/4	粘土質。非常に硬くしまる。焼土粒、炭化物中量混入。火山灰は含まれない。
第13層	褐色土	10YR4/4	周溝内堆積土。粘性、湿性ややあり。もろい。
第14層	褐色土	10YR4/6	周溝内堆積土。しまりなし。
第15層	黄褐色土	10YR5/6	周溝内堆積土。粘性あまりなし。ややしまりあり。
第16層	褐色土	10YR4/6	周溝内堆積土。粘性なし。よくしまっている。
第17層	褐色土	10YR4/6	周溝内堆積土。L、B主体でもろい。
第18層	暗褐色土	10YR3/3	シルト。よくしまって硬い。ローム粒、炭化物微量混入。18層上部はテカリがある。
第19層	褐色土	10YR4/4	周堤層。粘性ややあり。しまりあり。ローム土と暗褐色土との混合土。
第20層	褐色土	10YR4/6	周堤層。粘性あり。ローム土主体で硬くしまる。暗褐色土ブロック、炭化物少量混入。
第21層	黒褐色土	10YR3/4	盛土層。粘性なし。硬くしまる。L、B、焼土ブロック、炭化物少量混入。

第1号住居跡内土坑

第1層	褐色土	10YR4/6	炭化物少量、焼土微量混入。
第2層	黒褐色土	10YR2/2	炭化物少量、火山灰微量混入。
第3層	暗褐色土	10YR3/4	炭化物・焼土微量混入。
第4層	褐色土	10YR4/4	十和田a火山灰主体層。
第5層	暗褐色土	10YR3/3	炭化物少量混入。
第6層	褐色土	10YR4/4	土器混入。
第7層	黄褐色土	10YR5/6	L、B主体層。
第8層	黄褐色土	10YR5/8	L、B主体で崩れやすい。
第9層	暗褐色土	10YR3/4	炭化種子、炭化材混入。

ピット1

第1層	暗褐色土	10YR3/3	焼土粒微量、炭化物中量混入。
第2層	黄褐色土	10YR5/6	炭化物微量混入。

ピット4

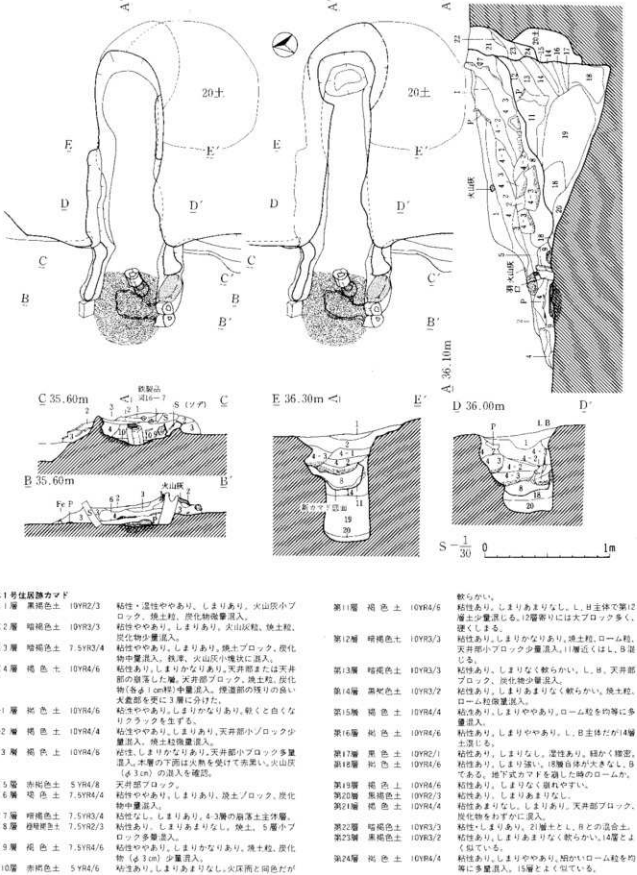
第1層	黄褐色土	10YR5/6	
第2層	褐色土	10YR4/4	焼土・炭化物少量混入。
第3層	暗褐色土	10YR3/3	焼土・炭化物中量混入。

ピット5

第1層	褐色土	10YR4/6	炭化物微量混入。

ピット7

第1層	黄褐色土	10YR5/6	焼土・炭化物少量。鉄滓中量。
第2層	暗褐色土	10YR3/4	焼土中量。土器少量。鉄滓多量。



第1号住居跡カマド

第1層	黒褐色土	10YR2/3	粘性・湿性ややあり。しまりあり。火山灰小ブロック、焼土粒、炭化物微量混入。
第2層	暗褐色土	10YR3/3	粘性ややあり。しまりあり。火山灰粒、焼土粒、炭化物少量混入。
第3層	暗褐色土	7.5YR3/4	粘性ややあり。しまりあり。焼土ブロック、炭化物中量混入。秩準、火山灰小塊状に混入。
第4層	褐色土	10YR4/6	粘性あり。しまりかなりあり。天井部または天井部の崩落した層。天井部ブロック、焼土粒、炭化物(径2cm程)中量混入。焼道部の残りの良い大倉部を更に3層に分けた。
4-1層	褐色土	10YR4/6	粘性ややあり。しまりかなりあり。軟くて白くなりクラックを生ずる。
4-2層	褐色土	10YR4/4	粘性ややあり。しまりあり。天井部小ブロック少量混入。焼土粒微量混入。
4-3層	褐色土	10YR4/6	粘性、しまりかなりあり。天井部小ブロック多量混入。木屑の下西は火熱を受けて赤茶い。火山灰(径3cm)の混入を確認。
第5層	赤褐色土	5YR4/8	天井部ブロック。
第6層	褐色土	7.5YR4/4	粘性ややあり。しまりあり。焼土ブロック、炭化物中量混入。
第7層	暗褐色土	7.5YR3/4	粘性なし。しまりあり。4-3層の崩落土主体層。
第8層	暗黒色土	7.5YR2/3	粘性あり。しまりあまりなし。焼土、5層小ブロック多量混入。
第9層	褐色土	7.5YR4/6	粘性ややあり。しまりかなりあり。焼土粒、炭化物(径3cm)少量混入。
第10層	赤褐色土	5YR4/6	粘性あり。しまりあまりなし。火床面と同色だが軟らかい。
第11層	褐色土	10YR4/6	粘性あり。しまりあまりなし。L、B主体で第12層土少量混じる。L層寄りには大ブロック多く、硬くしまる。
第12層	暗褐色土	10YR3/3	粘性あり。しまりかなりあり。焼土粒、ローム粒、天井部小ブロック少量混入。11層近くはL、B混じる。
第13層	暗褐色土	10YR3/3	粘性あり。しまりなく軟らかい。L、B、天井部ブロック、炭化物少量混入。
第14層	黒褐色土	10YR3/2	粘性あり。しまりあまりなく軟らかい。焼土粒、ローム粒微量混入。
第15層	褐色土	10YR4/4	粘性あり。しまりややあり。ローム粒を均等に多量混入。
第16層	褐色土	10YR4/6	粘性あり。しまりややあり。L、B主体だが14層土混じる。
第17層	黒色土	10YR2/1	粘性あり。しまりなし。湿性あり。経かく緻密。
第18層	褐色土	10YR4/6	粘性あり。しまり強い。18層自体が大きなL、Bである。地下式カマドを造した時のローム小。
第19層	褐色土	10YR4/6	粘性あり。しまりなく崩れやすい。
第20層	黒褐色土	10YR2/3	粘性あり。しまりあまりなし。
第21層	褐色土	10YR4/4	粘性あまりなし。しまりあり。天井部ブロック、炭化物をわずかに混入。
第22層	暗褐色土	10YR3/3	粘性・しまりあり。21層寄と、B との混合土。
第23層	黒褐色土	10YR3/2	粘性あり。しまりあまりなく軟らかい。14層とよく似ている。
第24層	褐色土	10YR4/4	粘性あり。しまりややあり。焼かいローム粒を均等に多量混入。15層とよく似ている。

図9　第1号住居跡カマド

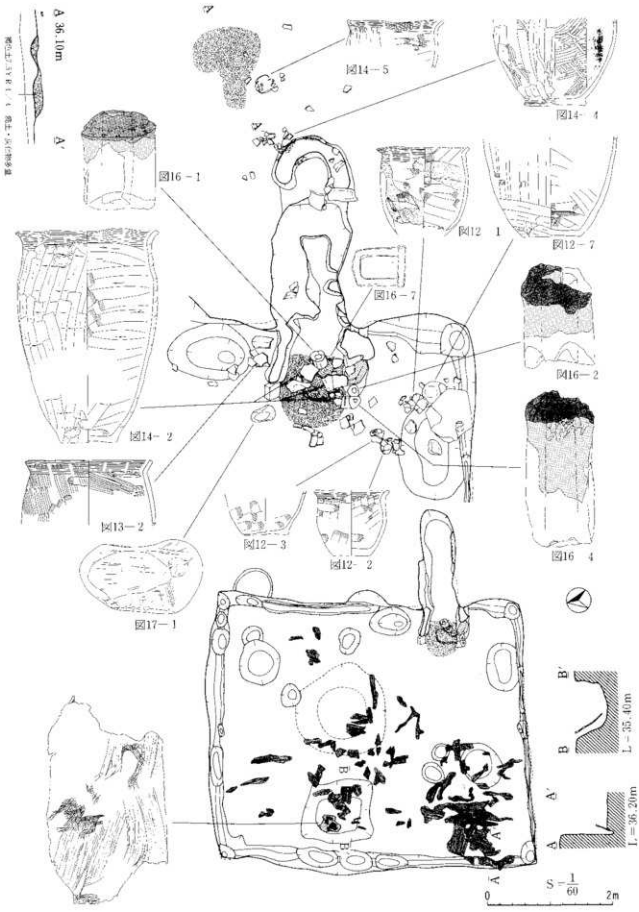


図10　第１号住居跡カマド遺物・炭化材出土状況

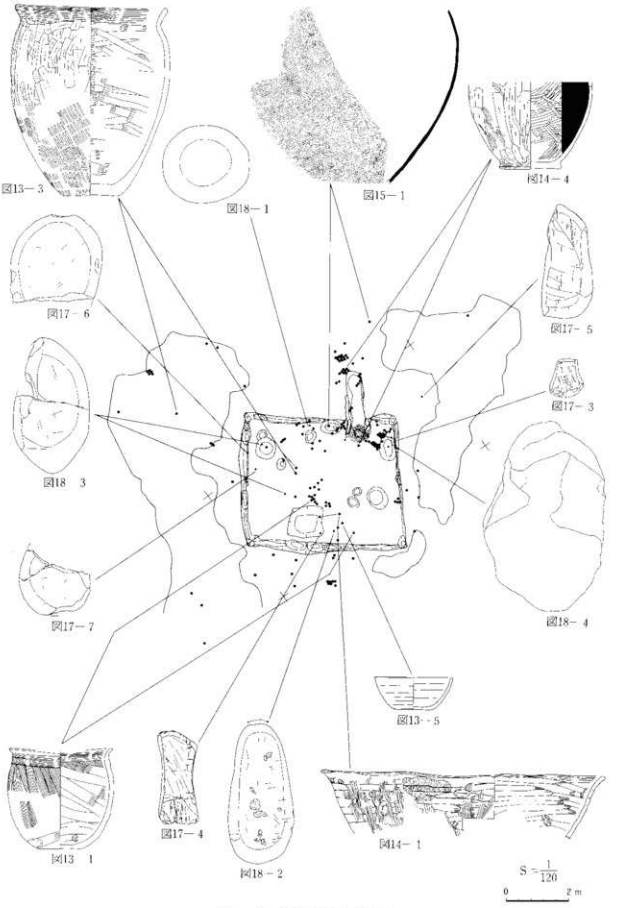
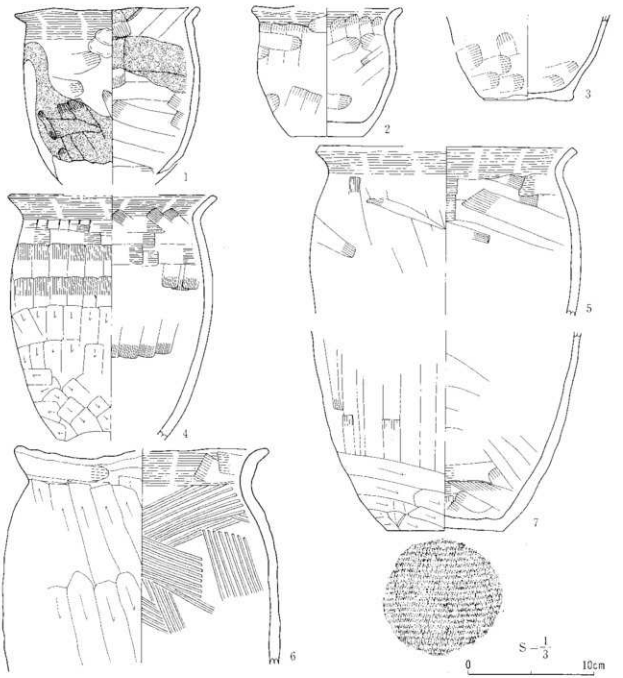
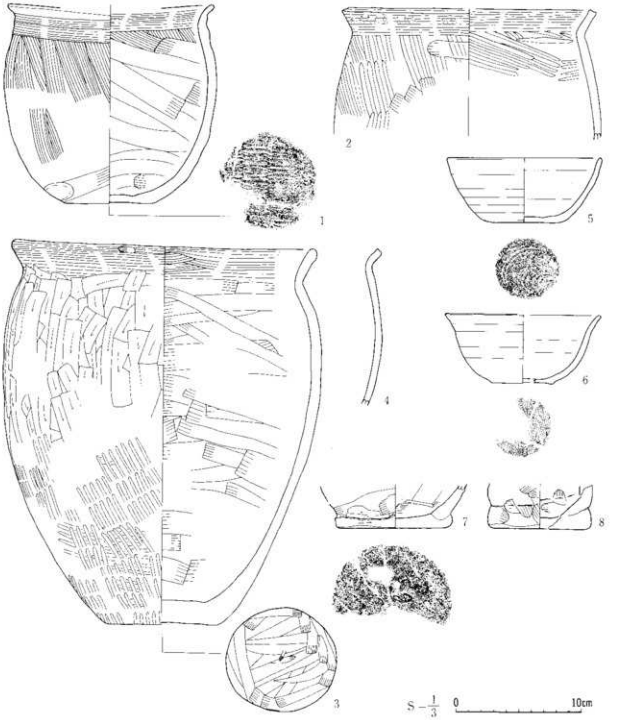


図11　第１号住居跡遺物出土状況



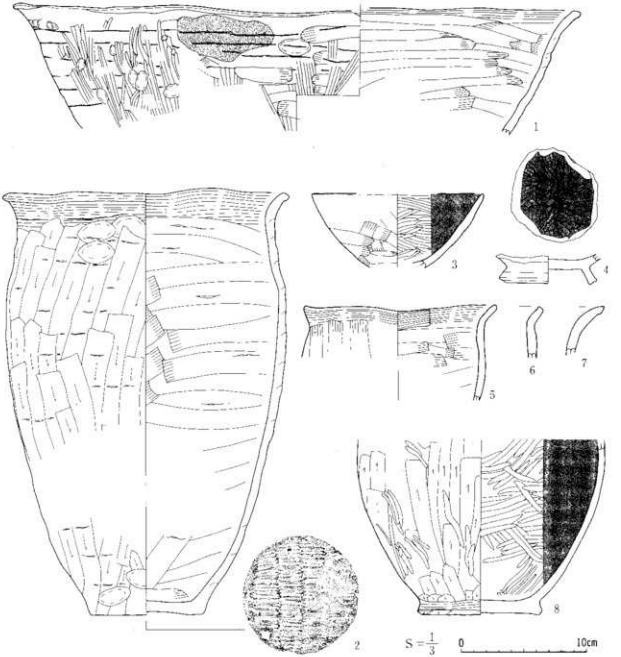
番号	種類	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底部調整	胎土	分類	備考	実測No.
1	土師器	壺	カマド	覆土	24.5	－	14	ヨコナデ、ユビナデ	ヘラナデ		小礫少量	BIIb	内外面にススが付着	16
2	〃	椀	カマド	6層	(10.4)	6	10.4	ヨコナデ、ヘラナデ	ユビナデ	－	粗砂多量	CII		6
3	〃	壺	カマド	6層	－	6.8		ユビナデ	ユビナデ	ナデ	粗砂多量	BVb	風化激しい	3
4	〃	椀	周堤	周堤	16.4	－	－	ヨコナデ ハケメ→ヘラナデ→ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ		粗砂多量	BIIb		10
5	〃	壺	カマド	3層	(21.0)			ヨコナデ、ナデ	ヘラナデ	－	小礫多量	AIII	風化激しい	3
6	〃	椀	カマド	9層	(20.0)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ハケメ→ ヨコナデ→ヘラナデ	－	小礫多量	AII		12
7	〃	壺	カマド	6層	－	9.3	－	ヘラナデ→ケズリ	ヘラナデ、ユビナデ	網代痕	小礫多量	AVb		7

図12　第1号住居跡出土遺物－1



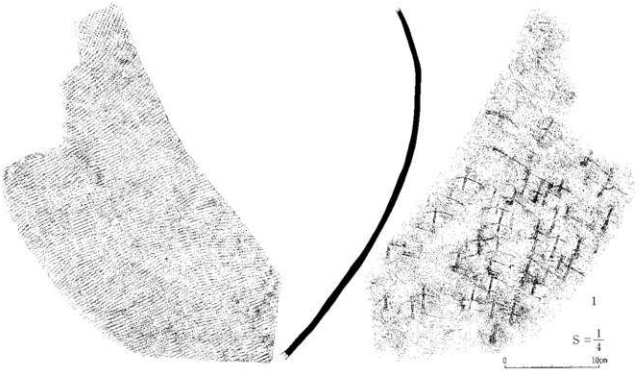
番号	種類	器種	出土位置		層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	胎土	焼成	色調	備考	実測番号
1	土師器	甕	(G 68)	床直		(36.4)	7.6	(6.9)	ヨコナデ ハケメ→ヘラナデ	ヨコナデ ハケメ→ヘラナデ	雲母	粗砂多量	明褐色	19土2層と接合	11
2	〃	鉢	カマド	3層		20.4		—	ヨコナデ ハケメ→ヘラナデ	ハケメ→ヨコナデ		粗砂中量	明褐色		18
3	〃	甕		床A		24	8.8	30.5	ヨコナデ ケズリ・ケタルメ	ヘラナデ、ユビイデ	ヘラナデ	粗砂中量	AII	19土2層と接合	14
4	〃	甕	Pit 8			—	—		ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	—	粗砂中量	AIV		20
5	〃	坏	—	床面		12.4	4.9	5.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切		A2c		15
6	〃	坏	カマド	3層		12.8	4.8	5.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切		A2b		17
7	〃	甕	Pit 1	2層			9.4	—	ヘラナデ→ケズリ	ヘラナデ	本質質	粗砂多量	AVa		30
8	〃	支脚	Pit 2	1層		—	(8.4)		ユビナデ	ユビナデ	砂質	小粒多量	輪積痕明瞭		25

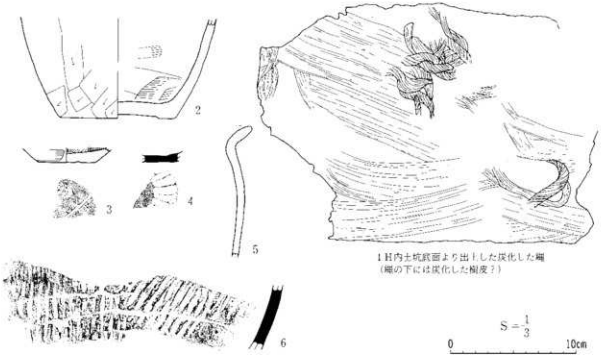
図13　第1号住居跡出土遺物―2



番号	器種	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底部調整	胎土	分類	備考	実測番号
1	土師器	甕	－	表土掘り埋	4.5	－	－	ナデ→ミガキ	ヘラナデ	－	小礫少量			22
2	〃	壺	カマド	9層	23.0	9.0	33.5	ヨコナデ→ケズリ	ケコナデ・ケズリ	ナデ	小礫多量	AIII		13
3	〃	坏	(H 7)	覆土	(13.0)	－	－	ヘラナデ	ミガキ		密	A1b	内面黒色処理	24
4	〃	高台付坏	－	3層	－	6.6	－	ヨコナデ	ミガキ	回転糸切	密	AII	内面黒色処理	23
5	〃	壺	表採	現耕土	15.8	－	－	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	小礫多量	B1a	焼成悪い	1
6	〃	壺	(F 20)	生活面	17.0	－		ヨコナデ	ヨコナデ	－	小礫	BIV		31
7	〃	壺	－	覆土		－	－	ヘラナデ	ヨコナデ	－	小礫少量	BIV	口唇部横撫痕跡	27
8	〃	甕		6層	－	9.4		ケズリ→ミガキ	ミガキ	糸切	小礫少量		内面黒色処理	4

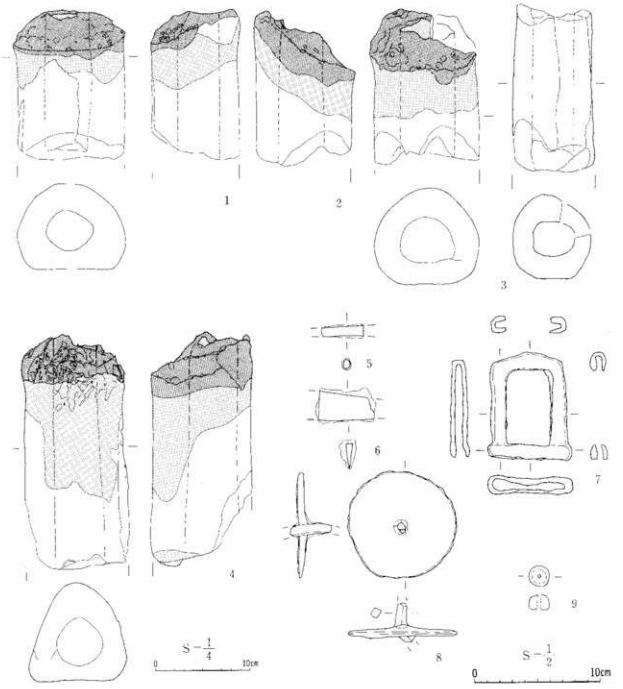
図14　第１号住居跡出土遺物―３





番号	器種	部位	出土位置	胴径	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	分類	備考	整理番号
1	深鉢形	大型	口付8	覆土	－	－	－	タタキメ（格子）	当て具痕		砂少量		灰白(黄)色にぶい赤褐色 胎土分析No.8	X-7
2	土師器	甕	周堤	周堤上	－	8.9	－	ケズリ	ヘラナデ、ユビナデ	ナデ→ケズリ	粗砂多量	AVb		2
3	〃	坏	周堤	周堤上		(4.6)	－	ナデ	ミガキ	ナデ後ケズリ	密	BIa	内面黒色処理	26
4	須恵器	甕	－	覆土	－			－		線刻文	－		胎土分析No21	X-21
5	土師器	甕	ホリ状遺構	遺構西	(25.4)	－	－	ヨコナデ→ヘラナデ	ヘラナデ		粗砂多量	AIV	焼成悪い	19
6	須恵器	甕	埋甕付近	住周下			－	タタキメ（平行）	ヘラナデ	－	粗砂少量		にぶい黄橙色 19と2種と接合 胎土分析No.9	X-9

図15　第１号住居跡出土遺物―４

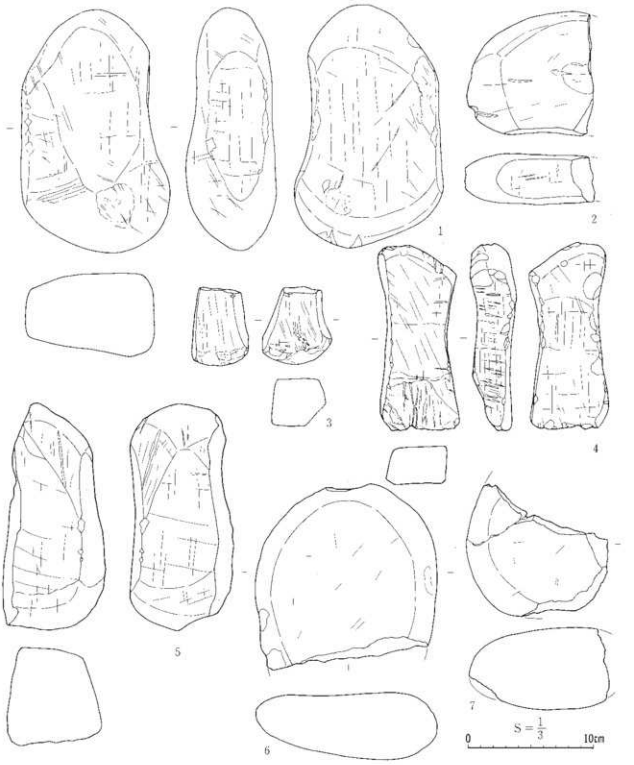


番号	種類	出土位置	層位	長さ(cm)	外径(cm)	内径(cm)	重量(g)	備考	挿図番号
1	鍋口	1住カマド	炭面	25.8	11.3	5.0	1176.9	支脚	9
2	〃	1住カマド	炭層	26.5	11.2	5.8	977	カマド構材	11
3	〃	1住カマド	3層	27.7	8.3	3.0	983.2		15
4	〃	1住カマド	炭面	24.8	10.4	3.0	1742.5	カマド構材	3

番号	種類	名称	出土位置	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	磁器度	備考	挿図番号
5	鉄製品	鉸具？	1住 P 7	覆土	2.2	0.5	0.5	1.8	A		15
6	〃	刀子	1住 P 1	2層	3.9	1.5	0.4	5.1	C		16
7	〃	アミ状	2住カマド	覆土	5.7	4.0	0.9	16.9	A		2
8	〃	紡錘車	1住 P 7	覆土	－			23.0	B	〈紡輪〉直径5.1cm厚0.6cm〈紡軸〉長さ2.1cm幅2.1cm厚さ1cm	1

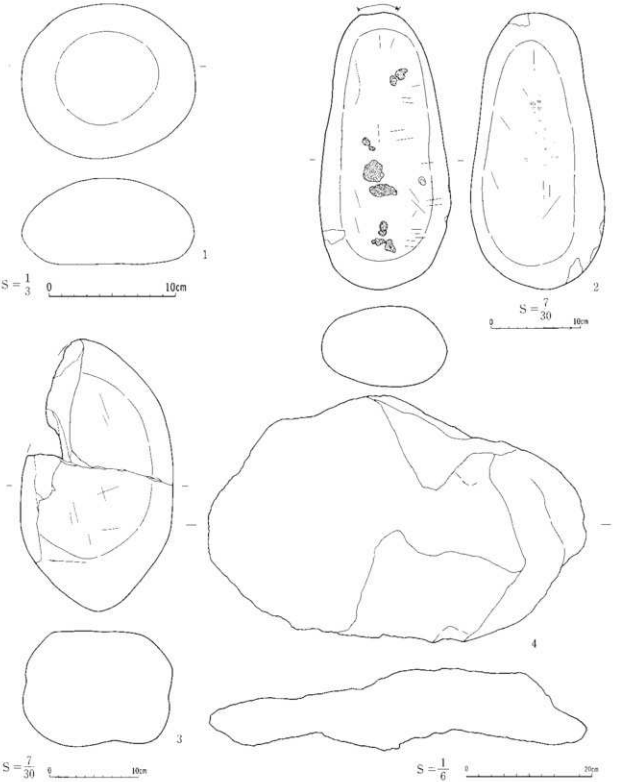
番号	種類	名称	出土位置	層位	長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考	挿図番号
9	土製品	土三	1住Pit三	覆土6層	－	－	0.2	1.1	直径1cm	

図16　第1号住居跡出土遺物－5



番号	種類	出土地：層	器種	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図番号
1	石器	1住カマド床面	砥石	A 1	変成岩	19.4	11.8	7.1	1940.0	S番号なし。	84
2	〃	1住ピット7	砥石	A 3	変山岩	10.3	10.0	4.1	451.6	S 2。表裏ザラつく。粗編か。1面に浅い打痕。	62
3	〃	1住ピット7	砥石	A 1	変成岩	6.2	4.6	3.2	144.1	S—3。欠損。	69
4	〃	1住9層	砥石	A 1	変成岩	(14.9)	6.2	3.4	406.1	S—7。4面利用。割れ口・側面に強い擦痕。	135
5	〃	1住埋土	砥石	A 1	変成岩	18	(8.1)	(7.8)	1541.0	S 1。2面使用。割れ口にも研磨痕。	137
6	〃	1住ピット7	当石屋	C 2	変成岩	(13.7)	16.4	5.3	1663	S—1。地熱。全体に平滑。とくに平坦面残るか。	115
7	〃	1住9層	石皿類	C 2	変山岩	(10.5)	(11.3)	(6.6)	934.1	S 3。1ヶ所ハ。地熱。側面焼るか。	154

図17　第1号住居跡出土遺物—6



番号	種類	出土地点	器種	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	実測番号
1	石器	1住覆土	台石類	C 2	凝灰岩	22.4	13.8	6.9	1673	S−4。大く整形。ザラつく。	112
2	〃	1住覆土	不明	D 2	凝灰岩	32.4	14.8	9.0	5626	S−6。被熱。表面に焼ムラあり。U面に帯状の黒色物質付着。	75
3	〃	1住覆土	台石類	C 3	凝灰岩	30.5	17.2	13.0	9800	S−2+3。被熱。表面平滑（特に平坦面）。	139
4	〃	1住ピット7	不明	D 1	安山岩	60.2	38.4	11.6	27600	S−1。赤色顔料付着。分析資料。（第4表第6節参照）	140

図18　第1号住居跡出土遺物―7

第２号住居跡（図19・20、写真３・20）

［位置］　Ｃ・Ｄ―58～61グリッドに位置している。東側部分が調査区域外にかかっており、全体を調査できなかった。

［重複］　無し。

［平面形・規模］　平面形はほぼ方形で、南壁9.40m、西壁9.60mで、推定床面積は80m²前後と思われ、本遺跡の中でも最大規模の大きさである。カマドが東壁側にあるとすると、主軸方位はＮ―103°―Ｅ前後と推定される。

［壁・床面］　壁高は65～75cm前後である。全般に、床面は平坦で堅緻である。西壁沿いの幅１ｍほどの部分は、内側より３～７cmほど一段高くなっており、内側よりも硬く踏みしめられている。

［カマド］　調査区域外にあると思われ、検出できなかった。東壁側にあると推定される。

［壁溝］　検出した壁溝は、深さ25～35cmであり、一周するものと思われる。部分的に溝状に60～80cmほど深く掘り込まれている部分や、柱穴状に掘り込まれている部分もある。

［柱穴・ピット］　６個のピットを検出した。このうち、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ６が主柱穴と思われる。これらのピットの掘り方平面形は隅丸方形状を呈し、床面からの深さは70～80cmである。また、Ｐ５はＰ１の、Ｐ３はＰ２の補助柱穴の可能性がある。Ｐ５・Ｐ３のピットの掘り方の平面形は円形あるいは楕円形状で、床面からの深さは50cm前後である。なお、ピットの壁上部には崩れたような状況が見られた。

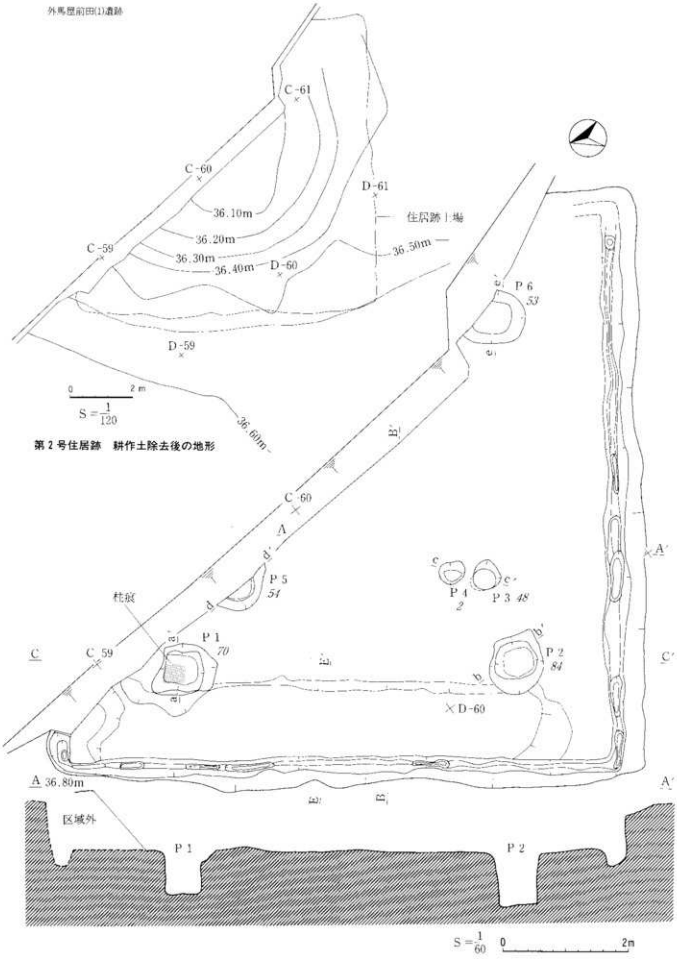
Ｐ１の覆土は５層に分層でき、１～３層はそれぞれ住居跡覆土の第３層（または第４層）・第５層・第６層に相当する。３層の火山灰は肉眼観察では白頭山火山灰かと思われたが、分析の結果白頭山火山灰の領域に合致しなかった（第４章第４節参照）。４層は、ローム・ブロックを多量に含んだにぶい黄褐色土であり、平面での確認では方形状に見られた。柱が抜き取られた跡に人為的に埋められたと思われ、柱の抜き取り痕跡を示していると考えられる。第５層はローム質の褐色土で、これも人為的に埋められている。Ｐ２・Ｐ３・Ｐ５・Ｐ６の上部にも、火山灰の堆積が見られたが、柱の痕跡は見られなかった。なお、Ｐ２・Ｐ３の１～４層はＰ１の１～３層・５層に、Ｐ５の１層・２層はＰ１の２層・５層に相当する。

［堆積土］　住居跡を耕作土が覆っている（第19図）。耕作土を取り除くと大きな窪地となり、埋まりきらない住居跡の様相を示した。耕作土より下位は自然堆積で、床面近くに白頭山火山灰の堆積が見られている（５・６層）。６層は広く面的に見られている。

［出土遺物］　出土遺物はわずかである。床面及び床面直上の甕片13点、坏片３点、鉄滓１点、砥石片？１点を含む甕片約90点、坏片10点、ミニチュア片２点、羽口片２点、スクレイパー１点、Ｒフレイク１点、砥石１点、鉄鎖位１点、縄文土器１点が全てである。このうち、床面から出土した３は覆土１・２層から出土した土器片と接合した。

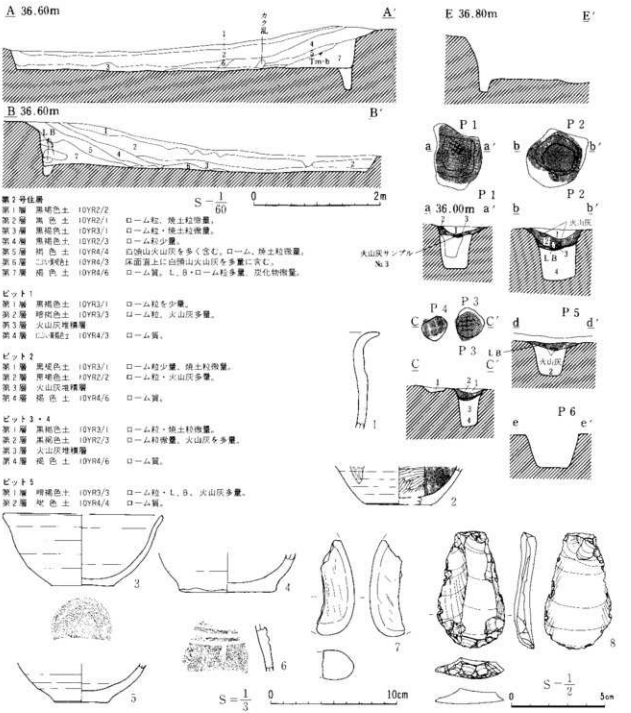
［小結］　耕作土が住居跡を覆っており、埋まりきらない住居跡の一つであることが確認出来た。全体を調査できなかったが、本住居跡は今回の調査の中でも最大の規模である。住居跡の内側に主柱の４本が立ち、それを補助する柱の存在も確かめられた。また、西壁に沿った部分が段状にやや高くなっている構造も判明した。さらに、遺物がほとんど残されていないことから、住居の廃棄行為に際して、住居内の遺物の整理がなされ、柱が抜き取られたものと思われる。住居の廃棄後に白頭山火山灰が堆積したものと思われる。

（畠山　昇・赤羽　真由美）



第 2 号住居跡　耕作土除去後の地形

図19　第 2 号住居跡



第2号住居

第1層　黒褐色土　10YR2/2
第2層　黒　色　土　10YR2/1　ローム粒、焼土粒微量。
第3層　黒褐色土　10YR3/1　ローム粒・焼土粒微量。
第4層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量。
第5層　褐　色　土　10YR4/4　石質山火山灰を多く含む。ローム、焼土粒微量。
第6層　にぶい褐色土　10YR4/3　床面直上に白質山火山灰を多量に含む。
第7層　褐　色　土　10YR4/6　ローム質。L、B・ローム粒多量、炭化物微量。

ピット1

第1層　黒褐色土　10YR3/1　ローム粒を少量。
第2層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒、火山灰多量。
第3層　火山灰堆積層
第4層　にぶい褐色土　10YR4/3　ローム質。

ピット2

第1層　黒褐色土　10YR3/1　ローム粒少量、焼土粒微量。
第2層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒・火山灰多量。
第3層　火山灰堆積層
第4層　褐　色　土　10YR4/6　ローム質。

ピット3・4

第1層　黒褐色土　10YR3/1　ローム粒・焼土粒微量。
第2層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒微量、火山灰を多量。
第3層　火山灰堆積層
第4層　褐　色　土　10YR4/6　ローム質。

ピット5

第1層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒・L、B、火山灰多量。
第2層　灰　色　土　10YR4/4　ローム質。

番号	種類	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底部調整	胎土	分類	備考	整理番号
1	土師器	甕	－	覆土		－	－	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ	糸切	砂粒中量	AIV		4
2	〃	坏	－	覆土	－	5.4	－	ロクロ	ミガキ	回転糸切	密	A1c	内面黒色処理	5
3	〃	坏	－	床面	12.8	5.0	5.7	ロクロ	ロクロ	回転糸切	粗砂中量	A2b		1
4	〃	甕	－	覆土	－	7.8	－	ロクロ	ロクロ	回転糸切	小礫中量	B Vb		2
5	〃	坏	－	床面	－	4.4	－	ロクロ	ロクロ	回転糸切	粗砂少量	A2g		6

番号	種類	器種	出土位置	層位	外面の文様・加工	内面調整	備考	整理番号
6	縄文土器	深鉢	－	覆土	沈線文・磨き	磨き		4

番号	種類	出土地点	器種	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	整理番号
7	石器	2住床	不明	D.3	流紋岩	(7.5)	(2.3)	2.3	51.4	S. 3. 擦痕、磨滅あり。紡石片？。	106
8	〃	2住.1	スタンパー		流紋石	6.1	3.6	0.4	12.2	コンドスクレンパ	6

図20　第2号住居跡出土遺物

第3号住居跡（図21～23、写真4・20）

［位置］　C・D－51・52グリッドに位置している。東側隅の一部分が調査区域外にかかっている。

［重複］　第4号住居跡、第7号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡の方が新しい。

［平面形・規模］　平面形はほぼ方形で、南西壁4.05m、北西壁3.70mで、推定床面積は13.9m²である。主軸方位はN－122°－Eである。

［壁・床面］　壁高は65～75cm前後であり、深い。床面は全般に平坦で堅緻である。

［カマド］　南東壁の北寄りのところ、壁辺の三分の一の所に構築されている。本体は砂質の粘土とロームで構築されている。内壁の幅32cm、奥行き40cmである。火床面は強い加熱を受け、非常に硬い酸化面を形成している。径50cmほどの円形を呈し、床面から5cm高くなっている。中央には支脚として土師器坏が伏せられている。煙道部は半地下式の構造で、外側へ向かって緩やかに立ち上がり、壁から1.1mほど延びている。

［炉］　床面中央からやや西側にそれたところに、床面が焼けている面を検出した。幅20cm、長さ40cmの長楕円形で、周辺の床面は堅緻である。炉の跡と思われる。

［壁溝］　壁溝は、幅が5～15cm前後、床面からの深さ20～25cmである。全体を調査出来なかったが、一周するものと思われる。コーナーの部分は幾分深く掘り込まれており、とくに北側の隅では床面から42cmの深さで、ピット状に掘り込まれている。

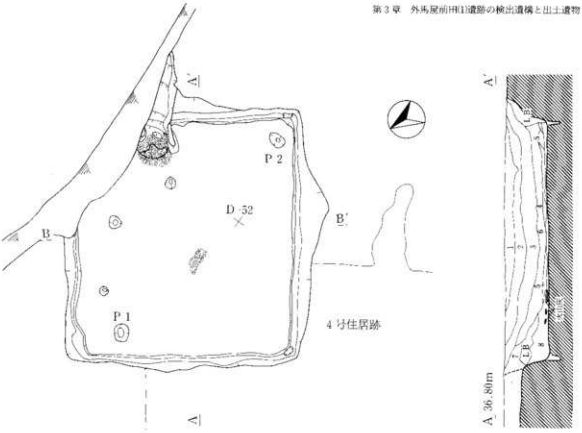
［柱穴・ピット］　床面から5個のピットを検出した。いずれも深さ5～15cm前後である。このうちP1とP2は、対応するピットが検出されなかったが、位置的に柱穴と考えることができる。また、壁のコーナー部分がピット状に深く掘られていることから、ここにも柱穴の存在を考えることが可能であるが、どちらとも判断できなかった。

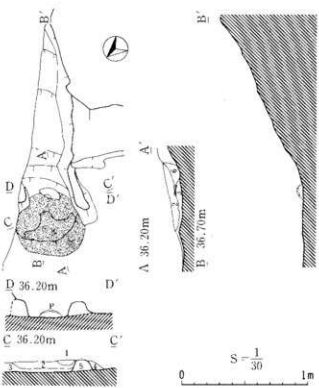
［堆積土］　壁際に壁の崩落とロームブロックの廃棄が見られるが、全体に自然堆積である。覆土の大半は、ローム粒や焼土粒を含んだ黒褐色土が大半を占めている。また、床面直上には白頭山火山灰が第5層では微量、第6層では多量に見られ、中央付近では第6層が床面を覆うように、面的に広く堆積している。また、火山灰の下位からは少量の炭化材と土師器等の遺物が出土している。炭化材には板状のものや小枝状のものがあるが、遺存状況は良くない。

［出土遺物］　白頭山火山灰の下位の床面・床面直上とカマドからは、土師器甕片約90点、坏片4点、須恵器甕片数点、須恵器壺片数点、台石3点、鉄滓が出土している。図26-6は大ぶりの内面黒色処理の坏である。カマドの支脚として使用されていたがカマド内には半分しかなく、もう半分は住居跡内の西壁近くの床面から出土した。堆積土からは土師器甕片約180点、須恵器の長頸壺片数点と大甕片1点、石筐1点、台石類1点が出土した。

［小結］　本住居跡は、火災住居であるが、炭化材の遺存状況は良くなく、住居の構造のわかる状況ではない。また、本住居が火災により使用されなくなってから、あまり時間が経ってない時期に、白頭山火山灰の堆積が見られている。柱穴配置は、住居内側の床面上配置される場合と、四隅に配置される場合とが考えられたが、どちらとも判断出来なかった。カマドの構造は半地下式で、支脚として土師器坏を伏せて使用している。また、住居中央付近には炉を検出した。本遺跡で、炉が検出されたのは本住居跡のみである。

（畠山　昇・赤羽　真由美）





第３号住居跡

第１層	黒褐色土	10YR2/2	１層。
第２層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒・焼土粒を微量含む。
第３層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・焼土粒微量含む。
第４層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒、焼土粒含む。
第５層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量。ところによりＢ－Ｔｍ少量含む。
第６層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒微量。白頭山火山灰（Ｂ－Ｔｍ）中量。
第７層	褐　色　土	10YR4/4	９層とほぼ同じ。
第８層	暗褐色土	10YR3/3	硬く、しまりある。ややローム質。
第９層	褐　色　土	10YR4/4	ローム粒多量。
第10層	褐　色　土	10YR4/4	ローム粒多量。焼土粒・炭化物微量。
第11層	暗褐色土	10YR3/4	焼土多量含む。軟らかい。
第12層	褐　色　土	10YR4/4	９層とほぼ同じ。

※白頭山火山灰の含有状況：５層に微量含む（小ブロック状）。６層上部にやや多く含み、住居跡床面直上に検出。やや広く、面的に検出。

第３号住居跡カマド

第１層	赤褐色土	5YR4/8	焼土。天井部崩落土。
第２層	暗褐色土	10YR3/4	炭化物中量、焼土粒小塊少量。軟らかい。
第３層	褐　色　土	7.5YR4/4	焼土主体。炭化物少量。
第４層	褐　色　土	10YR4/4	やや軟らかい。
第５層	赤褐色土	10YR4/8	
第６層	暗赤褐色土	5YR3/4	焼土多量、ローム粒少量。

図21　第３号住居跡

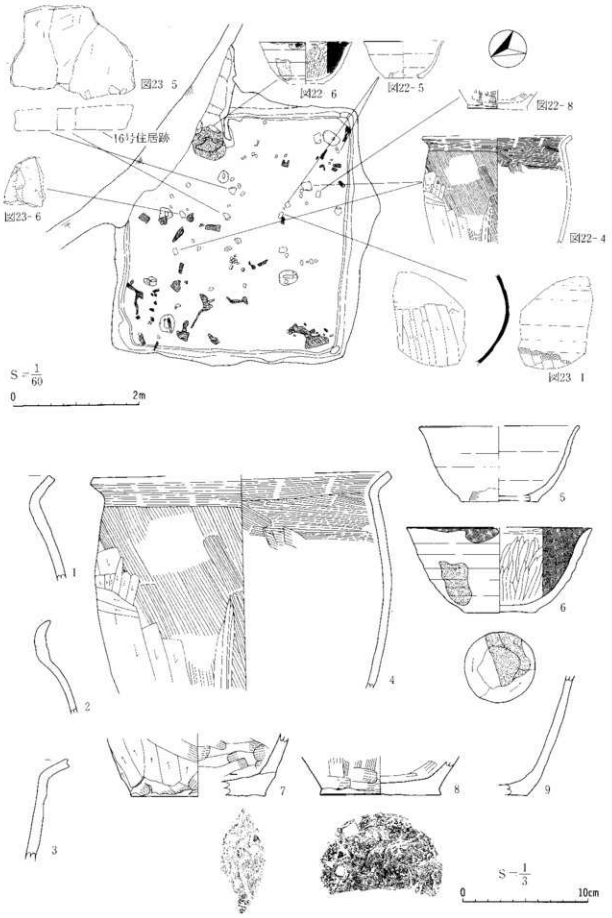


図22　第3号住居跡出土遺物―1

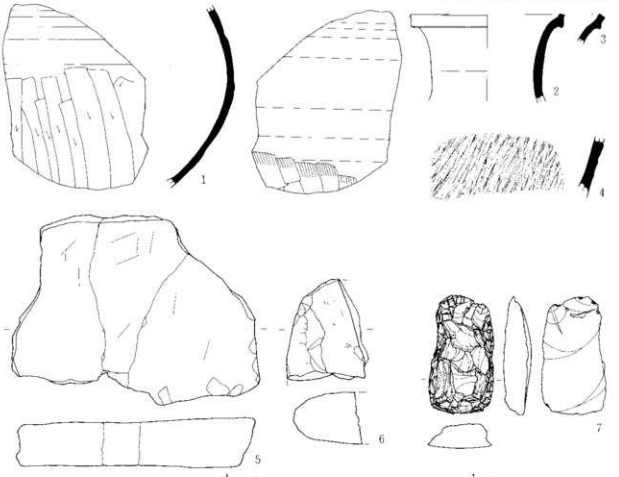


図22

番号	種類	器種	出土位置	部位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	分類	備考	整理番号
1	平安時代	壺	－	底面	－	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ ハケメ→ヘラナデ		小礫少量	AIII	口縁部に波状あり	7
2	〃	壺	－	3層	(22.0)	－	－	ヨコナデ→ヘラケズリ	ヨコナデ	－	粗砂中量	BIII		6
3	〃	壺	－	床面	－	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ	ヘラナデ	－	小礫多量	AIV		3
4	〃	壺	－	床面	(24.0)	－	－	ヨコナデ ハケメ→ミガき、ケズり	ヨコナデ ハケメ→ナデ	－	小礫多量	AIII		2
5	〃	坏	－	床面	(13.0)	(7.4)	6.0	ヘラケズり、ヘラナデ	ヘラケズり	回転糸切り	粗砂中量	A2a		5
6	〃	坏	－	床面	14.8	5.6	6.8	ロクロ	ミガき	ケズり	粗砂・海綿 雲母多量	A1a	完形 内面黒色処理・外面にススが付着	1
7	〃	壺	－	覆土	－	(10.6)	－	ヘラナデ→ケズり、ナデ	ミガき	植物痕？	粗砂多量	AVb		8
8	〃	壺	－	6層	－	(9.6)	－	ハケメ→ヘラナデ	ヘラナデ	植物痕→ヘラナデ	粗砂中量	AVa		9
9	〃	壺	－	床面	－	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ		小礫多量	AVb		4

図23

番号	種類	器種	出土位置	部位	口径	底径	器形	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	分類	備考	整理番号
1	須恵器	壺	－	底面	－	－		ロクロ→ケズり	ロクロ→ヘラナデ	－	密		内面（黒色）において赤褐色 外色（赤褐）において赤褐色	X-4
2	〃	長頸壺	－	覆土	(12.4)		－	ロクロ	ロクロ	－	密		自然釉付着 黒色（黒色）において赤褐色	X-10
3	〃	長頸壺		覆土	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	密		内外面に自然釉付着	X-42
4	〃	壺	－	床面	－	－	－	タタキメ（格子）	ナデ		密		にぶい黄橙（黒褐色）色	X-16

番号	種類	出土地点・層	器種	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	整理番号
5	石器	3住床面	石石器	C-1	安山岩	11.6	19.6	3.9	1799	S－5・6・11・16はS－2。磨製、板状、両面とも平滑。	117
6	〃	3住10層	石石器	C-2	安山岩	8	6.3	4.3	242.7	S－2。表面に敲打痕（整形痕？）。側縁部整形。	67
7	〃	3住、7層	石錘		珪質頁岩	6.2	3.4	1.4	38.3	ベルト7層。S－1	7

図23　第3号住居跡出土遺物－2

第４号住居跡（図24～26、写真４・20）

［位置］　Ｃ～Ｅ－50～53グリッドに位置している。焼失家屋である。

［重複］　第３号住居跡、第４号・７号掘立柱建物跡と重複している。第３号住居跡より古いが第４号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である（第４号掘立柱建物跡の方が新しい可能性がある）。また第７号掘立柱建物跡と共存していた可能性があり、これと一連の大型の建物跡であった可能性が高い。

［平面形・規模］　平面形はほぼ方形で、南西壁5.52ｍ、北西壁5.50ｍで、推定床面積は29.6㎡である。主軸方位はＮ－123°－Ｅである。第7号掘立柱建物跡が伴うとすれば、全体面積は56㎡前後である。

［壁・床面］　壁高は25～45cm前後である。床面は全般に平坦で堅緻であり、第３号住居跡の床面より40cmほど高い。

［カマド］　南東壁の南寄りに構築されている。同位置での改築が認められ、煙道部は地下式（Ｂ）から半地下式（Ａ）へと改築されている。

Ａカマドの本体は砂質気味の粘土で構築されている。左袖の近くに焼けた板状の安山岩の大礫を検出し、カマドの構築材（天井部か）の可能性がある。内壁の幅50cm、奥行き55cmほどであり、焚口部付近は、５～８cm掘り込まれている。火床面は、焚口から奥壁近くまで見られた。煙道部は半地下式で壁から１．36ｍ外方へ緩やかに立ち上がるように延びている。

Ｂカマドは同位置での改築で、煙道部のみの検出である。地下式の構造で、外側に向かい緩やかに低く、深く掘り込まれている。煙出し孔は32×35cmのほぼ円形で、深さ90cmである。

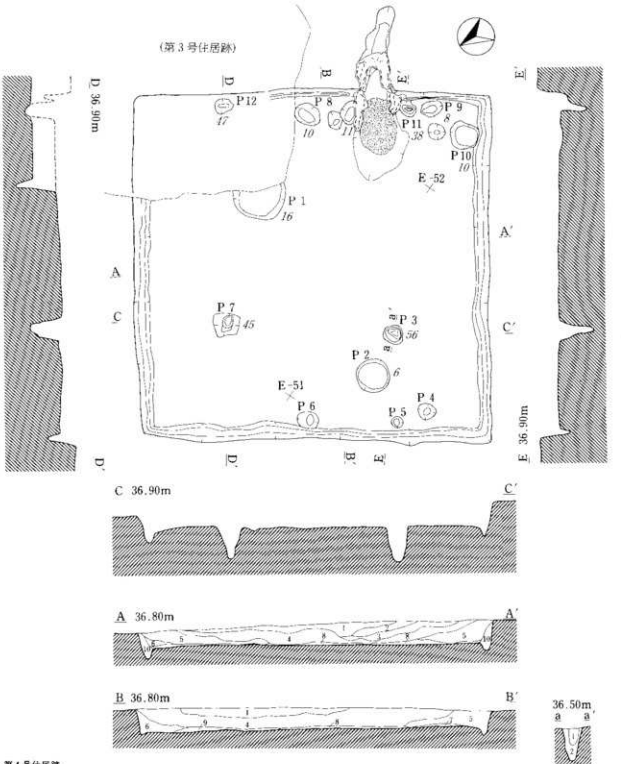
［壁溝］　壁溝は幅15～25cm、深さ15～25cmで、一周するものと思われる。

［柱穴・ピット］　ピットは15個検出した。また、第３号住居跡床面下からも、本住居のピット１個を検出した。柱穴はＰ３・Ｐ７・Ｐ11・Ｐ12である。柱穴の掘り方は方形を基調としているが、Ｐ11は楕円形に近い。床面からの深さは40～56cmであり、掘り方底面が小穴状に一段低くくぼんでいるものもある。Ｐ７では柱痕と思われるものが検出されたが、平面観察では明瞭に把握出来なかった。また、Ｐ１・Ｐ２は埋められていたピットであり、黄褐色土が上面に貼られていた。深さ６～16cmである。なお、Ｐ５・Ｐ６は４号掘立柱建物跡の柱穴である。

［堆積土］　検出面上にローム質の黄褐色土、その下位にも第Ｖ層のローム・ブロックを多量に含んでおり、全般に人為堆積である。また、床面から床面直上にかけて炭化物（材）を含む層（第９層）が見られ、この層を挟んで焼土粒や焼土塊、灰などが広範囲に見られた。このことから、火災住居であることがわかるが、炭化物（材）は形をなすものがなく、構造が分かる出土状況ではなかった。

［出土遺物］　底面及び床面直上から土師器甕片約60点、小型壺１点、須恵器の坏片２点、カマド底面から台石１点、カマドからＲフレイク１点、Ｐ９から台石片が１点出土した。このうち、図26-9はカマドの脇から出土した。高台部が剥離しているが、中実の高台を持つものは本遺跡中１点のみである。また、図26-1は３号住居跡の覆土から出土した破片と接合した。堆積土からは、土師器甕片約120点と坏片数点、支脚１点、砥石１点、炭化した栃の実３個が出土した。支脚は12号住居跡のカマド火床面から出土した破片と接合した。

［小結］　本住居は焼失家屋であるが、構造を把握できる検出状況ではなかった。また、カマドの設置されている方向に掘立柱建物跡が検出されており、本住居に付随する構造の建物跡である可能性も考えられる。カマドは同位置での改築が認められ、煙道部の構造も地下式から半地下式へと変遷していることが確かめられた。　（畠山　昇・赤羽　真由美）



第4号住居跡

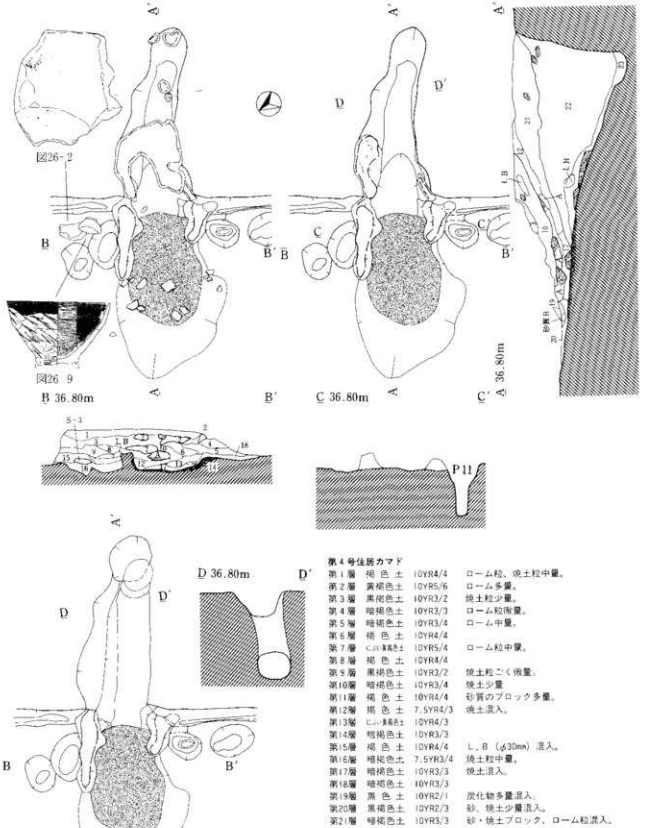
第1層	黄褐色土	10YR5/6	硬い。ローム主体（Ⅴ層）。
第2層	黒褐色土	10YR2/4	ローム粒中量。軟らかい。
第3層	黒褐色土	10YR2/4	ローム粒少量。
第4層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒、L、B中量、焼土粒・炭化物微量。
第5層	褐色土	10YR4/6	硬い。ローム主体（Ⅴ層）。
第6層	褐色土	10YR4/4	軟らかく、しまりない。ローム粒微量。
第7層	褐色土	10YR4/4	ローム質、硬い。L、B少量。
第8層	暗褐色土	10YR3/3	軟らかい。焼土粒少量、炭化物多量。
第9層	赤褐色土	5YR4/6	焼土（ブロック）
第10層	暗褐色土	10YR3/4	

第4号住居跡ピット3

第1層	黒褐色土	10YR3/2	柱痕
第2層	黄褐色土	10YR5/6	

S＝1/60　0　2m

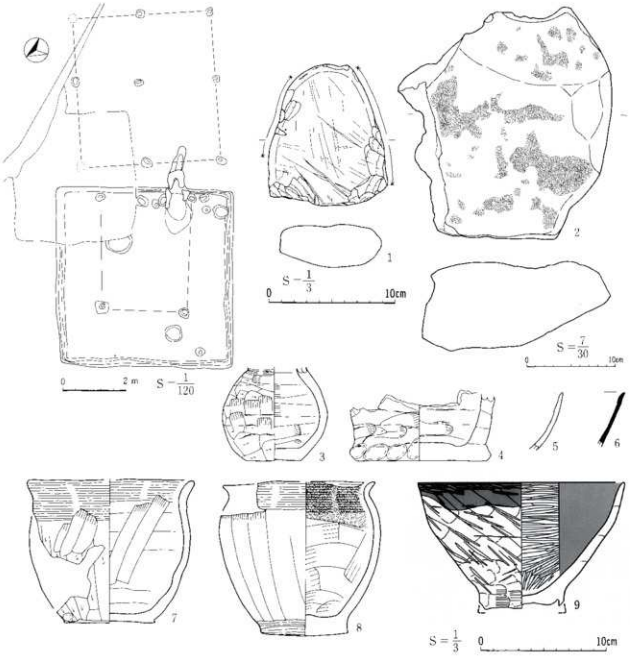
図24　第4号住居跡



第4号住居カマド

第1層	褐色土	10YR4/4	ローム粒、焼土粒中量。
第2層	黄褐色土	10YR5/6	ローム多量。
第3層	黒褐色土	10YR3/2	焼土粒少量。
第4層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒微量。
第5層	暗褐色土	10YR3/4	ローム中量。
第6層	褐色土	10YR4/4	
第7層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	ローム粒中量。
第8層	褐色土	10YR4/4	
第9層	黒褐色土	10YR3/2	焼土粒ごく微量。
第10層	暗褐色土	10YR3/4	焼土少量
第11層	褐色土	10YR4/4	砂質のブロック多量。
第12層	褐色土	7.5YR4/3	焼土混入。
第13層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	
第14層	暗褐色土	10YR3/3	
第15層	褐色土	10YR4/4	L, B（φ30mm）混入。
第16層	暗褐色土	7.5YR3/4	焼土粒中量。
第17層	暗褐色土	10YR3/3	焼土混入。
第18層	暗褐色土	10YR3/3	
第19層	黒色土	10YR2/1	炭化物多量混入。
第20層	黒褐色土	10YR2/3	砂、焼土少量混入。
第21層	暗褐色土	10YR3/3	砂・焼土ブロック、ローム粒混入。
第22層	黄褐色土	10YR5/6	埋められたローム
第23層	黒褐色土	10YR2/2	トンネルの覆土。
A層	にぶい黄褐色土	2.5Y6/4	袖。砂質。

図25　第4号住居跡カマド



番号	種類	器種	口十底部	形状	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底部調整	胎土	分類	備考	実測番号
3	土師器	小型壺	－	平底		4.3	－	ケズリ→ヘラナデ	ユビナデ	ヘラナデ	粗砂多量			4
4	〃	甕		丸底	－	11.0		ユビナデ、ユビアト	ヘラナデ		長石・石英		口縁カマドと接合 編物痕の跡	3
5	〃	坏	－	平底	－		－	ロクロ	ロクロ	－	密	A2d	須恵器の転用か？	7
6	須恵器	坏	－	平底	－		－	ロクロ	ロクロ	－	密		にぶい黄橙色	5-37
7	土師器	甕		平底	(13.4)	7.7	11.4	ヨコナデ ケズリ→ユビナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	ユビアト	小礫少量	C1		2
8	〃	甕	－	平底	(12.1)	7.0	12.3	ヘラナデ→ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	ケズリ	小礫多量	C1	3片連続した接合 外面煤付、内面ススけ痕	1
9	〃	中実の 蓋D付坏	－	－	16.6	－	－	ヘラナデ→ ミガキ、ケズリ	ミガキ	－	細砂多量	B1b	内面黒色処理、外面にも及ぶ	5

番号	種類	出土地点	器種	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	実測番号
1	石器	4住覆土	砥石	A 2	流紋岩	11.4	9.5	4.0	503.6	両面使用。1面が強い。側縁に敲打痕（整形）。	72
2	〃	4号カマド内	不明	D 1	安山岩	25.8	24.2	11.7	8000	カマド付近。S＝1。磨耗。全体に茶褐色から黒色の物質付着。	73

図26　第4号住居跡出土遺物

第５号住居跡（図27～32、写真５・21）

［位置］　Ｃ～Ｅ－53・54グリッドに位置している。焼失家屋である。

［重複］　なし。

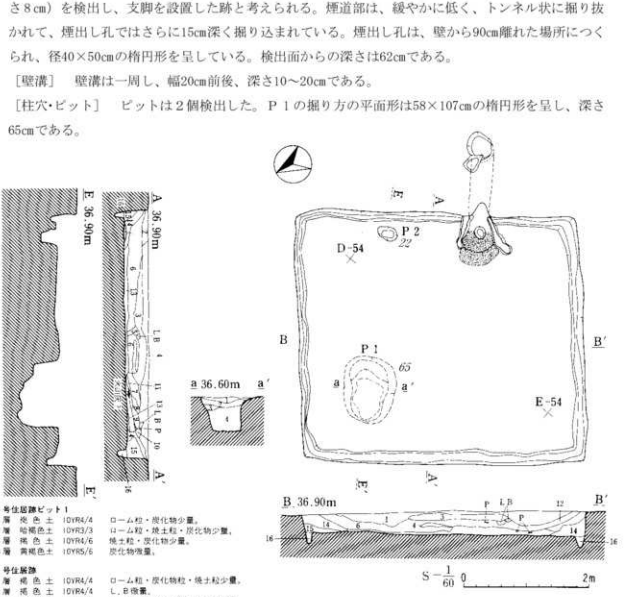
［平面形・規模］　平面形は長方形で、北東壁3.85m、北西壁4.45m、南西壁3.88m、南東壁4.50mで、床面積は17.20m²である。主軸方位はＮ－121°－Ｅである。

［壁・床面］　壁高は26～40cm前後である。床面は全般に平坦で堅緻である。

［カマド］　南東壁の南寄りのところ、壁辺のおよそ三分の一の所に構築されている。本体は砂質気味の粘土で構築されている。内壁の幅は約50cm、奥行き50cmの台形状で、奥がやや狭い。火床面は、床面より５cm高く、30×50cmの楕円形の酸化面を形成している。中央には、径20cmほどの小ピット(深さ８cm）を検出し、支脚を設置した跡と考えられる。煙道部は、緩やかに低く、トンネル状に掘り抜かれて、煙出し孔ではさらに15cm深く掘り込まれている。煙出し孔は、壁から90cm離れた場所につくられ、径40×50cmの楕円形を呈している。検出面からの深さは62cmである。

［壁溝］　壁溝は一周し、幅20cm前後、深さ10～20cmである。

［柱穴・ピット］　ピットは２個検出した。Ｐ１の掘り方の平面形は58×107cmの楕円形を呈し、深さ65cmである。



第５号住居跡ピット１

第１層　褐色土　10YR4/4　ローム粒・炭化物少量。
第２層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒・焼土粒・炭化物少量。
第３層　褐色土　10YR4/6　焼土粒・炭化物少量。
第４層　黄褐色土　10YR5/6　炭化物微量。

第５号住居跡

第１層　褐色土　10YR4/4　ローム粒・炭化物粒・焼土粒少量。
第２層　褐色土　10YR4/4　L、B微量。
第３層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒・炭化物粒・焼土粒少量。
第４層　黒褐色土　10YR3/2　ローム・焼土粒・少量。
第５層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒を少量。
第６層　褐色土　(10YR4/4)と暗褐色土(10YR3/4)との混合土。L、B・焼土粒多量。
第７層　暗褐色土　(10YR3/4)と褐色土（10YR3/4）との混合土。
第８層　暗褐色土　10YR3/4　L、B多量。焼土粒微量。
第９層　暗褐色土　(10YR3/4)と褐色土(10YR4/4)との混合土。ローム粒微量。
第10層　褐色土　10YR3/4　粘土・炭化物粒微量。
第11層　暗褐色土　10YR3/3　焼土（7.5YR4/6）多量。炭化物少量。
第12層　この層色土　(10YR4/3)と暗褐色土(10YR3/3)、黒褐色土(10YR2/2)との混合土。
第13層　暗褐色土　(10YR3/3)と褐色土(10YR4/4)との混合土　ローム粒。焼土粒少量。
第14層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒・炭化物粒・焼土粒微量。
第15層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒・L、B少量。
第16層　暗褐色土　(10YR3/4)と黄褐色土(10YR5/6)の混合土。

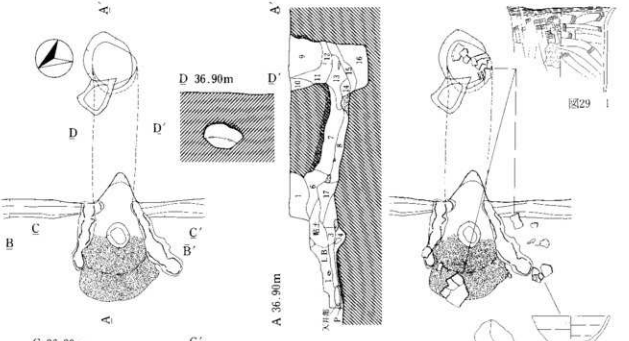
図27　第５号住居跡

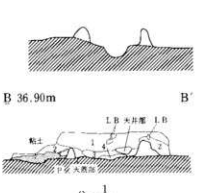
人為的堆積を示し、埋められていたピットである。P2の掘り方は隅丸方形を呈し、深さ22cmである。柱穴の可能性が高いが、これに対応するピットは検出できなかった。

［堆積土］　褐色土や黄褐色土が大半を占め、人為堆積である。床面及び床面直上から炭化材や焼土が見られ、前後する層から灰も検出している。炭化材は、本来の形状を保っているものがない。床面直上からは火山灰らしきものを検出したが、分析の結果白頭山火山灰の領域をずれることが判明した。

［出土遺物］　多量の遺物が出土した。床面及び床面直上からは、土師器甕片約200点、坏片約30点、羽口3点、土玉1点、刀子1点、鋤先1点、砥石1点、台石2点、敲磨器1点、中礫1点が出土した。図29-10・12、図30-5は外面も黒褐色を呈する内面黒色処理の坏である。カマドからは、土師器甕片約30点、坏片5点、須恵器坏片1点、煙道部から炭化した栃の実19点が出土した。堆積土からは土師器甕片約830点、坏片80点、須恵器の坏、壺、大甕片数点、砥石1点、羽口片約30点、土玉2点、鉄滓50点、栃の実8点が出土した。堆積土には接合しない土師器坏の破片が多く、その半数以上が内面黒色処理の坏であった。

（畠山　昇・赤羽　真由美）

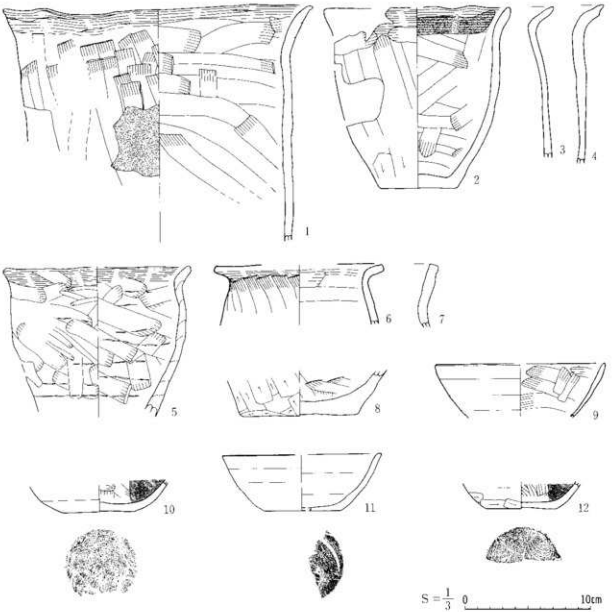




第5号住居跡カマド

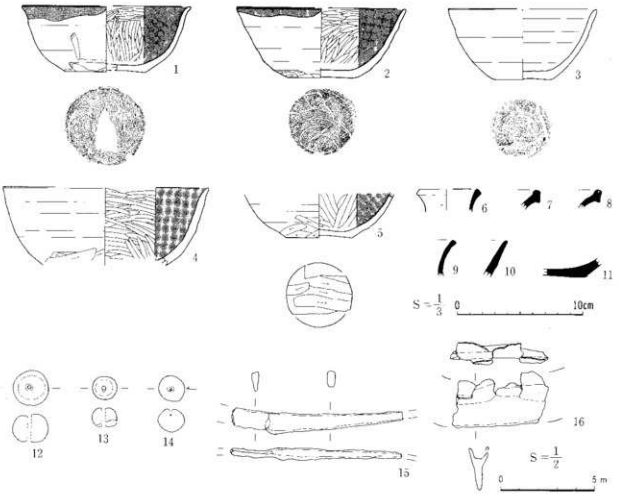
第1層	暗褐色土	10YR3/3	L．B・炭化物粒少量、焼土粒極微量。
第2層	褐色土	10YR4/4	ローム粒中量、焼土粒少量、炭化物微量混入。
第3層	褐色土	10YR4/4	ローム粒・焼土粒少量。炭化物微量。
第4層	黒褐色土	10YR3/2	
第5層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	焼土粒・ローム粒少量。
第6層	褐色土	10YR4/4	ローム粒少量。
第7層	黒褐色土	(10YR3/3)と褐色土(10YR4/6)との混合土。焼土粒微量混入。	
第8層	黒褐色土	10YR3/3	
第9層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	ローム粒・焼土・炭化物少量。
第10層	褐色土	10YR4/4	ローム粒少量。
第11層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	焼土・ローム粒微量。
第12層	褐色土	10YR4/4	ローム粒・焼土粒少量。
第13層	褐色土	10YR4/6	ローム・焼土粒、焼土ブロック少量。
第14層	黒褐色土	10YR3/2	炭化物多量。
第15層	黒褐色土	7.5YR3/2	ローム粒・焼土粒微量。
第16層	極暗褐色土	7.5YR2/3	炭化物中量。15層とともに土器出土。
第17層	暗褐色土	10YR3/3	焼土中量。粘土質の粒微量。

図28　第5号住居跡カマド



番号	種類	器種	出土位置	胎土	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	分類	備考	図版No.
1	上師器	甕	ピット埋土	13層	(24.6)	－	－	ヘラナデ→コゴナデ	ヨコナデ→ヘラナデ	－	粗砂多量	A1	輪積み痕・指紋・ススの付着	3
2	〃	甕	－	床面	(14.9)	6.2	14.4	ヨコナデ ヘラナデ、クズリ	ヘラナデ、ユビナデ	－	小礫多量	B1a	内面ススの付着、外面黒斑	1
3	〃	甕	－	覆土	－	－	－	オデ?	ヨコナデ、ヘラナデ		粗砂多量	AIVb		13
4	〃	甕	－	床面	21.5	－	－	ロクロ→ヘラナデ	ロクロ→ヘラナデ	－	粗砂多量	AIII		17
5	〃	甕		床面	(14.0)	－	－	ヨコナデ、ユビナデ	ユビナデ	－	粗砂多量	B1a		2
6	〃	甕	－	覆土	(33.2)	－		ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ナデ		小礫中量	BIIIa		16
7	〃	甕	－	覆土			－	ヨコナデ→ヘラナデ	ナデ	－	小礫多量	AIVb		11
8	〃	甕	－	床面	－	9.1	－	クズリ	ユビナデ	－	粗砂多量	AVb		5
9	〃	坏	Pit 1	1層	(13.6)	－		オデ?	ナデ		細砂多量	B2	内外黒斑痕	8
10	〃	坏	－	床面	－	5.6	－	ロクロ	ミガキ	回転糸切	粗砂多量	AIe	内面黒色処理、外面黒斑	15
11	〃	坏	カマド	床面	(12.4)	(6.2)	4.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	粗砂少量 細礫多量	AIc	内外黒斑痕、ススの付着	9
12	〃	坏		床面	－	(5.6)	－	ロクロ（ナデ）	ミガキ	回転糸切	粗砂多量	AIe	内面黒色処理、外面黒斑	14

図29　第５号住居跡出土遺物－１

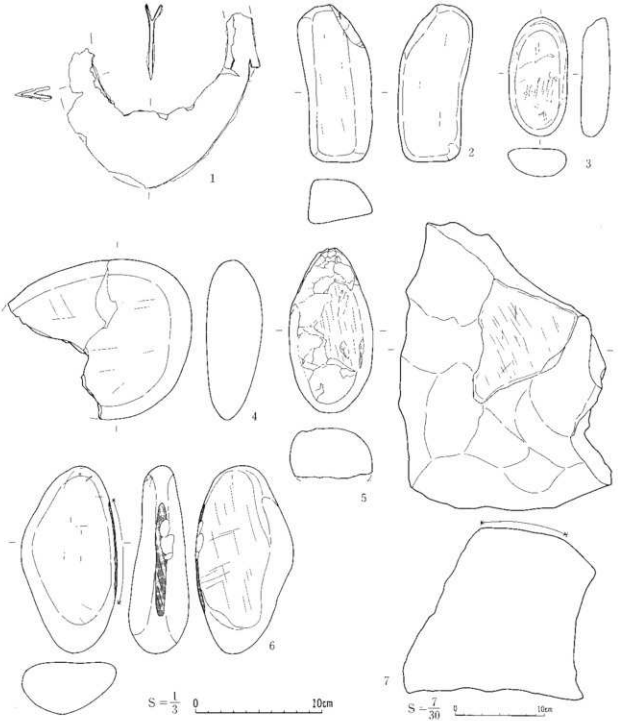


番号	種類	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	分類	備考	図版番号
1	土師器	坏	－	覆土	(13.4)	6.6	5.3	ロクロ→ケズリ、イダ	ミガキ	回転糸切→ケズリ	密	A1d	内面黒色処理、外面にも及ぶ	4
2	〃	坏	－	床面	(12.5)	5.4	5.6	ロクロ→ケズリ	ミガキ	回転糸切	密	A1b	内面黒色処理、外面にも及ぶ	6
3	〃	坏	－	覆土	11.9	4.8	3.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切	もろい	A2c	内外面磨耗	7
4	〃	坏	－	覆土	(18.4)	－	－	ロクロ→ケズリ	ミガキ		角閃石和	A1c	内面黒色処理	12
5	〃	坏	Pit 1	覆土	－	3.2	－	ロクロ→ケズリ	ミガキ	ケズリ	密	A1c	内面黒色処理、外面黒斑	16
6	須恵器	小型壺	Pit-53, 54	－	(4.4)	－		ロクロ	ロクロ	－	密		灰色（断面にぶい黒褐色）	3-19
7	〃	壺			－	－	－	ロクロ	ロクロ		密		黒褐色（断面にぶい黒褐色）	3-15
8	〃	壺	－	覆土	－	－		ロクロ	ロクロ	－	密		黒褐色（断面にぶい赤色）	3-14
9	〃	小型壺	Pit 1	2層	(3.8)	－	－	ロクロ	ロクロ		密		灰色（断面にぶい黄橙色）胎土分析No.22	3-22
10	〃	坏	－	覆土	11.6			ロクロ	ロクロ	－	海綿骨針		灰白色（断面にぶい黄橙色）胎土分析No.23	3-23
11	〃	坏	カマド	床面	－	15.0	－	ロクロ	ロクロ	回転糸切	密		灰黄色（断面にぶい橙色）胎土分析No.24	3-24

番号	種類	名称	出土位置	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	図版番号
12	土製品	土玉	5住	覆土				0.3	4.8	直径1.9cm	5
13	〃	土玉	5住	覆土	－	－	－	0.2	2.4	直径1.3cm	7
14	〃	土玉	5住	床面D 53	－	－		0.2	1.9	直径1.2cm	3

番号	種類	名称	出土位置	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	硬度	備考	図版番号
15	鉄製品	刀子	5住カマド付近	床面D 54	9.0	刃部 1.0 刃部 1.0	刃部 0.3 刃部 0.4	6.6	B		3
16	〃	鉸具	5住	覆土	3.2	2.4	1.0	10.9	A		4

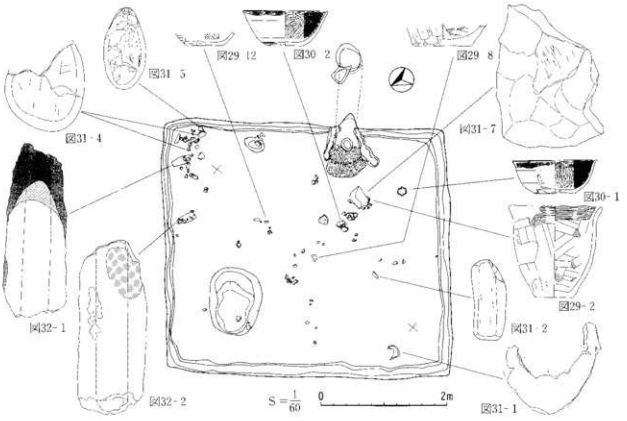
図30　第5号住居跡出土遺物―2

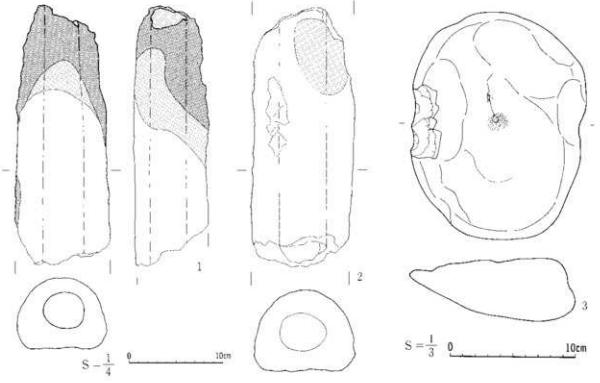


番号	種類	名称	出土位置	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	総合度	備考	実測番号
1	鉄製品	鎌先	5住	床面	不明	不明	1.3	47.5	C	中央部幅6.3cm	5

番号	種類	出土地点・遺構	器種	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	実測番号
2	石器	5住床面	不明	D 3	頁 岩	17.6	5.4	3.5	376.3	S 2、粗状礫。全体が平滑。	116
3	〃	5住周溝	磨石	A 2	流 紋 岩	9.5	4.6	2.3	128.1	両平面の平坦面に擦痕。全体が平滑。	64
4	〃	5住床面	台石類	C 2	安 山 岩	14.5	12.7	4.4	997.4	S 8(小)＋9、被熱。全体が平滑。	134
5	〃	5住覆土	磨石	A 2	変質頁岩	13.1	6.6	(4.0)	431.4	S 10、被熱。弱い研磨面。	89
6	〃	5住ピット7	敲磨器	B	流 紋 岩	14.9	7.7	4.9	565.1	両平面に、全体に平滑。特に長辺には研磨痕が見られ、磨石として利用？	81
7	〃	5住床面	台石類	C 3	安 山 岩	32.6	24.2	20.1	15000	S 1、被熱。扁平面に明瞭な擦痕。	74

図31　第5号住居跡出土遺物―3





名称	種類	出土位置	層位	長さ(cm)	外径(cm)	内径(cm)	重量(g)	備考	実測番号
1	羽口	5住	床面	27.5	9.6	4.4	1323.1		2
2	〃	5住	床面	27.5	10.7	5.0	1705.3	同明ともに欠損	1

番号	所類	出土位置：遺	層位	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	実測番号
1	石製	5竪穴床面	白山層	C-2	安山岩	18.1	14.0	4.9	1719.7	S=1:1。表裏は平坦で滑らか。表裏に赤褐色の物質付着。	95

図32　第5号住居跡出土遺物―4

第6号住居跡（図33～36、写真5・22）

［位置］　F－50・51グリッドに位置している。焼失家屋である。南側が調査区域外にあり、完掘出来なかった。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　平面形は、カマドの位置から推定してやや長方形を呈するもと思われる。規模は、北東壁2.67m、南東壁3m前後であろう。推定床面積は7㎡前後と思われる。主軸方位はN－125°－Eである。

［壁・床面］　壁高は30～40cmであり、床面は全般に平坦で堅緻である。床面の一部が火熱を受け、焼けている部分もある。

［カマド］　新旧二つのカマドを検出している。新カマドは南東壁の北寄りのところに、旧カマドは新カマドの南寄りに検出した。

新カマドの本体はやや砂質の粘土で構築されている。内壁の幅約45cm、奥行き40cmであり、火床面は径38cmの不整円形の硬い酸化面を形成している。中央には、粘土の盛土上に土師器甕の底部を伏せた支脚が据えられている。煙道部は半地下式で、壁から45cm外方へ延びており、底面は緩やかに立ち上がっている。

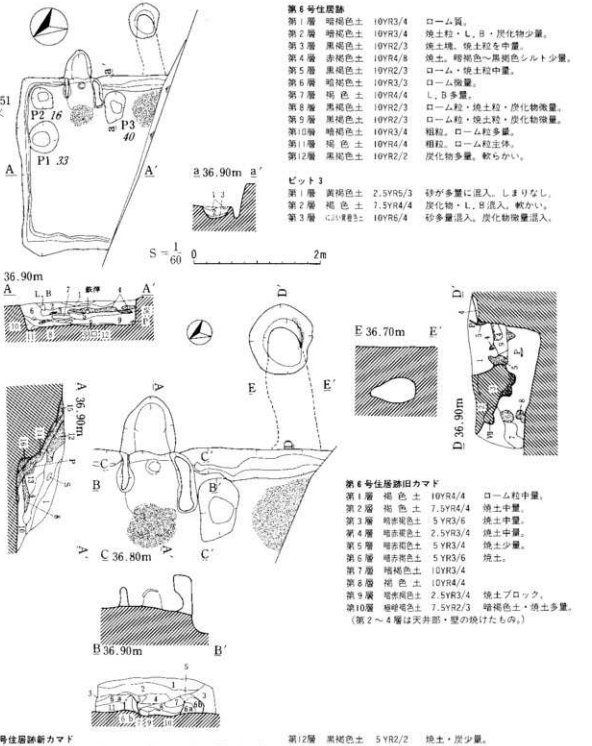
旧カマドの煙道部は地下式である。地山をトンネル状に掘り抜いており、底面は床面とほぼ水平である。煙出し孔は、壁から60cm離れ、50×55cmのほぼ円形を呈している。検出面からの深さは60cmである。［壁溝］　壁溝は一周するものと思われ、幅10～25cm、深さ20～25cmである。

［柱穴・ピット］　新カマドの周辺に、3個のピットを検出した。床面からの深さ10～20cmである。

［堆積土］　12層に分層したが、第9層より上位は人為堆積である。中央部に焼土の層が見られ、これを挟んで暗褐色土や黒褐色土、褐色土等の堆積が見られ、遺物も多量に含まれている。床面及び床面直上から、炭化材を検出しているが、炭化材は本来の形状を保っていない。

［出土遺物］　土師器、須恵器、石器、羽口、鉄製品、鉄滓、石製品が出土した。以下、床面、新カマド、旧カマド、堆積土に分けて記述する。床面の遺物は土師器甕片約40点、坏片1点、台石片？1点、羽口2点、鉄滓46点である。新カマドからは、土師器甕片約30点、砥石？1点、鉄滓1点が出土した。図24-3は支脚として使用されていたものである。旧カマドからは、土師器甕片約40点、須恵器甕片1点が出土した。堆積土からは面積の割に多量の遺物が出土している。土師器甕片約500点、坏片約50点、壷？片1点、ミニチュア壷片1点、須恵器壷片1点、坏片1点、大甕片4点、敲磨器1点、台石片1点、フレイク2点、台石？1点、羽口3点、刀子1点ほか鉄製品3点、割れた椀形鉄滓2点を含む鉄滓約160点である。堆積土からの出土にも関わらず接合個体が多いのが特徴である。その他では鉄滓の出土が目立つ。焼土層からの出土が多く、焼土と共に一括して廃棄されたような出土状態であった。

（畠山　昇・赤羽　真由美）



第6号住居跡

第1層	暗褐色土	10YR3/4	ローム質。
第2層	暗褐色土	10YR3/4	焼土粒・L，B・炭化物少量。
第3層	黒褐色土	10YR2/3	焼土塊，焼土粒を中量。
第4層	赤褐色土	10YR4/8	焼土。暗褐色～黒褐色シルト少量。
第5層	黒褐色土	10YR2/3	ローム・焼土粒中量。
第6層	暗褐色土	10YR3/3	ローム微量。
第7層	褐 色 土	10YR4/4	L，B多量。
第8層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・焼土粒・炭化物微量。
第9層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・焼土粒・炭化物微量。
第10層	暗褐色土	10YR3/4	粗粒。ローム粒多量。
第11層	褐 色 土	10YR4/4	粗粒。ローム粒主体。
第12層	黒褐色土	10YR2/2	炭化物多量。軟らかい。

ピット3

第1層	黄褐色土	2.5YR5/3	砂が多量に混入。しまりなし。
第2層	褐 色 土	7.5YR4/4	炭化物・L，B混入。軟かい。
第3層	褐灰色土	10YR6/4	砂多量混入。炭化物微量混入。

第6号住居跡旧カマド

第1層	褐 色 土	10YR4/4	ローム粒中量。
第2層	褐 色 土	7.5YR4/4	焼土中量。
第3層	暗赤褐色土	5YR3/6	焼土中量。
第4層	暗赤褐色土	2.5YR3/4	焼土中量。
第5層	暗赤褐色土	5YR3/4	焼土少量。
第6層	暗赤褐色土	5YR3/6	焼土。
第7層	暗褐色土	10YR3/4	
第8層	褐 色 土	10YR4/4	
第9層	暗赤褐色土	2.5YR3/4	焼土ブロック。
第10層	暗褐色土	7.5YR2/3	暗褐色土・焼土多量。

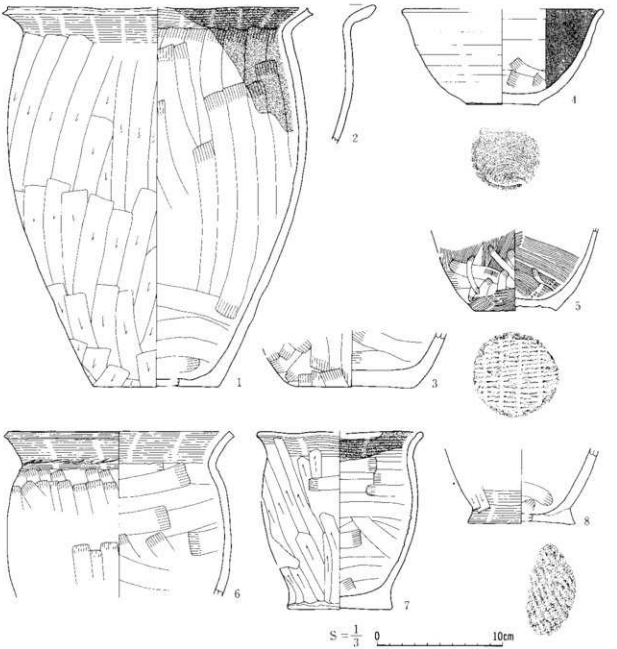
（第2～6層は天井部・壁の焼けたもの。）

第6号住居跡新カマド

第1層	暗褐色土	7.5YR3/3	焼土。（住居跡埋積土4層と同じ。）
第2層	黒褐色土	10YR2/3	焼土粒少量。
第3層	暗褐色土	10YR3/4	焼土粒少量。
第4層	暗褐色土	10YR3/4	軟らかい。
第5層	黄褐色土	10YR5/6	天井部崩落土。砂質。
第5a層	暗褐色土	10YR3/4	砂質。袖部。焼けている。
第5b層	明黄褐色	2.5Y7/6	砂質。袖部。焼けている。
第7層	暗褐色土	7.5YR3/4	天井部崩落土。砂質。
第8層	暗褐色土	7.5YR3/4	砂質。硬い。
第9層	暗褐色土	10YR3/3	焼土少量。
第10層	暗褐色土	7.5YR3/4	焼土多量。
第11層	暗褐色土	10YR3/4	
第12層	黒褐色土	5YR2/2	焼土・炭少量。
第13層	暗赤褐色土	10YR3/4	焼土・炭微量。天井部。
第14層	極暗褐色土	7.5YR2/3	
第15層	褐 色 土	7.5YR4/4	焼土多量。
第16層	暗赤褐色土	10YR5/6	焼土多量。天井部。

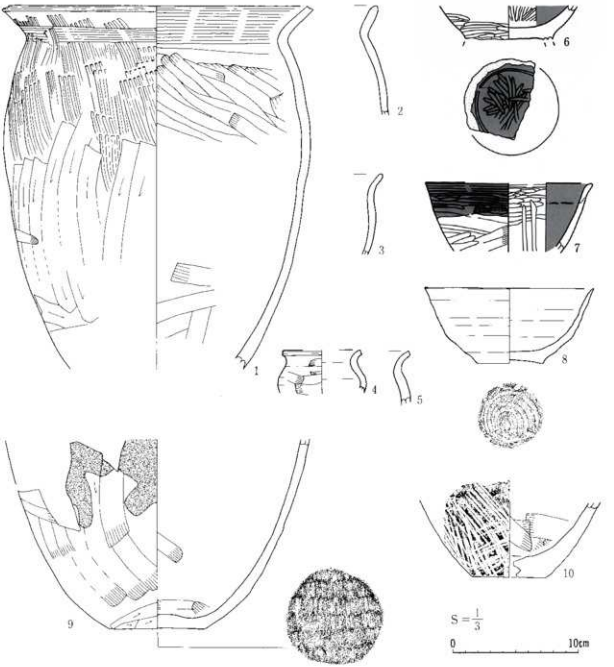
S=1/30　0　1m

図33　第6号住居跡



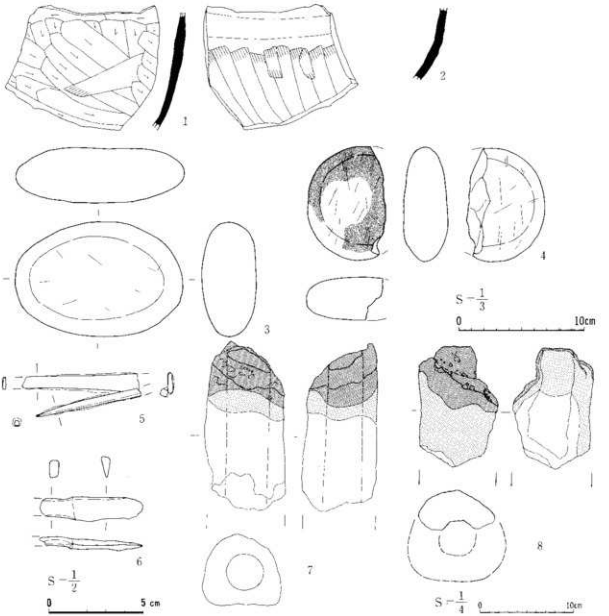
番号	種類	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	分類	備考	挿図番号
1	土師器	甕	南カマド	－	(23.8)	(10.0)	30.3	ヨコナデ→ケズリ	ヨコナデ→ヘラナデ	－	粗砂多量	AII	内面炭化物付着	4
2	〃	甕	西カマド	－	?	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ		粗砂中量	AIV		11
3	〃	甕	東カマド	床面		10.0		ヘラナデ	ユビナデ	－	小礫多量	AVb	支脚	9
4	〃	坏	－	床面	(16.0)	5.6	7.7	ロクロ	ナデ?	回転糸切	細砂多量 赤色粒含む	A1a	内面内黒処理	7
5	〃	甕	カマド	床面		6.6		ハケメ→ユビナデ→ハケメ	ハケメ		小礫少量	BVb		8
6	〃	甕	－	覆土	(18.0)	－	－	ヨコナデ→ヘラナデ	ナデ、ヘラナデ		小礫多量	IIIIIa		2
7	〃	甕	－	覆土	(17.4)	7.8	14.1	ヨコナデ→ケズリ	ヘラナデ	ナデ	小礫多量	BIIb		1
8	〃	甕	－	覆土		(8.6)		ナデ→ケズリ	ユビナデ	糸切痕	小礫多量	BIIb		15

図34　第6号住居跡出土遺物－1



番号	種類	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	分類	備考	図版No.
1	土師器	甕		5層	24.0			ハケメ→ヨコナデ、ヨビ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	小礫中量	AⅡ	外面に炭化物付着	5
2	〃	甕	－	覆土				ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		粗砂中量	AⅡ		10
3	〃	壺	－	覆土	－	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ	－	粗砂少量	BⅡa		12
4	〃	ミニチュア	－	覆土	(6.0)			ロクロ→ヘラナデ	ロクロ	－	細砂多量	CⅠ		11-3
5	〃	壺		覆土	－	－	－	ロクロ	ミガキ	－	細砂多量	CⅠ	内面内湾底部	11
6	〃	高台付坏	－	覆土	－	(7.0)	－	ミガキ	ミガキ	高台ミガキ	海綿針・Z	BⅠb	内面・底部黒色化現	17
7	〃	坏	－	覆土	(13.2)	－	－	ミガキ	ミガキ	－	海綿針・Z	BⅠa	内面内湾部、外部に煤付	13
8	〃	坏	－	覆土	(13.4)	5.4	6.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切	粗砂中量	AⅠa		6
9	〃	壺	－	覆土	－	7.6	－	ナデ	ナデ	糸痕	小礫少量	AⅤb	風蝕激しい	3
10	〃	甕		覆土	－		－	ハケメ？	ヘラナデ、ユビナデ	炭化	小礫多量	AⅤb		16

図35　第６号住居跡出土遺物－２



遺号	種類	器種	出土位置	器高	口径	底径	省高	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	分類	備考	実測番号
1	須恵器	壺	6住カマド	－	－	－	－	ロクロ→ケズリ	ロクロ→ユビナデ	－	密		多ガラ(白色系)含む(多角形)	A-51
2	〃	壺		厚土			－	ロクロ→ケズリ	ロクロ→ユビナデ		密		長石(白色系)含む(多角形)	A-75

遺号	種類	出土地点	器種	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	実測番号
3	石器	6住新カマド	石石製	C 3	安山岩	13.3	9.0	4.3	733.6	S－8、磨製、全体に平滑。とくに平面はなめらか。	41
4	〃	6住覆土	台石製	C 2	安山岩	9.1	(6.1)	3.3	258.4	S－7、磨製、全体に平滑。平坦面に磨痕、煤状物質付着。	71

遺号	種類	名称	出土位置	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	部材位	備考	実測番号
5	鉄製品		6住	覆土	太い方6.3 細い方0.7	太い方1.1 細い方0.4	0.3 0.3	6.5	A		7
6	〃	刀子	6住	覆土	5.4	刃部 0.9 刃部 1.1	0.5	4.9	A		6

遺号	種類	出土位置	層位	長さ(cm)	外径(cm)	内径(cm)	重量(g)	備考	実測番号
7	石臼	6住	床面	18.0	8.3	4.3	604.4		12
8	〃	6住	床面	12.8		－	229.4		14

図36　第6号住居跡出土遺物―3

第7号住居跡（図37～39、写真6・22）

［位置］　F・G－63・64グリッドに位置している。南側が調査区域外にあり、全体を調査出来なかった。

［重複］　第10号土坑と重複し、これより古い。

［平面形・規模］　平面形は方形か長方形か不明。規模は東壁で4.45mを測る。主軸方位はN－78°－Eである。

［壁・床面］　壁高は60～70cmであり、床面は全般に平坦で堅緻である。

［カマド］　カマドは東壁の南寄りに構築されている。本体は褐色から黄褐色の砂質気味の粘土で構築されている。内壁の幅は35～55cm、奥行き50cmの台形状で、火床面は40×45cmの楕円形状の硬い酸化面を形成している。煙道部は55cmの幅で、地山をトンネル状に、水平に掘り抜かれている。煙出し孔は壁から65cm離れており、平面形は45×50cmの楕円形を呈している。検出面からの深さは78cmである。また、煙出し孔の内面上部には粘土が貼り付けられていて、この部分は焼土化している。

［壁溝］　壁溝は一周するものと思われ、幅10～25cm、深さ10cmほどである。

［柱穴・ピット］　検出されなかった。

［堆積土］　検出面で、黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土等の広がりが見られ、これを切る形で第10号土坑を検出した。堆積土は14層に分層出来たが、第8層より上位は人為堆積である。

［出土遺物］　土師器、須恵器、石器、鉄製品、鉄滓が若干出土した。床面及び床面直上からは、土師器甕片約40点、土師器坏片約40点、須恵器大甕片１点、台石片１点が出土した。堆積土からは、土師器甕片約70点、須恵器長頸壺片数点、大甕片１点、Rフレイク１点、鉄滓２点が出土した。その他、カマド堆積土より紡錘車の紡軸が１点出土した。　（畠山　昇・赤羽　真由美）

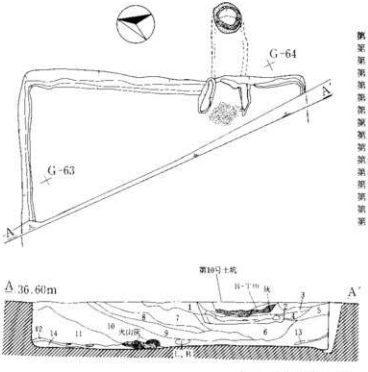
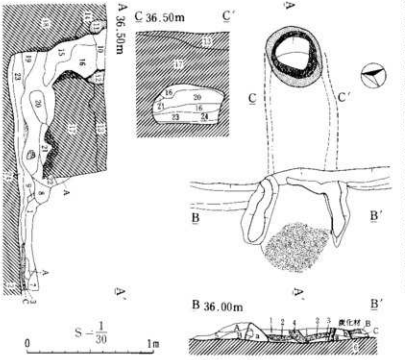
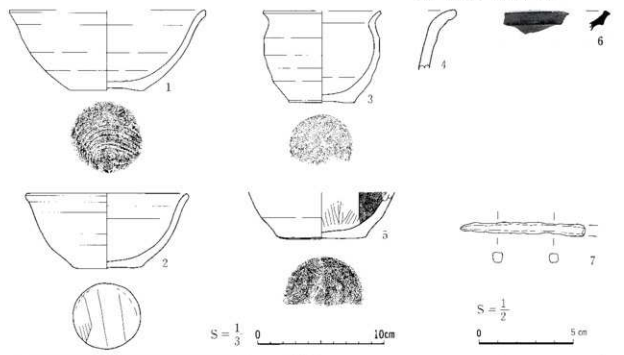


図37　第7号住居跡



第7号住居跡カマド

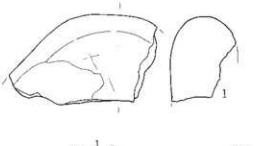
第1層	褐色土	7.5YR4/6	
第2層	褐色土	10YR4/6	焼土。
第3層	褐色土	7.5YR4/6	
第4層	赤褐色土	5YR4/8	焼土塊。
第5層	褐色土	7.5YR4/4	焼土少量。
第6層	暗褐色土	10YR3/4	
第7層	褐色土	7.5YR4/6	
第8層	黄褐色土	10YR5/8	
第9層	褐色土	10YR4/6	
第10層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量。
第11層	褐色土	10YR4/6	焼土少量。
第12層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量。
第13層	暗褐色土	10YR3/3	
第14層	暗褐色土	10YR3/4	焼土少量。
第15層	褐色土	10YR4/4	
第16層	暗褐色土	10YR3/4	
第17層	褐色土	10YR4/4	焼土少量。
第18層	褐色土	10YR4/6	焼土多量。
第19層	黒褐色土	10YR2/3	
第20層	黄褐色土	10YR5/8	
第21層	暗褐色土	10YR3/4	
第22層	褐色土	10YR4/4	
第23層	黒褐色土	10YR2/2	
第24層	黒褐色土	10YR2/3	焼土少量。
A層	褐色土	10YR4/4	天井部。
B層	褐色土	7.5YR4/6	天井部。
C層	明褐色土	10YR5/8	天井部。
a層	褐色土	10YR4/6	袖。
b層	黄褐色土	10YR5/6	袖。焼土塊量。
c層	暗褐色土	10YR3/4	袖。

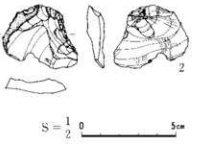


番号	種類	器種	出土位置	部位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	分類	備考	実測番号
1	土師器	ﾎﾞ	－	床面	(15.5)	5.8	6.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切		A2a		3
2	ﾊ	坏		床面	13.0	5.4	6.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切→ヘラケズリ		A2a	焼成悪く、焼きムラあり	1
3	ﾊ	甕	－	床直	9.2	5.2	7.3	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細砂多量	C1	2等なつくり	2
4	ﾊ	甕	－	床面	－	－	－	ヨコナデ	ヘラナデ		小礫中量	A1V		5
5	ﾊ	坏	－	床面		(6.8)		ロクロ	ミガキ	回転糸切	密	A1c	内面黒色処理	4
6	須恵器	長頸壺	－	覆土	－	－	－	ロクロ	ロクロ		密		灰色(黒色オリーブ色)	3-24

番号	種類	名称	出土位置	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	磁性度	備考	実測番号
7	鉄製品	紡錘	7住カマド	覆土, G-46	6.7	0.5	0.5	3.3	A		6

図38　第7号住居跡カマド・出土遺物―1





番号	種類	所土地層	器種	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	実測番号
1	石器	7住床直	台石類	C 2	流紋岩	(10.8)	6.8	5.0	306.1	S－1。被熱、平坦面平滑、破片。	121
2	〃	7住覆土	R-フレイク		黒曜石	3.4	4.1	0.8	8.8		9

図39　第７号住居跡・出土遺物－２

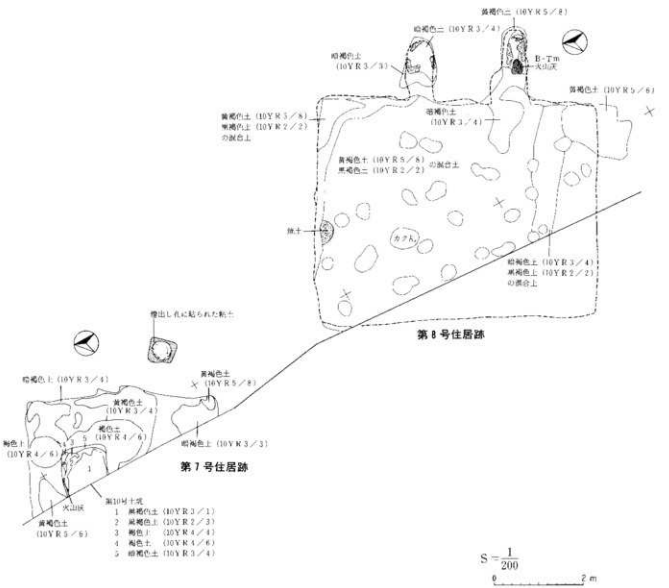


図40　第７号・第８号住居跡・第10号土坑確認状況

第8号住居跡（図41～49、写真6・7・23・24）

［位置］　F・G－65・66グリッドに位置している。焼失家屋である。南側の一部が調査区域外にあり、全体を調査出来なかった。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　平面形は長方形で、規模は東壁6.23m、北壁5.60mである。推定床面積は、30m²前後である。主軸方位はN－95°－Eである。

［壁・床面］　壁高は40～50cm前後である。床面は張り床が施され、全般に平坦で堅緻である。火災をうけているためか、床面が焼けている部分がかなり見られた。

［カマド］　東壁辺に新旧二つのカマドを検出した。新しい方のカマドを第2号カマド、古い方のカマドを第1号カマドとして調査したが、ここでは新カマド、旧カマドとして記述する。

新カマドは東壁の北寄りに構築されている。床面を15cmほど掘りくぼめ、褐色土（31層）を埋めた後に粘土を貼って、底面を造っている。本体は砂質粘土で構築されている。内壁の幅50cm、奥行き60cmほどある。支脚は、底面に数cm高く盛りあげた粘土の上に土師器甕を伏せて使用しいる。また、本カマドには2枚の火床面の存在を確認している（29・30層）。煙道部は半地下式で、壁辺から136cm外方へ延びており、底面は階段状に立ち上がる。15層～20層が煙道天井部である。

旧カマドは、新カマドの南寄りに位置している。煙道部は半地下式で、壁辺から163cm外方へ延びている。底面は凹凸があるが、緩やかに立ち上がる。第3層は煙道天井部である。また、住居内では火床面の痕跡が三日月状に見られた。

［壁溝］　壁溝は一周するものと思われ、幅10～20cm、深さ10～15cmである。また、北東のコーナー部分では小穴状に深く掘り込まれている（壁溝よりさらに10cm深くなっている）。

［柱穴・ピット］　床面から6個のピットを検出した。このうち、柱穴はP3・P4・P5であり、もう1個は調査区域外にあるため確認できなかった。また、P4は掘り方が隅丸長方形を呈し、底面は二つのピットが重複しているように思われた。南側がカマド改築後の柱穴であり、北側が改築前のものと判断される。

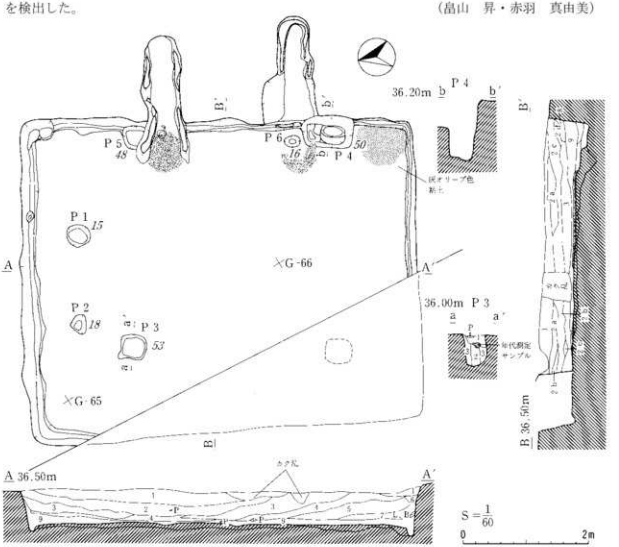
［堆積土］　検出面から床面直上まで黄褐色土とローム粒・ロームブロックを多量に含んだ褐色土の堆積が見られ、人為堆積である。また、床面から床面直上にかけて多量の炭化材を検出している。

［炭化材］　板材がほとんどである。小枝状またはタルキ状のものはところどころに見られたが、構造と関連づけられる検出状況にはない。床面の南側及び北西側に検出した炭化材の多くは、その方向が壁と平行に、床面に密着した状況で検出された。これらの炭化材の幅は、15～30cmであり、20cm前後のものが多い。また壁の部分では、床に対して垂直に立っている炭化材が見られた。腰板と考えられる。これらの炭化材の木目方向は縦一垂直方向である。樹種同定の結果、オニグルミ、クリ、モクレン属、トネリコ属の四種の木材が使われていたことが判った。（第4章第4節参照）。

［出土遺物］　多量の遺物が出土している。以下、床面及び床面直上、カマド、堆積土、炭化種子の順に述べる。床面及び床面直上からは、土師器片130点、坏片80点、鍋片3点、ミニチュア片数点、須恵器壺片1点、敲磨器3点、羽口1点、鋤先1点、鉄滓2点、柄杓の底らしき炭化木製品1点が出土した。図45-9は風倒木痕出土の破片と接合したものである。新カマドからは、土師器甕片約260点、坏片2点、羽口1点、刀子2点、鉄滓27点が出土した。図45-4は支脚としてカマド内に設置されていた

甕である。底部は欠損しており、胴部はカマドの火を受けて白色化していた。旧カマドは壊されていたため遺物はほとんど残されていなかったが、煙道部よりミニチュア片1点、須恵器壺片1点と紡錘車の紡輪1点が出土した。堆積土からは土師器甕片約670点、坏片120点、ミニチュア片数点、製塩土器？片110点、須恵器壺片約20点、坏片4点、大甕片5点、台石4点、羽口13片、紡錘車の紡軸ほか1点、碗形鉄滓5点を含む鉄滓15点が出土した。本住居跡から出土した製塩土器？片は、本遺跡から出土した製塩土器？片総数のうちの約8割を占めるが、すべて細片で図示できるものはなかった。炭化種子は、多量の炭化材に混じって出土した。特に新カマド及びその周辺に多く出土した。そこで、この部分の土壌を採取し分析にかけたところ、トチの実、オニグルミ、アワもしくはヒエ、イネ、アカザ科―ヒユ科の出土が確認された（第4章第4節参照）。また、南西隅の床面上に灰オリーブ色の粘土を検出した。

（畠山　昇・赤羽　真由美）



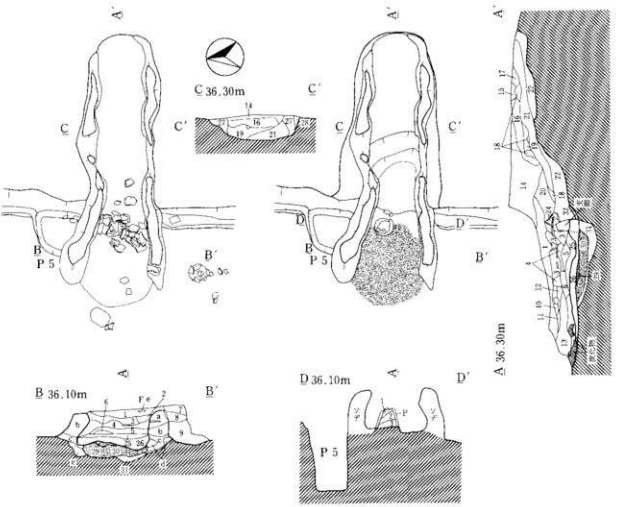
第8号住居跡

第1層	黄褐色土	10YR5/8	ローム質。
第2a層	褐色土	10YR4/4	ローム粒多量。焼土粒・炭化物微量。
第2b層	暗褐色土	10YR3/4	黒色シルト多量。ローム粒少量。
第2c層	褐色土	10YR4/4	ローム粒多量(2aより少)。焼土粒・炭化物微量。
第2d層	褐色土	10YR4/6	ローム粒多量。
第2e層	褐色土	10YR4/4	焼土多量。
第3層	黄褐色土	10YR5/8	ローム質。
第4層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量。
第5層	褐色土	10YR4/6	ローム粒・L，B多量。
第6層	褐色土	10YR4/4	ローム粒中量。
第7層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒・炭化物少量。
第8層	黒褐色土	10YR3/2	焼土多量。
第9層	暗褐色土	10YR3/4	焼土多量。炭化物多量。
第10層	褐色土	10YR4/6	板形覆土。ローム粒多量。

ピット3

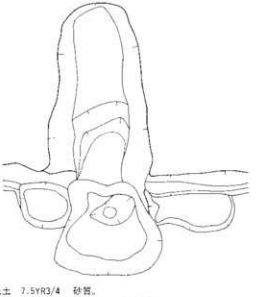
第1層	黒褐色土	10YR2/3	
第2層	暗褐色土	10YR3/4	
第3層	黄褐色土	10YR5/6	

図41　第8号住居跡



第8号住居跡新カマド

第1層　黒　色　土　10YR1.7/1　炭化物中量、ローム粒・焼土粒少量。
第2層　暗褐色土　7.5YR3/3　焼土中量、炭化物微量。
第3層　褐　色　土　7.5YR4/6　炭化物微量。焼土中量。灰微量。
第4層　赤褐色土　5YR4/6　焼土層（天井部）。
第5層　明赤褐色土　5YR5/8　焼土層（天井部）。トチの実出土。
第6層　黒　色　土　10YR2/1
第7層　黒褐色土　10YR2/2　炭化物微量。焼土少量。
（1層、7層、8層にまたがり木の実（トチの実）出土。）
第8層　黒　色　土　10YR2/1　穀類と思われる炭化物微量混入。
第9層　黒　色　土　7.5YR1.7/1　穀類と思われる炭化物中量混入。トチの実混入。
第10層　褐　色　土　7.5YR4/4　炭化物少量混入。粘土層。
第11層　黒褐色土　10YR2/2　炭化物多量。焼土中量。
第12層　黒　色　土　10YR2/1　炭化物多量。焼土微量。
第13層　赤褐色土　10YR4/8　焼土層（崩れ方が大きい天井部）。
第14層　暗褐色土　10YR3/3　炭化物・焼土少量。ローム微量。
第15層　赤褐色土　5YR4/6　焼土（天井部）。
第16層　褐　色　土　7.5YR4/6　焼土（天井部）。灰・炭化物微量。
第17層　暗褐色土　7.5YR3/3　ローム。焼土微量。
第18層　赤褐色土　5YR4/8　焼土（天井部）。
第19層　暗褐色土　7.5YR3/4
第20層　赤褐色土　7.5YR4/6　焼土（天井部）。炭化物微量。
第21層　赤褐色土　5YR4/6　焼土層（天井部）。
第22層　暗褐色土　7.5YR3/4　炭化物・ローム粒微量。
第23層　褐　色　土　7.5YR4/3　焼土ブロック。
第24層　暗褐色土　7.5YR3/2　炭化物中量。焼土微量。
第25層　黒褐色土　10YR2/3　炭化物中量。焼土少量。
第26層　赤褐色土　5YR4/6　焼土。火床面？
第27層　暗褐色土　7.5YR3/4　煙道部側壁。
第28層　暗褐色土　10YR3/4　ローム少量。炭化物微量。
第29層　赤褐色土　2.5YR4/6　火床部。
第30層　赤褐色土　2.5YR4/6　火床部。
第31層　褐　色　土　7.5YR4/4　ローム粒、焼土ブロック混入。
第32層　黄褐色土　10YR5/6　ローム質。



袖

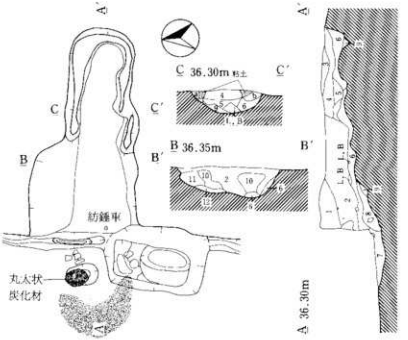
第a層　暗褐色土　7.5YR3/4　砂質。
第b層　黄褐色土　10YR5/6　砂質。
第c層　暗褐色土　7.5YR3/4　砂質。
第d層　赤褐色土　5YR4/6
第e層　暗褐色土　10YR3/4

支脚内部

第1層　黒褐色土　10YR2/1
第2層　1層と3層の混合層。
第3層　赤褐色土　5YR4/6

S＝$\frac{1}{30}$　0　1m

図42　第8号住居跡新カマド



第8号住居跡旧カマド

第1層	褐色土	10YR4/6	
第2層	黒褐色土	10YR2/3	天井部崩落土の小ブロック少量。
第3層	褐色土	7.5YR4/4	焼道天井部。下部は焼けて赤褐色を呈す。
第4層	暗褐色土	10YR3/3	焼けた天井部の小ブロック含む。炭化物中量。
第5層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒を少量。
第6層	暗褐色土	10YR3/4	ローム土との混合土。炭化物粒・焼土粒を微量。
第7層	暗褐色土	10YR3/3	焼土粒・炭化物粒・ローム粒微量。
第8層	褐色土	7.5YR4/6	天上部ブロック少量。
第9層	黄褐色土	10YR5/6	
第10層	褐色土	10YR4/4	ローム中量。焼土・炭化物少量混入。白頭山火山灰微量。
第11層	褐色土	10YR4/4	炭化物・ローム微量混入。
第12層	暗褐色土	10YR3/4	ローム少量。炭化物微量入。
9層	褐色土	10YR4/6	粘土。焼けている。
8層	褐色土	10YR4/6	

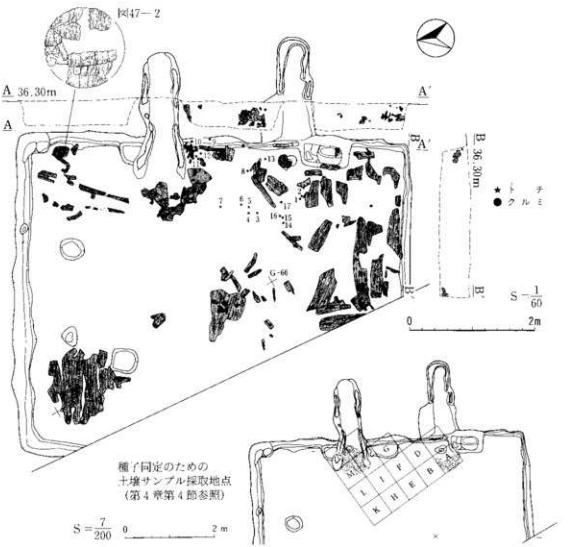


図43　第8号住居跡旧カマド・炭化物出土状況

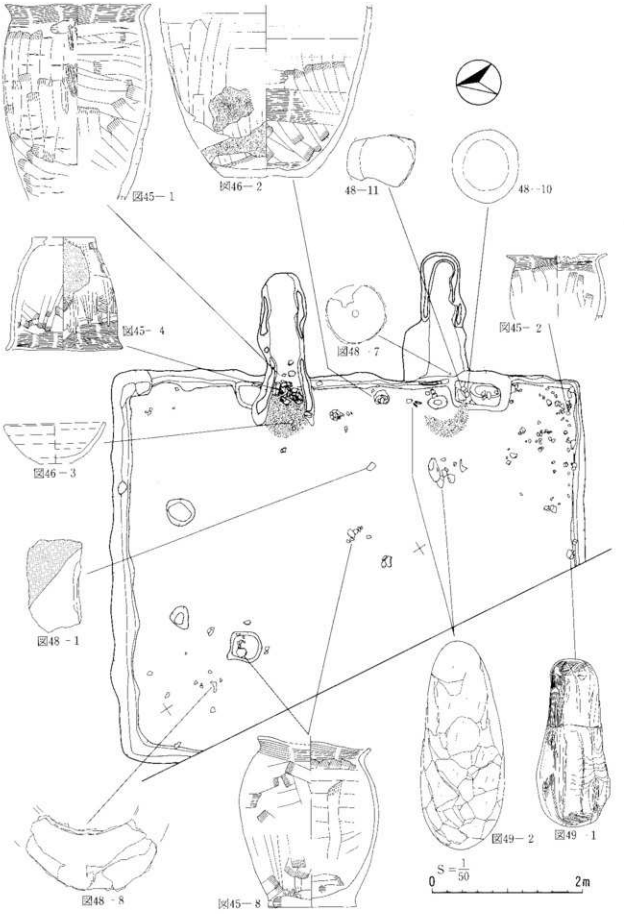
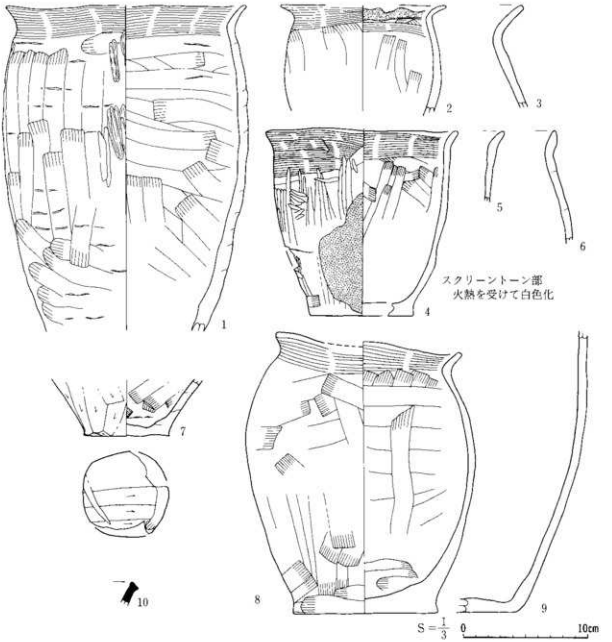
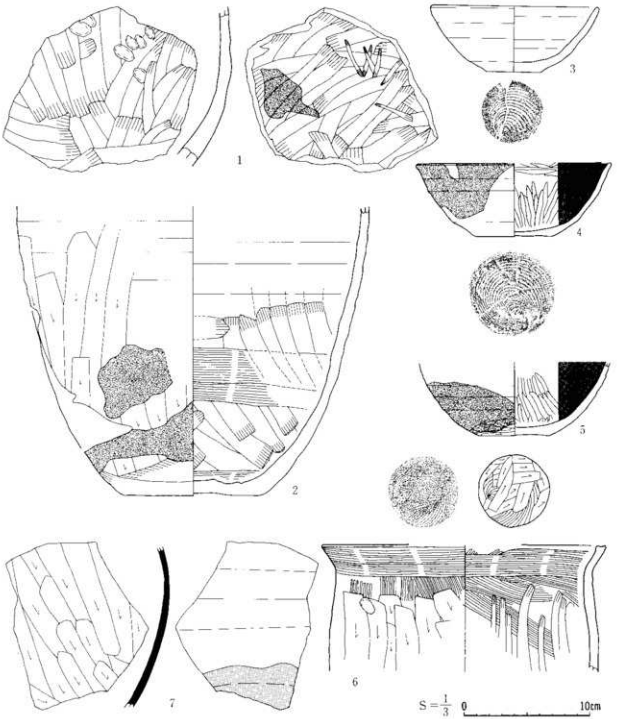


図44　第8号住居跡遺物出土状況



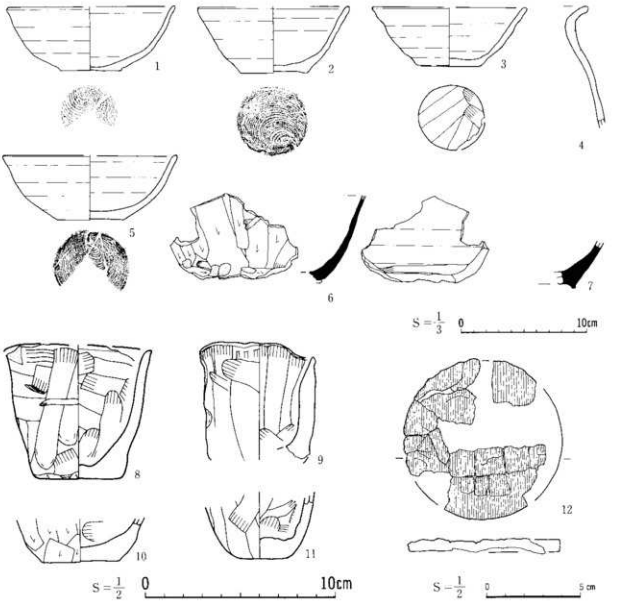
番号	種類	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底部調整	胎土	分類	備考	図版番号
1	土師器	壺	新カマド	覆土	(19.2)	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	粗砂中量	A I		8
2	〃	壺	－	床面	(13.4)	－	－	ヨコナデ→ヘラナデ	ヘラナデ	－		BIIIb	内面口縁付近にスス付着	10
3	〃	壺	新カマド	覆土	(14.8)	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ		小礫少量	A II		20
4	〃	甕	新カマド	床面	15.2	(8.2)	(14.8)	ヨコナデ・ミガキ	ヘラナデ→ヨコナデ		小礫多量	B I a	支脚、火熱を受けて白色化	2
5	〃	甕	－	床面	(12.0)	－	－	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ	－	粗砂多量	B I a		21
6	〃	壺	新カマド	覆土	－	－	－	ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラナデ	－	小礫中量	AIV		22
7	〃	甕	－	床面	－	(6.8)	－	ケズリ	ヘラナデ	ケズリ・ナデ		BVa	内面輪積痕明瞭	8
8	〃	甕	－	床面	19.2	11.3	23.5	ヨコナデ ヘラナデ、ユビナデ	ヨコナデ ヘラナデ、ユビナデ	ヘラナデ	小礫多量	BII		19
9	〃	甕	－	床面	－	(10.0)	－	ヘラナデ・ケズリ	ヘラナデ、ユビナデ		小礫中量	AVb		9
10	須恵器	壺	－	床面	－			ロクロ	ロクロ		密		灰色（断面灰黄色）	X-27

図45　第8号住居跡出土遺物―1



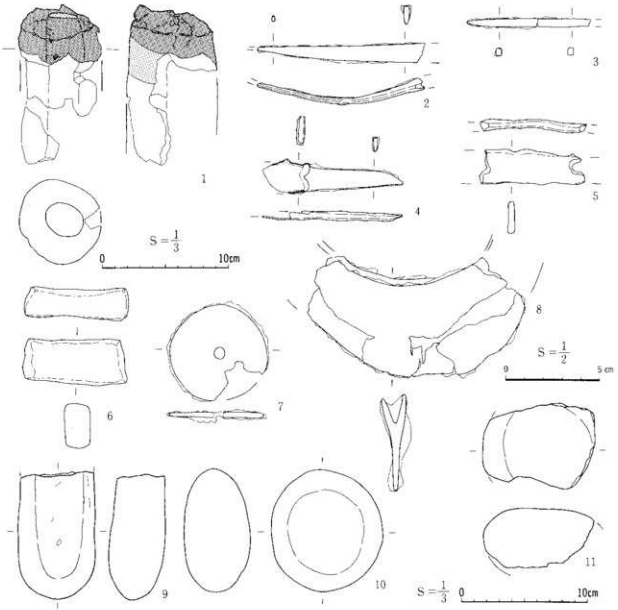
番号	種類	器形	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底部調整	胎土	分類	備考	整理番号
1	土師器	鍋	−	床面	−	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	−	小礫多量・密		内面に炭化物付着	25
2	〃	甕	P(1)7	1層	−	10.8	−	ロクロ→ケズリ→ナデ	ロクロ→ヘラナデ		小礫多量	AVb		7
3	〃	坏		床面	13.3	4.9	5.3	ロクロ	ロクロ	回転糸切→無		A2c		3
4	〃	坏	−	床面	(14.8)	6.0	5.9	ロクロ	ミガキ	回転糸切→ケズリ	長石・密	A1d	内面内黒処理、外面に煤付着	11
5	〃	坏		床面	−	5.9	−	ロクロ→ケズリ	ミガキ	回転糸切→ケズリ		A1a	内面内黒処理、外面に煤付着	13
6	〃	甕	−	2層	(22.6)			ハケメ→ケズリ、ヨコナデ	ハケメ→ヘラナデ→ヨコナデ	−	長石少量・密	A1d		24
7	須恵器	壺	P(1)5	埋土	−	−	−	ロクロ	ロクロ				内面に自然釉 (灰白色(黒部)によい赤褐色)	5-53

図46　第8号住居跡出土遺物―2



番号	種類	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底部調整	胎土	分類	備考	実測番号
1	土師器	坏		2層	(13.6)	(4.6)	5.1	ロクロ	ロクロ	回転糸切	密	A2b	胎土橙色、底部の胎土に赤い	16
2	〃	坏	−	2層	(12.0)	5.6	5.3	ロクロ	ロクロ	回転糸切	密	A2d		14
3	〃	坏		2層	(12.4)	5.3	4.7	ロクロ	ロクロ	ナデ	もろい	A2d	黒斑激しい	15
4	〃	甕	−	3層	(24.0)	−	−	ヨコナデ	タコナデ	−	粗砂多量	AIV	口縁にやがみ有り	6
5	〃	坏		2層	(13.8)	(5.2)	(5.1)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細密	A2c		12
6	須恵器	壺	−	3層	−	−	−	ケズリ	ロクロ	−	密		灰色（断面において黒褐色）	A-52
7	〃	甕		2層	−	−	−	ケズリ	ロクロ	菊花文	密			A-28
8	土師器	ミニチュア	−	床面	(7.8)	(4.3)	(6.8)	ユビナデ	ユビナデ					1-3
9	〃	ミニチュア	−	床面	5.8	(5.0)	(6.0)	ヘラナデ、ユビナデ	ユビナデ	−				1-22
10	〃	ミニチュア	新たなマド	覆土	−	(4.2)	−	ケズリ	ユビナデ		小礫中量			23
11	〃	ミニチュア	−	床面	−	2.8	−	ユビナデ	ユビナデ					1-26

図47　第8号住居跡出土遺物―3

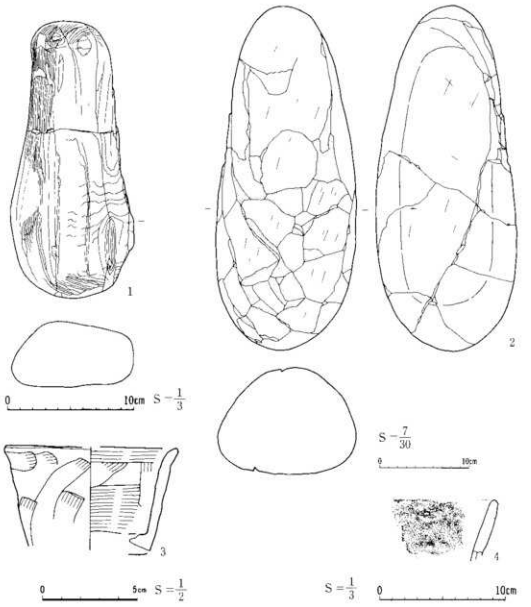


番号	種類	出土位置	層位	長さ(cm)	外径(cm)	内径(cm)	重量(g)	備考	実測番号
1	羽口	8住新カマド	床面	13.0	6.6	2.8	393.1		18

番号	種類	名称	出土位置	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	磁着度	備考	実測番号
2	鉄製品	刀子?	8住新カマド	左袖脇覆土	8.9	1.0	0.6	5.9	A	基の部分か	11
3	〃	紡軸?	8住	覆土	7.2	0.4	0.4	2.3	C		10
4	〃	刀子	8住新カマド	覆土	7.5	1.5	0.4	5.0	A	茎の部分か	9
5	〃	不明	8住	8層	5.7	1.7	0.4	8.1	A	木片が付着、炭化材の可能性も有	13
6	〃	不明	8住Pit 3	覆土	5.3	2.4	1.5	84.7	C		12
7	〃	紡軸	8住北ドカマド	煙道部底面	—	—	0.3	13.6	B	直径5.1cm、孔径0.6cm	12
8	〃	鏃先	8住	床直	—	—	1.5	79.1	C	中央部幅3.1cm	14

番号	種類	出土地点	器種	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	実測番号
9	石器	8住床直	不明	D 3	閃緑石	10.2	6.2	4.3	453.9	S－20。被熱。全体に平滑。	66
10	〃	8住床直	敲磨器	B	閃緑岩	9.7	8.9	5.2	627.3	S－25。磨石。表面滑らか。被熱。	92
11	〃	8住床直	敲磨器	B	閃緑岩	(6.8)	(9.0)	(4.7)	403.6	S－24。球状磨石?。表面滑らか。被熱。	169

図48　第8号住居跡出土遺物－4



番号	種類	出土地：層	器種	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	整理番号
1	石器	8住床直	不明	D-3	珪化木	22.1	9.8	(5.2)	1431.4	S 17。焼熱。	99
2	〃	8住・1号土層	不明	D-2	緑色凝灰岩	38.9	15.7	(11.8)	10200	8住床面S-2～3－7＋8＋12－13＋1号土層S 8。小さく割れている。	136

番号	種類	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底部調整	胎土	分類	備考	整理番号
3	土師器	ミニチュア	－	2層	(9.2)	－	－	ヘラナデ、ユビナデ	ユビナデ	－				1130

番号	種類	器種	出土位置	層位	外面の文様・地文	内面調整	備考	整理番号
4	土器	深鉢	－	床面	無文	－		3

図49　第８号住居跡出土遺物－５

第9号住居跡（図50～53、写真8・24）

［位置］　E・F－62グリッドに位置している。焼失家屋である。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　平面形は方形で、規模は東壁2.53m、南壁2.25m、西壁2.43m、北壁2.15mである。床面積は、4.84㎡である。主軸方位はN－114°－Eである。

［壁・床面］　壁高は20～27cm前後である。床面は全般に平坦で堅緻である。床面から床面直上にかけて、炭化材を検出した。

［カマド］　東壁のやや北寄りの場所に検出した。本体はやや砂質の粘土を主体に構築されている。焚口部の両脇には、30cmの幅で羽口を立てている。火床面は、25×30cmの楕円形状の酸化面を形成している。カマドの内壁の幅40cm、奥行き45cmほどである。煙道部は半地下式で、壁辺から74cm外方へ階段状に延びている。

［壁溝］　壁溝は一周し、幅10～15cm、深さは東・南・北側では10～20cm、西側では20～30cmである。

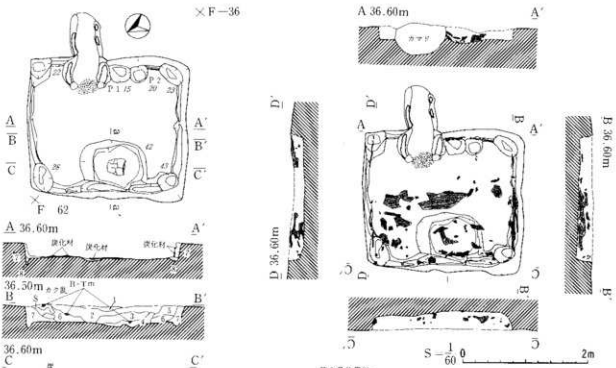
［柱穴・ピット］　各壁のコーナーに4個、カマド右側に2個のピットと、西壁側に土坑を検出した。柱穴は各壁のコーナーに検出したピットで、掘り方の平面形は楕円形のものと隅丸方形のものがある。床面からの深さ22～43cmである。西側に検出した土坑は、35×52cmの隅丸方形で、深さ42cmである。堆積土の上部には、白頭山火山灰が小ブロック状に見られ、ほぼ同レベルの位置に炭化物材を検出した。中位の第5層は焼土層で、ここから土師器の甕（完形）が横転の状態で出土している。

［堆積土］　7層に分層できた。大半が黒褐色土と暗褐色土とで占められる。また、第4・6層上位には白頭山火山灰が小ブロック状に見られ、第7層上部にも少量含まれている。床面直上には焼土の薄層が部分的見られ、炭化材は焼土層の下から検出された。

［炭化材の検出状況］　カマドのある東側を除いた床面に炭化材を検出した。ほとんどが板状であり、タルキや柱材と思われるものは見られなかった。板材の中には、幅30cmと思われるものがある。また、壁溝に沿って、腰板と思われる炭化材が壁に沿って垂直に見られた。残存状況はそれほど良くなく、板材の幅は確認できる状況ではなかったが、東・南・北壁では木目が横方向に、西壁では縦方向に見られた。

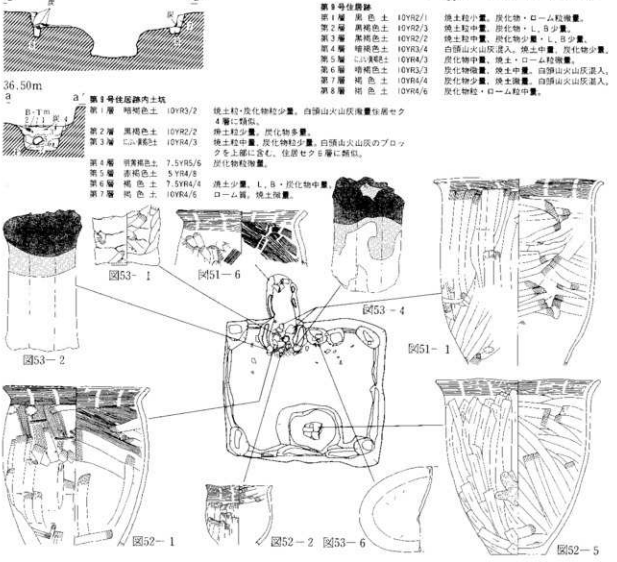
［出土遺物］　カマドから多量の遺物が出土した。図示したものは、カマド覆土より土師器甕5点と坏2点、須恵器壷1点、羽口2点、カマド底面より支脚1点、カマドの袖として羽口2点である。また、土坑内から甕が出土し、その中からは鉄滓1点、アカザ科－ヒユ科の炭化種子2点が検出された。その他、カマド覆土から須恵器の大甕片3点、床面直上より土師器甕、台石1点などが出土している。

（畠山　昇・赤羽　真由美）



第9号住居跡

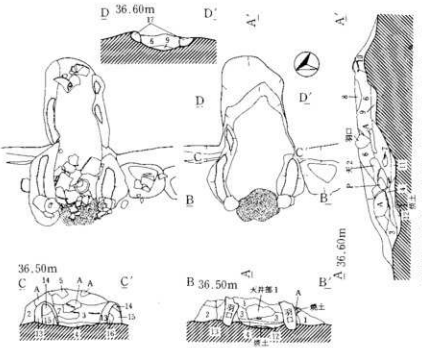
第1層	黒色土	10YR2/1	焼土粒少量。炭化物・ローム粒微量。
第2層	黒褐色土	10YR2/3	焼土粒中量。炭化物・L、B少量。
第3層	黒褐色土	10YR2/2	焼土粒中量。炭化物少量・L、B少量。
第4層	暗褐色土	10YR3/4	白頭山火山灰混入。焼土中量。炭化物少量。
第5層	にぶい黄褐土	10YR4/3	炭化物中量。焼土・ローム粒微量。
第6層	暗褐色土	10YR3/3	炭化物微量。焼土中量。白頭山火山灰混入。
第7層	褐色土	10YR4/4	炭化物少量。焼土微量。白頭山火山灰混入。
第8層	褐色土	10YR4/6	炭化物粒・ローム粒中量。

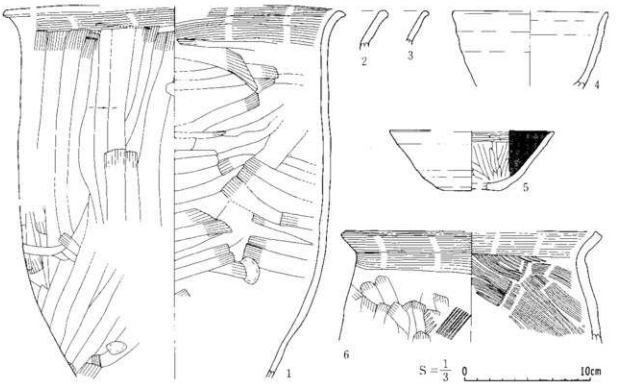


第3号住居跡内土坑

第1層	暗褐色土	10YR3/2	焼土粒・炭化物粒少量。白頭山火山灰微量住居セク4層に類似。
第2層	黒褐色土	10YR2/2	焼土粒少量。炭化物多量。
第3層	にぶい黄褐土	10YR4/3	焼土粒中量。炭化物粒少量。白頭山火山灰のブロックを上部に含む。住居セク6層に類似。
第4層	明黄褐色土	7.5YR5/6	炭化物粒微量。
第5層	赤褐色土	5YR4/8	
第6層	褐色土	7.5YR4/4	焼土少量。L、B・炭化物中量。
第7層	褐色土	10YR4/6	ローム質。焼土微量。

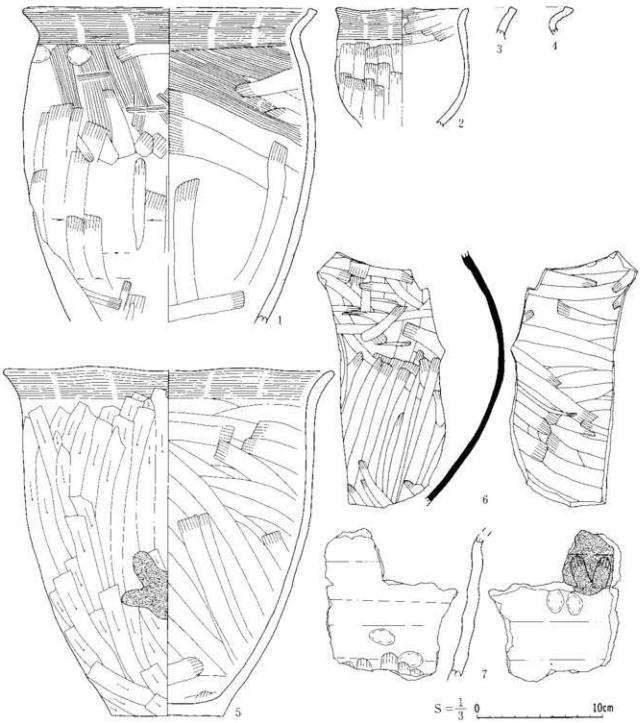
図50　第9号住居跡・遺物出土状況





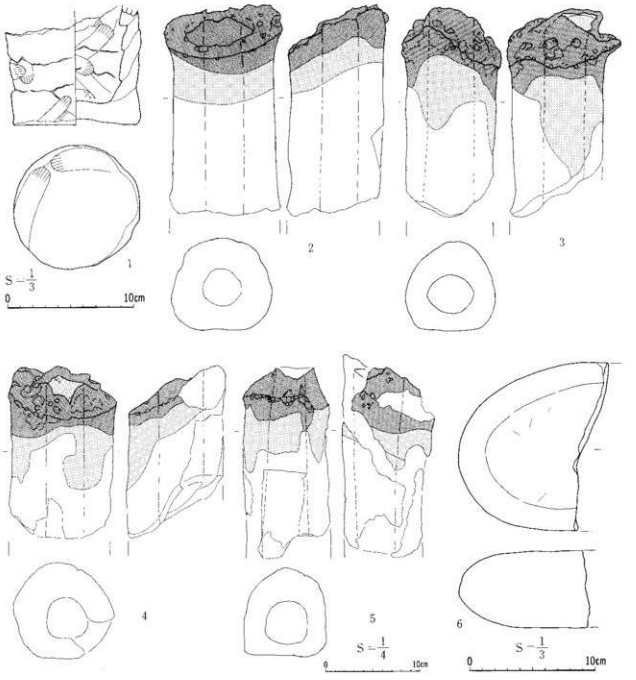
番号	時期	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	分類	備考	実測番号
1	上師器	甕	カマド	覆土	(27.3)			ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ	—	粗砂多量・砂礫	A1		1
2	〃	甕	カマド	覆土	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	—	粗砂少量・砂礫骨針	AIV		12
3	〃	甕		床面				ヨコナデ	ヨコナデ	—	小礫少量・砂礫骨針	VIV		11
4	〃	坏	カマド	覆土	(13.4)	—	—	ロクロ	ロクロ	—	密	A3d		7
5	〃	坏	カマド	—	(13.0)	(4.4)	4.8	ロクロ	ミガキ	回転糸切		A1b	内面黒色処理	8
6	〃	甕	カマド	覆土	(29.0)	—	8.7	ヨコナデ・ウノメ・ヘラナデ	ハケメ・ヘラナデ	—	小礫少量	AIII	西浜E.X.A付属	2

図51　第9号住居跡カマド・出土遺物—1



番号	種類	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	砂粒	分類	備考	整理No
1	土師器	甕	カマド	覆土	(22.4)	－	－	ハケメ→ヘラナデ	ハケメ→ヨコナデ→ヘラナデ	－	小礫中量	AIII		3
2	〃	甕		覆土	(10.4)		－	ヨコナデ→ヘラナデ	ヘラナデ、ユビナデ	－	粗砂少量	CII		6
3	〃	甕	－	覆土	－	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	－		AIV		10
4	〃	甕	－	覆土	(13.8)	－		ナデ→ヘラナデ	ヨコナデ	－	密	BIV	暗灰色	13
5	〃	甕	土坑内	覆土	26.0	8.8	27.5	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	砂底	小礫多量	AIII	土坑内に倒置されていた	5
6	須恵器	壺	カマド	覆土	－	－		ヘラナデ	ヘラナデ	－	密		脂土分析No.3	ス3
7	土師器	甕	カマド	覆土		－	－	ロクロ→ナデ	ロクロ、ナデ	－	海綿骨針		内面に炭化物付着	9

図52　第9号住居跡出土遺物―2



番号	種類	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底部調整	胎土	分類	備考	実測番号
1	土師器	支脚	カマド	床面		9.8	－	ユビナデ	ユビナデ、ヘラナデ	ナデ	小礫多量		支脚、大勢を等ほぼ完形。	4

番号	種類	出土位置	層位	長さ(cm)	外径(cm)	内径(cm)	重量(g)	備考	実測番号
2	羽口	9住カマド	床面	22.5	10.6	4.2	1728.7	袖芯材	6
3	〃	9住カマド	覆土	22.3	9.5	5.0	825.4		10
4	〃	9住カマド	炭面	48.3	19.7	4.0	4132.7	袖芯材	7
5	〃	9住カマド	覆土	20.0	8.6	4.0	999.5		8

番号	種類	出土地点	器種	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	実測番号
6	石器	9住床面	台石類	C2	流紋岩	13.4	12.3	6.4	1352.9	S 3。被熱。1/2残。全体に平滑、とくに平面は滑らか。	60

図53　第9号住居跡出土遺物－3

第10号住居跡（図54・55、写真10）

［位置］　Ｃ・Ｄ－50グリッドに位置している。

［重複］　第11号住居跡と重複し、これより古い。

［平面形・規模］　平面形はほぼ方形で、規模は北東壁2.9m、南東壁3.02m、南西壁2.83m、北西壁2.84mである。また、床面積は、7.58㎡であり、住居の主軸方位はＮ－125°－Ｅである。

［壁・床面］　壁高は30～55㎝前後である。床面は全般に平坦で堅緻である。

［カマド］　カマドは南東壁の南寄りに構築されている。本体は粘土質の黄褐色土を主体として構築されている。内壁の幅40㎝、奥行き60㎝である。火床面は良く焼けていて、40×50㎝の酸化面を形成している。煙道部は緩やかに低くなり、煙出し孔の付近ではさらに20㎝深く掘り込まれている。
壁に近い場所では、溝状に掘った後に褐色の粘土（６層）で天井部をつくり、煙出し孔に近い部分では地山をトンネル状に掘りぬいている。煙出し孔は壁から1.15m離れてたところに造られ、掘り方上部内側には10～25㎝の厚さの粘土が貼られている。一部に撹乱を受けているが、内側は径30㎝ほどの楕円形を呈するものと思われる。また、検出面からの深さは80㎝である。

［壁溝］　検出できなかった。

［柱穴・ピット］　カマドの両脇から深さ７㎝ほどの浅いピットを２個検出した。また、柱穴は検出されなかった。

［堆積土］　大半は褐色土で占められ、ローム粒やローム・ブロックを多量に含んでいる。人為堆積である。

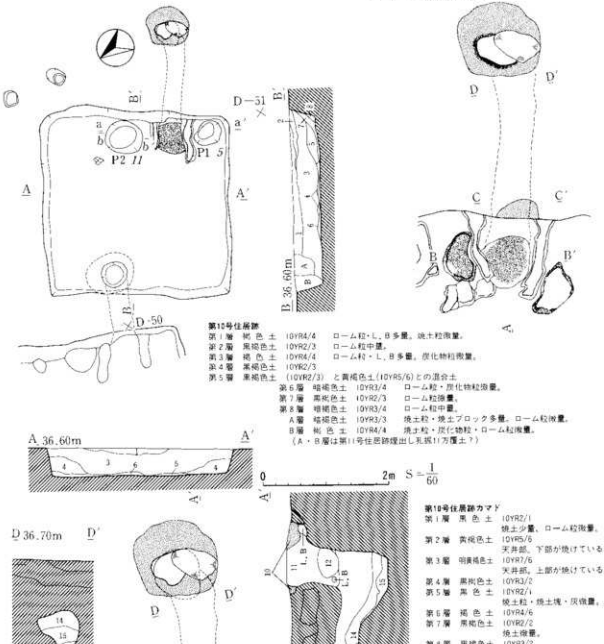
［出土遺物］　堆積土と床面から少量の土師器片が出土した。甕片約50点、坏片15点のみである。ほとんど接合しないため、本住居跡に伴うとは言い難い。

（畠山　昇・赤羽　真由美）

番号	種別	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底部調整	胎土	分類	備考	整理番号
1	土師器	甕	－	床面	(17.0)	－	－	ロクロ	ロクロ	－	粗砂多量	AIV		4
2	〃	甕	－	床面	－	－		ヨコナデ	ヨコナデ	－	小礫少量	BIV		3
3	〃	甕	－	床面		－	－	ナデ	ヘラナデ		小礫多量	AVb		1
4	〃	甕	ﾋﾟｯﾄ覆土部	－	－	－		ケズリ	ヘラナデ		粗砂中量	AVb		2

図54　第10号住居跡出土遺物

カマド天井部崩落状況



第12号住居跡

第1層　褐色土　10YR4/4　ローム粒・L, B多量。焼土粒微量。
第2層　黄褐色土　10YR2/3　ローム粒中量。
第3層　褐色土　10YR4/4　ローム粒・L, B多量。炭化物粒微量。
第4層　黒褐色土　10YR2/3
第5層　黒褐色土　(10YR2/3)　と黄褐色土(10YR5/6)との混合土
第6層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒・炭化物粒微量。
第7層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒微量。
第8層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒中量。
A層　暗褐色土　10YR3/3　焼土粒・焼土ブロック多量。ローム粒微量。
B層　褐色土　10YR4/4　焼土粒・炭化物粒・ローム粒微量。
(A・B層は第11号住居跡煙出し瓦抜1)方覆土？)

第10号住居跡カマド

第1層　黒色土　10YR2/1
焼土少量。ローム粒微量。
第2層　黄褐色土　10YR5/6
天井部。下部が焼けている。
第3層　明黄褐色土　10YR7/6
天井部。上部が焼けている。
第4層　黒褐色土　10YR3/2
第5層　黒色土　10YR2/1
焼土粒・焼土塊・炭微量。
第6層　褐色土　10YR4/6
第7層　黒褐色土　10YR2/2
焼土微量。
第8層　黒褐色土　10YR3/2
焼土塊少量。
第9層　暗褐色土　10YR3/3
ローム粒・焼土粒・炭化物粒少量。
第10層　黄褐色土　10YR5/6
焼られた粘土。
第11層　暗褐色土　10YR3/4
炭化物少量。
第12層　褐色土　10YR4/4
ローム粒少量。
第13層　黒褐色土　10YR3/2
焼色土少量。
第14層　暗褐色土　10YR3/3
焼土少量。
第15層　暗褐色土　7.5YR3/3
焼土中量。炭化物粒少量。
① 暗褐色土　10YR3/3
② 褐色土　10YR4/6

図55　第10号住居跡・カマド

第11号住居跡（図56・57、写真10・25）

［位置］　Ｃ・Ｄ―49・50グリッドに位置している。

［重複］　第10号住居跡と重複し、これより新しい。

［平面形・規模］　平面形はほぼ長方形で、規模は北東壁3.06m、南東壁3.78m、南西壁2.97m、北西壁3.90mである。また、床面積は、9.90m²であり、住居の主軸方位はＮ―111°―Ｅである。

［壁・床面］　壁高は30～40cm前後である。床面は全般に平坦で堅緻であるが、南西部分は160×190cmの隅丸方形状の浅いくぼみ（床面から4～7cm低い）が見られ、この部分は特に堅く踏みしめられている。

［カマド］　カマドは東壁の南寄りに構築されている。カマド本体は砂質気味の白色粘土を主体に構築されており、天井部は左袖方向に崩落していた。内壁の幅は50cmで、奥行き60cm前後である。火床面は床面より若干高く、50×70cmの広さの酸化面を形成している。また、中央には土師器の小型甕を伏せて支脚としている。

煙道部（幅40cm、高さ30cm）は床面とほぼ同じレベルで水平を保ちながら、トンネル状に掘り込まれている。煙出し孔は、壁から70cm離れたところ（第10号住居跡内）に造られている。検出面からの深さは約60cmであり、やや急に立ち上がる。また、煙出し孔の掘形は60×75cmの規模であるが、内壁には7cmの厚さの粘土が貼られ、内径40cmほどの煙出し孔が造られている。煙道部の中位からは羽口が出土している。

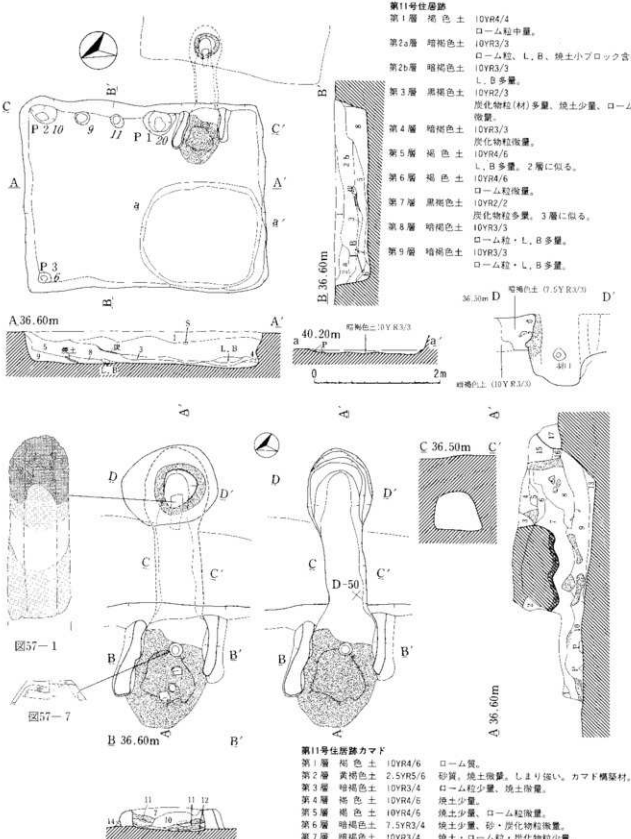
［壁溝］　検出できなかった。

［柱穴・ピット］　５個のピットを検出した。カマドの左袖そばに検出したＰ１は深さ20cm、ほかは6～11cmである。このうち柱穴の可能性が考えられるのは、北壁の東西端に検出した２個のピット（Ｐ２、Ｐ３）である。なお、これに対応する南壁の東西端にはピットを検出できなかった。

［堆積土］　９層に分層できた。大半はローム粒・ローム塊を含んだ暗褐色土と褐色土で、人為堆積の様相を呈している。中位の第３層及び床面直上の第７層には炭化物（材）が多量に含まれている。

［出土遺物］　土師器、須恵器、石器、羽口、鉄滓が出土した。床面からは少量の遺物が出土し、カマド前方のくぼみからの出土が多い。図示できたものは、土師器甕１点、坏１点、須恵器長頸壷１点、大甕１点である。このうち、図57-2の甕は倒立状態で出土したものである。また、図57-4の坏は８号住居跡の床面から出土した土器片と、図57-10の大甕は６号住居の堆積土から出土した破片とそれぞれ接合した。カマド内からも若干の遺物が出土した。甕２点と坏１点、羽口１点を図示した。図57-1は煙道部の堆積土中から出土したものである。石器は堆積土よりフレイク１点、Ｒフレイク１点が出土した。鉄滓は堆積土中より５点出土した。

（畠山　昇・赤羽　真由美）



第11号住居跡

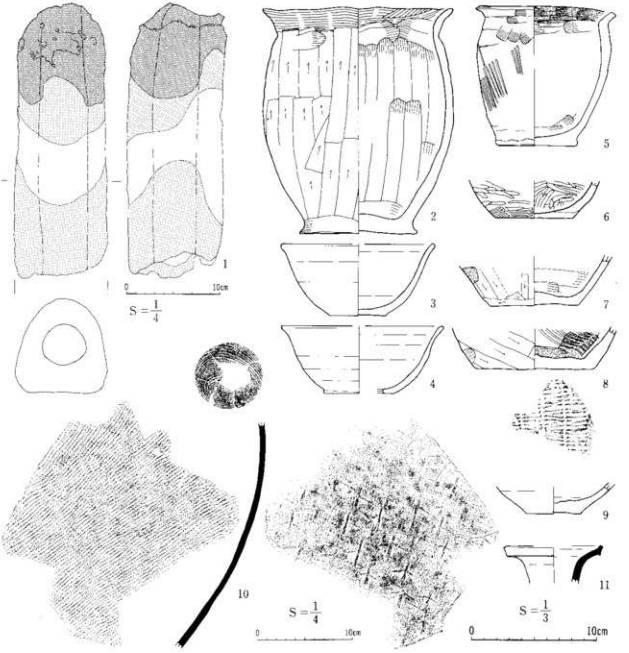
第1層	褐色土	10YR4/4	ローム粒中量。
第2a層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒、L、B、焼土小ブロック含む。
第2b層	暗褐色土	10YR3/3	L、B多量。
第3層	黒褐色土	10YR2/3	炭化物粒(M)多量、焼土少量、ローム粒微量。
第4層	暗褐色土	10YR3/3	炭化物粒微量。
第5層	褐色土	10YR4/6	L、B多量。2層に似る。
第6層	褐色土	10YR4/6	ローム粒微量。
第7層	黒褐色土	10YR2/2	炭化物粒多量。3層に似る。
第8層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒・L、B多量。
第9層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒・L、B多量。

第11号住居跡カマド

第1層	褐色土	10YR4/6	ローム質。
第2層	黄褐色土	2.5YR5/6	砂質、焼土微量。しまり弱い。カマド構築材。
第3層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量、焼土微量。
第4層	褐色土	10YR4/6	焼土少量。
第5層	褐色土	10YR4/6	焼土少量、ローム粒微量。
第6層	暗褐色土	7.5YR3/4	焼土少量、砂・炭化物粒微量。
第7層	暗褐色土	10YR3/4	焼土・ローム粒・炭化物粒少量。
第8層	黄褐色土砂	2.5YR5/6+赤褐色砂	5YR4/6（焼土化）
第9層	暗褐色土	7.5YR3/4	焼土多量。
第10層	黄褐色土砂	2.5YR5/6	天井部崩落土。
第11層	明褐色砂	7.5YR5/6	2層の焼けたもの。
第12層	褐色土	7.5YR4/4	焼土多量、炭化物粒微量。

$S=\frac{1}{30}$　0 ―― 1m

図56　第11号住居跡カマド



遺号	種類	出土位置	層位	底径(cm)	外径(cm)	内径(cm)	重量(g)	備考	実測番号
1	封口	11住カマド埋土部	埋土中	29.5	10	5.3	1946.1		5

番号	種類	器種	出土位置	層位	口径	高径	器厚	外面調整	内面調整	底部調整	胎土	分類	備考	実測番号
2	土師器	壺		床面	15.2	9.4	18.0	ヨコナデ→ケズリ	ヨコナデ→ヘラナデ		小礫小量	B1b	表面に黒ずんだ部分が残された	2
3	〃	坏	カマド	—	(12.4)	4.4	5.7	ロクロ	ロクロ	回転糸切		A2b	磨耗激しい	4
4	〃	坏		床面	(12.7)	3.3	5.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切	密	A2b	8Gk灰白と接合	3
5	〃	壺	住構部	—	11.2	6.3	11.3	ハケメ、ヘラナデ	ヘラナデ		小礫多量	C11	発泡多い・二重口縁は大幅	1
6	〃	坏		覆土	—	6.1	—	ケズリ→ハケメ→ミガキ	ミガキ	ケズリ→ナデ	密	B2		10
7	〃	壺	カマド	—		7.1	—	ケズリ	ユビナデ	木葉痕	粗砂多量	BVb		5
8	〃	甕		覆土	—	(9.7)	—	ケズリ	ナデ→ハケメ		粗砂少量	AVb	内面にススが付着	12
9	〃	坏	—	覆土	—	4.2		ロクロ	ロクロ	回転糸切		A2g		7
10	須恵器	大壺	—	床面		—	—	タタキメ（格子）	当て具痕	—	粗砂多・密		灰色（表面がわいた黒色）6作環状と接合	X-10
11	〃	長頸壺	—	床面	7.4	—		ロクロ	ロクロ	—	密		黄灰色・胎土分析No.11	X-11

図57　第11号住居跡出土遺物

第12号住居跡（図58・59、写真10・25）

［位置］　D・E－49グリッドに位置しているが、町道があるため全体を調査出来なかった。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　全体を調査出来なかったため、平面形・規模ともに不明である。東壁は3.00mであり、35cmほど張り出している。南壁は確認できた部分で2.53m（したがって壁長はこれ以上）である。住居の主軸方位はN－115°－Eである。

［壁・床面］　壁高は56～64cmであり、床面は全般に平坦で堅緻である。

［出入口］　東壁の張り出した部分が、階段状になっている。この部分は幅85cm、奥行き40cmで、床面よりも30cm高く、検出面までは18cmの高さである。カマドの左側に隣接し、出入口部分と推定される。

［カマド］　カマドは東壁の中央付近－やや東寄りに構築されている。本体は砂質気味の白色粘土を主体にしており、右袖の一部に礫を用いている。内壁の幅は40cmほどで、ほぼ煙道部の幅と同じである。煙道部はトンネル状に急傾斜で低く掘り込まれ、煙出し孔の底面では、さらに10cm深くなっている。煙出し孔は壁から0.65m離れており、平面形は径40cmほどの不整円形、深さ112cmである。

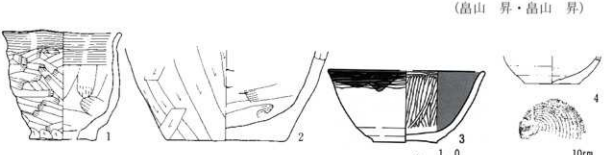
［壁溝］　東壁の南寄りから南壁に沿って検出した。幅15cm、深さ10～15cmである。

［柱穴・ピット］　3個のピットを検出した。このうち、南東隅のコーナーに検出したＰ１と南壁中央付近に検出したＰ２が柱穴と思われる。Ｐ１は深さ23cm、Ｐ２は深さ64cmである。

［堆積土］　ローム粒・ローム塊を多量に含んだ暗～黒褐色土が大半を占めており、人為堆積の様相を呈している。

［出土遺物］　カマドと堆積土から土師器、石器、羽口、鉄滓、炭化種子が出土している。カマド底面より出土した支脚片が第４号住居跡の堆積土から出土した支脚（図26－4）に接合した。堆積土からは、土師器甕、坏、ミニチュア１点、フレイク１点、羽口２片、鉄滓１点、炭化したオニグルミ２点、栃の実１点が出土した。図57-1の小型甕が第13号住居跡の堆積土から出土した土器片と接合した。

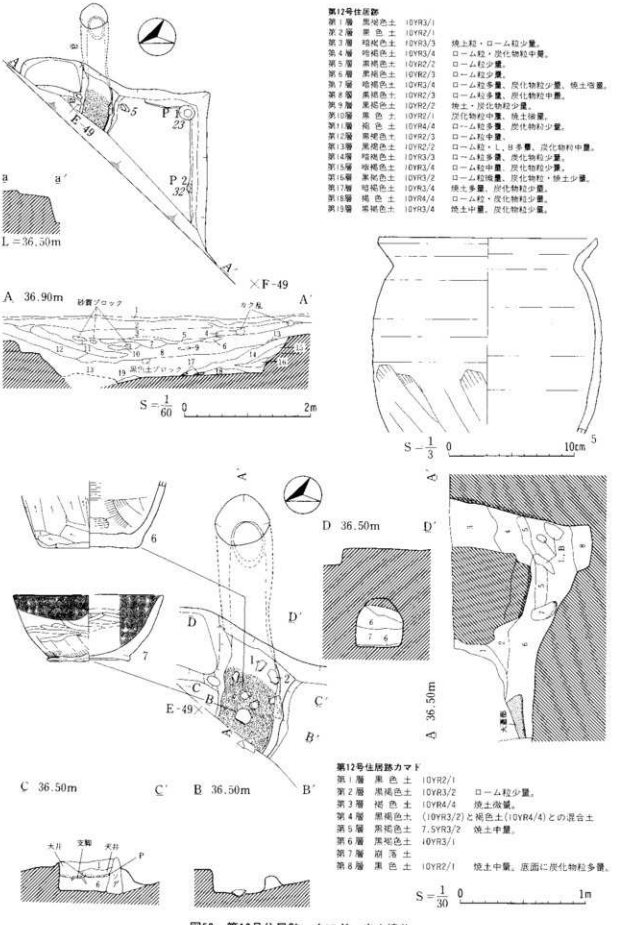
（畠山　昇・畠山　昇）



番号	種類	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	色土	分類	備考	整理番号
1	土師器	甕	-		9.4	(5.4)	8.5	ヘラナデ→カンナ?ナデ、ケズリ	コビキナデ	コビキナデ	小礫中量	CII	C－4R（3層）黒色粘土と混合	2-1
2	〃	甕	－	覆土	－	(9.4)	－	ケズリ	コビキナデ	砂底	小礫中量	AVb		6
3	〃	坏	－	覆土	(12.4)	5.2	3.7	ロクロ→回転ミガキ	ミガキ	回転糸切	密	AIb	内面赤彩痕、内面にススが付着	4
4	〃	坏	-	覆土		(5.4)	-	ロクロ	ロクロ		密	A2c		5

番号	種類	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	色土	分類	備考	整理番号
5	土師器	甕	－	覆土	17.4	－	－	ロクロ→ヘラナデ	ロクロ		小礫+雲母	HIIIa		1
6	〃	甕	カマド	床面		(7.4)	－	ケズリ	コビキナデ	回転糸切	粒砂多量	BVb		3
7	〃	坏	カマド	床面	12	6.4	3.3	ユビナデ→ミガキ	ミガキ			BIa	内面内黒処理、内面にススが付着	2

図58　第12号住居跡出土遺物



第12号住居跡

第1層　黒褐色土　10YR3/1
第2層　黒　色　土　10YR2/1
第3層　暗褐色土　10YR3/3　焼土粒・ローム粒少量。
第4層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒・炭化物粒中量。
第5層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒少量。
第6層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量。
第7層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒多量、炭化物粒少量、焼土微量。
第8層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒多量、炭化物粒中量。
第9層　黒褐色土　10YR2/2　焼土・炭化物粒少量。
第10層　黒　色　土　10YR2/1　炭化物粒中量、焼土微量。
第11層　褐　色　土　10YR4/4　ローム粒多量、炭化物粒少量。
第12層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒中量。
第13層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒・L-B多量、炭化物粒中量。
第14層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒多量、炭化物粒少量。
第15層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒中量、炭化物粒少量。
第16層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒微量、炭化物粒・焼土少量。
第17層　暗褐色土　10YR3/4　焼土多量、炭化物粒少量。
第18層　褐　色　土　10YR4/4　ローム粒・炭化物粒少量。
第19層　黒褐色土　10YR3/4　焼土中量、炭化物粒少量。

第12号住居跡カマド

第1層　黒　色　土　10YR2/1
第2層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒少量。
第3層　褐　色　土　10YR4/4　焼土微量。
第4層　黒褐色土　(10YR3/2)と褐色土(10YR4/4)との混合土
第5層　黒褐色土　7.5YR3/2　焼土中量。
第6層　黒褐色土　10YR3/1
第7層　崩 落 土
第8層　黒　色　土　10YR2/1　焼土中量。底面に炭化物粒多量。

図59　第12号住居跡・カマド・出土遺物

第13号住居跡（図60、写真９）

［位置］　C－61・62グリッドに位置している。東側は調査区域外に延びているため、全体を調査できなかった。

［重複］　重複はないが、本住居には拡張が認められている。また、第２号住居跡の南側に隣接している。

新住居

［平面形・規模］　平面形はやや長方形であり、南壁3.2m、西壁3.64m、推定床面積は10.7m²である。住居の主軸方位はN－97°－Eである。

［壁・床面］　検出面からの壁高は40～50cm前後であるが、表土からの深さは90～100cmである。床面は全般に平坦で堅緻である。床面北側に炭化物の広がりが見られ、この部分の床面は焼けていた。

［カマド］　カマドは東壁の南寄りに構築されているが、調査区域外にあるため、カマドの構造は不明である。わずかに、袖の一部が検出したに過ぎない。火床面は若干掘り込まれ、硬い酸化面が形成されている。

［壁溝］　検出されなかった。

［柱穴・ピット］　４個のピットを検出した。ピットの掘り方平面形は円形、楕円形で、床面からの深さは7～11cmの浅いものである。そのため、位置的にはＰ１・Ｐ４が柱穴の可能性があるが断定できない。

［堆積土］　大半がローム・ブロックを多量に含ん暗褐色土と褐色土で占められている。人為堆積である。床面には炭化物の薄い層が見られた。

［出土遺物］　床面及び堆積土から、土師器甕片約30点、坏片３点、須恵器大甕片１点、坏片１点、台石１点、鉄滓７点が出土した。すべて細片で、接合したものは少ない。鉄滓は床面から検出された。また、北側の床面に炭化物の広がりを検出した。部分的に、小枝状のものが見られるが、本来の形状を保っていると思われるものはなく、粉状のものがほとんどである。

旧住居

［平面形・規模］　平面形はほぼ方形であり、南壁2.3m、西壁2.5m、推定床面積は5.2m²である。住居の主軸方位は、拡張後と同じN－83°－Wである。

［壁・床面］　掘り方を確認できただけで、床面は検出できなかった。新住居より５cm前後低い。

［カマド］　カマドは拡張後の住居とほぼ同位置にあり、痕跡として確認できたにすぎない。燃焼部は床面とほぼ同レベルであり、径35cmの不整円形の硬い酸化面を検出した。

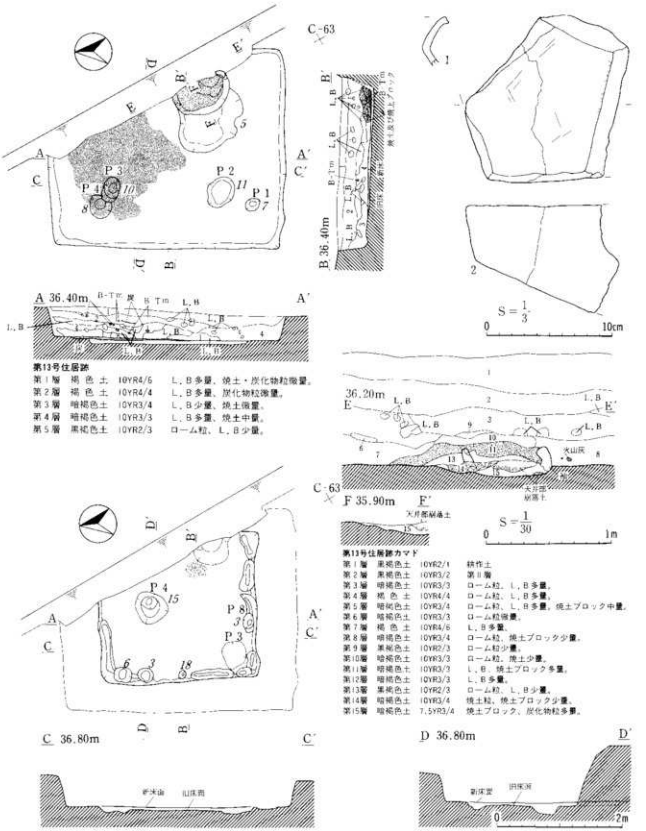
［壁溝］　壁際に幅15cm前後、深さ４～10cm前後の壁溝を検出した。ところどころ、途切れている。

［柱穴・ピット］　内側に１個、壁際に６個のピットを検出したが、柱穴と思われるものはない。壁際のピットは壁溝の一部または住居構築時の掘り方とも考えられる。

［出土遺物］　なし。

［小結］　本住居は、東側にカマドを持つ小型の住居であり、焼失家屋である。当初は、2.3×2.5mの大きさであったが、その後、南～西～北へ40～60cm拡張し、3.2×3.64mの大きさとなっている。床面積は拡張に伴って、5.2m²から10.7m²へと２倍ほど増大している。北側に隣接している第２号住居跡とは切り合い関係にはないが、調査状況からは第２号住居跡より古い可能性がうかがわれた。

（畠山　昇・赤羽　真由美）



第13号住居跡

第1層	褐色土	10YR4/6	L，B多量，焼土・炭化物粒微量。
第2層	褐色土	10YR4/4	L，B多量，炭化物粒微量。
第3層	暗褐色土	10YR3/4	L，B少量，焼土微量。
第4層	暗褐色土	10YR3/3	L，B多量，焼土中量。
第5層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒，L，B少量。

第13号住居跡カマド

第1層	黒褐色土	10YR2/1	鉄作土
第2層	黒褐色土	10YR3/2	第II層
第3層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒，L，B多量。
第4層	褐色土	10YR4/4	ローム粒，L，B多量。
第5層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒，L，B少量。焼土ブロック中量。
第6層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒微量。
第7層	褐色土	10YR4/6	L，B多量。
第8層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒，焼土ブロック少量。
第9層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量。
第10層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒，焼土少量。
第11層	暗褐色土	10YR3/3	L，B，焼土ブロック多量。
第12層	暗褐色土	10YR3/3	L，B多量。
第13層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒，L，B少量。
第14層	暗褐色土	10YR3/4	焼土粒，焼土ブロック少量。
第15層	暗褐色土	7.5YR3/4	焼土ブロック，炭化物粒多量。

番号	種類	遺構	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底部調整	胎土	分類	備考	整理番号
1	土師器	甕		覆土	－	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	－	小礫多量	A IV		1

番号	種類	出土地点・層	遺構	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	整理番号
2	石製	13(覆土)	台石類	C I	安山岩	13.3	12.2	8.5	1854.2	S－L 被熱。ややザラつく。	118

図60　第13号住居跡・カマド・出土遺物

第15号住居跡（図61～64、写真11・25）

［位置］　F・G－67・68グリッドに位置している。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　平面形は方形で、東壁3.45m、南壁3.20m、西壁3.37m、北壁3.35mで、床面積は9.63㎡である。主軸方位はN－93°－Eである。

［壁・床面］　壁高は40～70cmであり、西側がやや高い。床面は全般に平坦で堅緻である。

［カマド］　カマドは東壁の南寄りに構築されている。カマド本体は粘土質の黄褐色土で構築されているが、右袖には扁平の礫を立て、袖石としている。内壁の幅は50cmで、奥が若干狭くなっている。火床面は45×45cmの不整形を呈し、硬く焼けた酸化面を形成している。中央には羽口を立て、土師器の甕底部片を伏せて重ねて支脚としている。煙道部は地下式で、煙出し孔に向かって急斜度で低く掘り込まれている。煙出し孔は壁から50cm離れたところに造られ、42×46cmの不整円形で、深さは87cmである。確認段階で、上部に白頭山火山灰の堆積が認められている。

［壁溝］　西壁及びこれに連続する北・南壁の一部に検出した。おおむね、幅7～18cm、深さ10～30cmである。ピット状に深く掘り込まれている部分が見られた。

［柱穴・ピット］　西壁の中央付近に深さ23cmのピットを1個検出しただけである。

［堆積土］　10層に分層出来たが、8～10層は壁溝の堆積土である。住居跡の大半が黒～黒褐色土で覆われている。下部の第3層は白頭山火山灰を含んでいるためか、サラサラとしている。第5層はしっとりとして、緻密であるが、本層中～下部に白頭山火山灰をブロック状に含んでいる。壁際に見られる第6・7層はローム粒、ローム塊や粘土の焼けた塊などが混在した暗褐色土や褐色土の堆積が見られ、廃棄時の人為堆積と思われる。

また、隣接する第1号住居跡の周提からの再堆積土が、本住居の南側の第2層上部にかかっていた。

［出土遺物］　床面及び床面直上からとカマド覆土から、少量の土師器と羽口片が出土した。また、炭化材（板材）も若干出土した。

（畠山　昇）

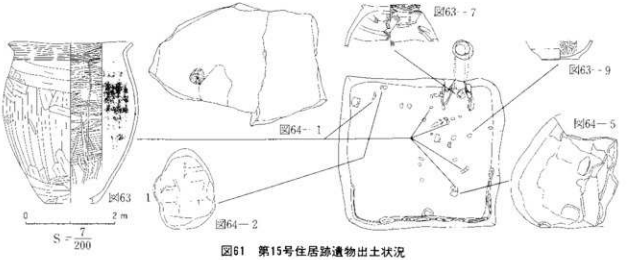
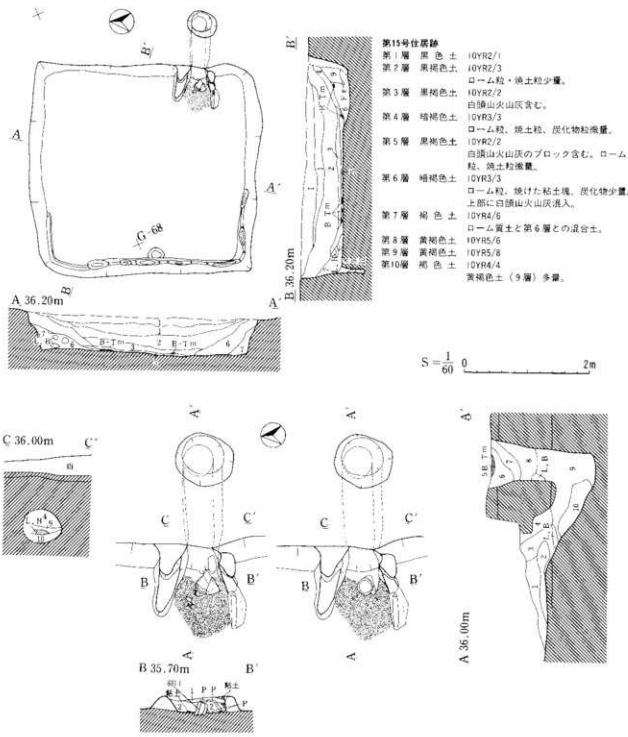


図61　第15号住居跡遺物出土状況



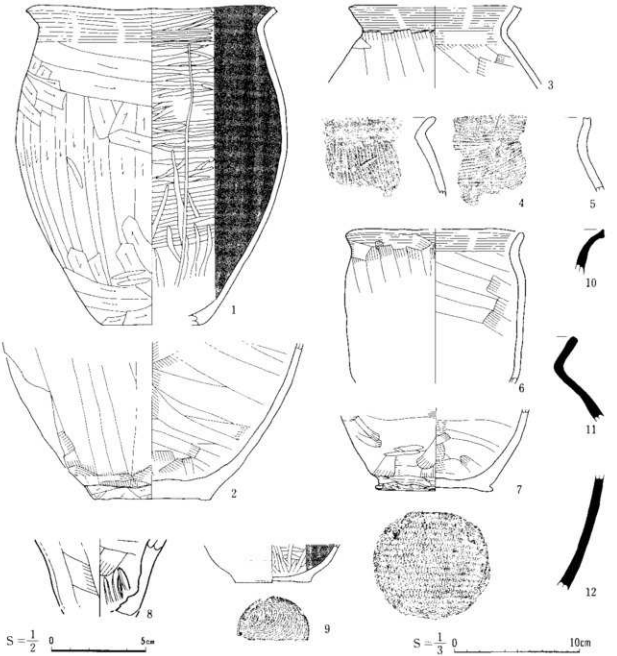
第15号住居跡

第1層　黒色土　10YR2/1
第2層　黒褐色土　10YR2/3
ローム粒・焼土粒少量。
第3層　黒褐色土　10YR2/2
白頭山火山灰含む。
第4層　暗褐色土　10YR3/3
ローム粒、焼土粒、炭化物粒微量。
第5層　黒褐色土　10YR2/2
白頭山火山灰のブロック含む。ローム粒、焼土粒微量。
第6層　暗褐色土　10YR3/3
ローム粒、焼けた粘土塊、炭化物少量。上部に白頭山火山灰混入。
第7層　褐色土　10YR4/6
ローム質土と第6層との混合土。
第8層　黄褐色土　10YR5/6
第9層　黄褐色土　10YR5/8
第10層　褐色土　10YR4/4
黄褐色土（9層）多量。

第15号住居跡カマド

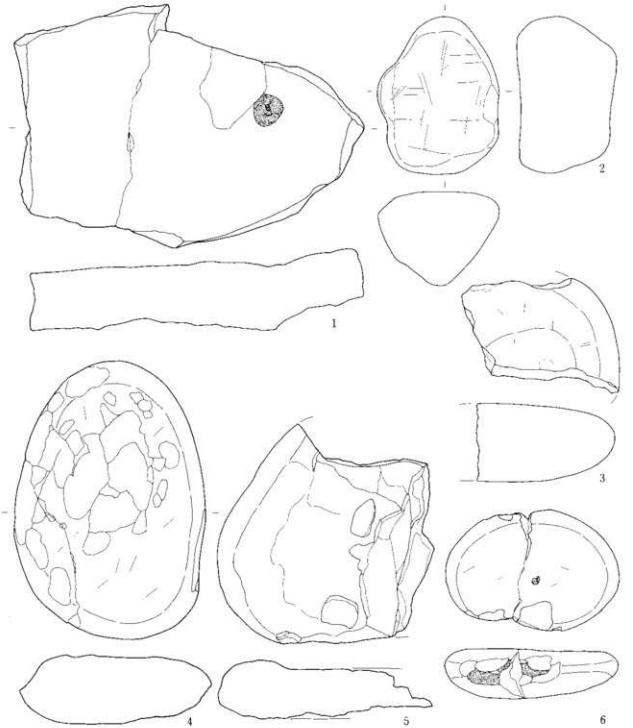
第1層　褐色土　7.5YR4/6　粘土質。焼けている。
第2層　暗褐色土　(10YR3/4)と赤褐色土(5YR4/6)との混合土天井部崩落土か。
第3層　褐色土　10YR4/4　ローム質。
第4層　褐色土　10YR4/6　黒色土微量。天井部崩落土。
第5層　明黄褐色土　2.5YR7/6　白頭山火山灰。ローム粒微量。
第6層　褐色土　10YR4/4　黒～暗褐色土混入。
第7層　黄褐色土　10YR5/6
第8層　褐色土　10YR4/4　ローム粒少量。
第9層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒多量。
第10層　黄褐色土　10YR5/6　ローム粒及びL，B小ブロックの集合。

図62　第15号住居跡・カマド



番号	器種	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	分類	備考	実測番号
1	土師器	壺	－	床面	20.0		25.4	ケズリ→ヨコナデ	ミガキ	ケズリ	粗砂多・雲	AII	内面黒色処理	3
2	〃	甕	－	床面	－	8.8		ヘラナデ→ケズリ	ハラナデ	形成	小礫多量	AVb		2
3	〃	甕	－	床面	(22.6)	－	－	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		小礫少量	BII	底径CG DB遺下に乗る	5
4	〃	壺		覆土	－	－	－	ハケメ・ヨコナデ	ハケメ		粗砂少量	AIV		8
5	〃	壺	－	覆土			－	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ・ヨコナデ	－	粗砂多量	AIII		7
6	〃	甕	カマド	床面	14.1	－		ヨコナデ→ヘラナデ	ヘラナデ→ヨコナデ		粗砂多量	BIIa	外面刷毛	1
7	〃	壺	カマド	床面		9.2	－	ヘラナデ、ミガキ	ユビナデ	底代痕	小礫少量	AVa	カマド支脚	4
8	〃	ミニチュア	－	覆土	－	－	－	ナデ	ユビナデ		密			1-4
9	〃	坏	－	床面	－	(6.4)		ヨクロ	ミガキ	回転糸切	荒	AIe	内面黒色処理	6
10	須恵器	長頸壺		覆土	－	－	－	ロクロ	ロクロ		粗砂多・雲		比較的黄橙色	1-34
11	〃	壺	－	床面			－	ロクロ	ロクロ	－	細砂多量・雲		表面(断面)に赤い黄橙色(粘土分析No.2)	3-2
12	〃	甕	－	覆土	－	－		ケズリ	ナデ	－			16・17は同種と推定・胎土同	3-16

図63　第15号住居跡出土遺物―1



S＝$\frac{1}{3}$　0　10cm

番号	種類	出土地点・層	器種	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	遺物番号
1	石器	15住床直	台石類	C 1	安山岩	(12.6)	(19.8)	(5.0)	4059	S－3(小)＋4。被熱、板状。敲打痕（凹孔）。	132
2	〃	15住床直	磨石	A 3	安山岩	12.6	9.7	7.8	1027	S－2。起伏、平滑。	94
3	〃	15住床直	台石類	C 2	安山岩	12.7	9.1	6.2	1086	破片。被熱によるハジケ。両面平滑。	86
4	〃	15住床直	台石類	C 2	流紋岩	22.0	(15.2)	5.6	2841	S－8(小)＋床直S－2(大)。被熱、大ハジケ多数。両面とも平滑。	133
5	〃	15住床直	台石類	C 2	流紋岩	(17.4)	(17.1)	4.6	1747	S－6。被熱によるハジケ。	120
6	〃	15住床A	敲磨器	B	安山岩	13.8	9.6	3.7	625.9	S－5。側縁部に敲打痕。裏面に凹孔？。ややザラつく。	111

図64　第15号住居跡出土遺物―2

第16号住居跡（図66、写真11・25）

［位置］　G－49グリッドに位置している。住居跡本体の大部分は調査区域外にあり、一部しか調査出来なかった。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　平面形、規模ともに不明であるが、北壁は3.5mである。主軸方位はN－21°－Eである。

［壁・床面］　壁高は40cm前後で、床面は堅緻である。

［カマド］　北壁の東寄りのところに構築されており、半地下式の構造である。カマドは褐色から黄褐色の粘土で構築され、内壁の幅は50cm前後である。火床面は30×37cmの不整形を呈し、硬い酸化面を形成している。内側には、左側に偏った位置に土師器の甕を伏せて支脚としているが、本来は、支脚が２個設置されていた可能性も考えられる。煙道部は緩やかに立ち上がり、壁から50cm外方へ延びている。

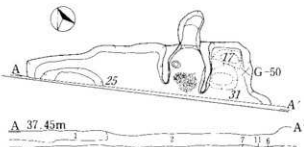
［壁溝］　検出されなかった。

［柱穴・ピット］　カマドの右袖と壁の間に２個、西壁近くに１個のピットを検出した。カマド右袖のピットは埋められていたものである。ともに深さ20cm前後である。西壁近くのピットは全体の形状・規模は不明であるが、深さ25cmである。なお、柱穴と思われるピットは検出されなかった。

［堆積土］　全体にローム粒や炭化物を多量に含んだ暗褐色土が主体であり、床面近くでは褐色土の堆積が多く見られる。東壁寄りでは、焼土の層も見られ、人為堆積の様相を呈している。

［出土遺物］　カマド近辺から少量の遺物が出土している。土師器の甕３点とミニチュア１点を図示した。

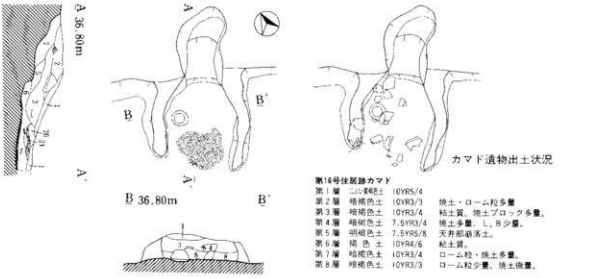
（畠山　昇）

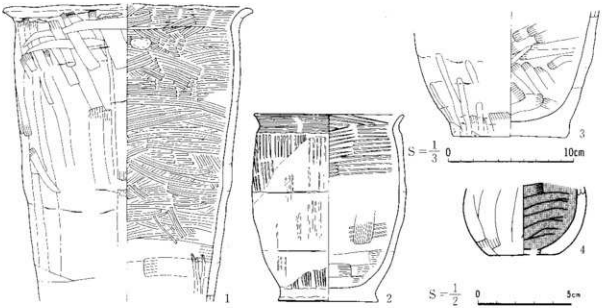


第16号住居跡

第1層	黒褐色土	10YR2/1	耕作土。
第2層	黒褐色土	10YR1.7/1	耕作土。
第3層	暗褐色土	7.5YR3/3	ローム粒・炭化物多量、焼土ブロック少量。
第4層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・L，B・炭化物・焼土多量。
第5層	暗褐色土	10YR3/4	炭化物多量、ローム粒少量、焼土微量。
第6層	黒褐色土	10YR2/2	焼土多量、ローム粒・炭化物粒少量。
第7層	暗赤褐色土	2.5YR3/3	焼土層。ローム粒多量。
第8層	にぶい黄色土	10YR4/3	しまり無い。
第9層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量。
第10層	褐 色 土	10YR4/6	炭化物多量、ローム粒、焼土微量。
第11層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・焼土少量。
第12層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量、焼土・炭化物微量。
第13層	褐 色 土	10YR4/4	炭化物微量。
第14層	明褐色土	7.5YR5/6	粘土質。
第15層	褐 色 土	7.5YR4/3	焼土・炭化物微量。
第16層	暗褐色土	7.5YR3/3	ローム粒少量。

図65　第16号住居跡





番号	種類	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	分類	備考	挿図番号
1	土師器	甕	カマド	ソデ	20.0	—	—	ヘラナデ	ヨコナデ・ハケメ	—	粗砂中量	A1	輪積痕明瞭	1
2	〃	甕		覆土	(11.4)	8.0	14.2	ヨコナデ、ハケメ	ハラメ→ヘラナデ	ナデ?	小礫中量	B1b	胎土に植物繊維含有	?
3	〃	甕	カマド			9.0	—	ケズリ→ナデ→ミガキ	ユビナデ	ナデ	小礫多量	AVb	カマド支脚	3
4	〃	ミニチュア	—	覆土	—	(1.8)	—	ヘラナデ	ヘラナデ	ケズリ	粗砂多量		内面黒色処理	1-11

図66　第16号住居跡カマド・出土遺物

第17号住居跡（図67～70、写真11・26）

［位置］　G－71グリッドに位置している。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　平面形はほぼ方形で、東壁1.95m、南壁2.25m、西壁2.10m、北壁2.18mで、床面積は3.78m²である。主軸方位はN－8°－Eである。本遺跡では最小の規模である。

［壁・床面］　壁高は30～50cmで、床面はほぼ平坦で、堅緻である。

［カマド］　カマドは北壁の東寄りに構築されている。カマド本体は褐色の粘土を用い、竪穴内から竪穴外へかかって構築されている。カマド内壁の幅は30cmである。火床面は床面とほぼ同レベルで、径30cmのほぼ円形の酸化面を形成している。煙道はトンネル状に徐々に低く掘り込まれているが、途中で途切れている。また、煙出し孔は造られていない。住居構築時には地下式の構造にする意図がうかがわれる。

［壁溝］　検出されなかった。

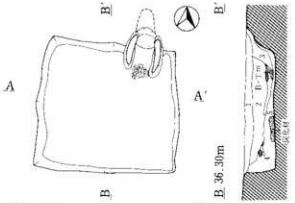
［柱ピット］　検出されなかった。

［堆積土］　5層に分層出来た。自然堆積である。上半には黒色土と黒褐色土の堆積が見られ、下半から床面に至るまでは褐色土の堆積が見られる。中位には白頭山火山灰の堆積が見られる。また、床面から床面直上には炭化材が検出されている。

［出土遺物］　床面及び床面直上とカマドから、土師器、石器、羽口、鉄滓が出土した。床面及び床面直上からは、土師器甕4点、石錐1点、砥石1点、台石1点が出土した。遺物は炭化材の直下からまとまって検出された。カマドからは、火床面の直上から土師器壷1点、堆積土から壷1点、羽口1点が検出された。図68-1は縦約半分に復元された内面黒色処理の壷であり、破片数にして38点であった。縦約4分の1が火床面直上から潰れた状態で出土した。隣接する第1号住居跡の堆積土とピット内から出土した破片9点、第17号住居跡の西側斜面の遺構外から出土した破片2点と接合した。

［小結］　本住居跡は、今回の調査の中でも最小の規模である。また、焼失家屋であり、板状の炭化材が検出された。カマドの構造は、半地下式ではあるものの、煙道が途中まで掘り込まれていたことから、構築時には地下式の構造にする意図があったことがうかがわれる。

（畠山　昇・赤羽　真由美）

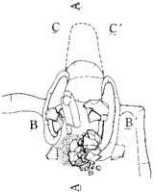


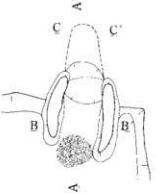
第17号住居跡炭化材出土状況

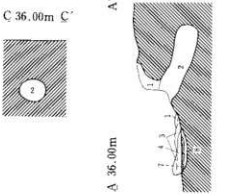
第17号住居跡

第1層	黒褐色土	10YR2/2	
第2層	黒　色　土	10YR2/1	
第3層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒微量。
第4層	黒褐色土	10YR2/2	白頭山火山灰多量、ローム粒・炭化物微量。
第5層	褐　色　土	10YR4/6	炭化物・焼土微量。

$S=\frac{1}{60}$　0　2m



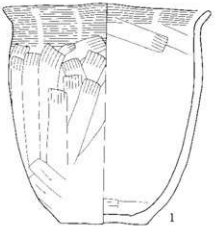


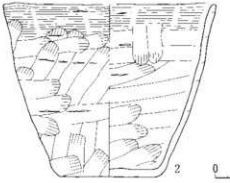


第17号住居跡カマド

第1層	暗褐色土	10YR3/3	焼土・炭化物粒少量、ローム粒微量。
第2層	褐　色　土	10YR4/4	焼土微量。
第3層	黒褐色土	10YR2/3	焼土・炭化物粒少量。
第4層	暗褐色土	10YR3/4	焼土多量、炭化物粒少量。
第5層	褐　色　土	10YR4/6	焼土・炭化物粒微量。外側焼けている。
第6層	暗褐色土	10YR3/4	
第7層	暗赤褐色土	10YR3/6	炭化物粒微量。上部火床面。
第8層	褐　色　土	10YR4/4	焼土少量、炭化物粒微量。

$S=\frac{1}{30}$　0　1m

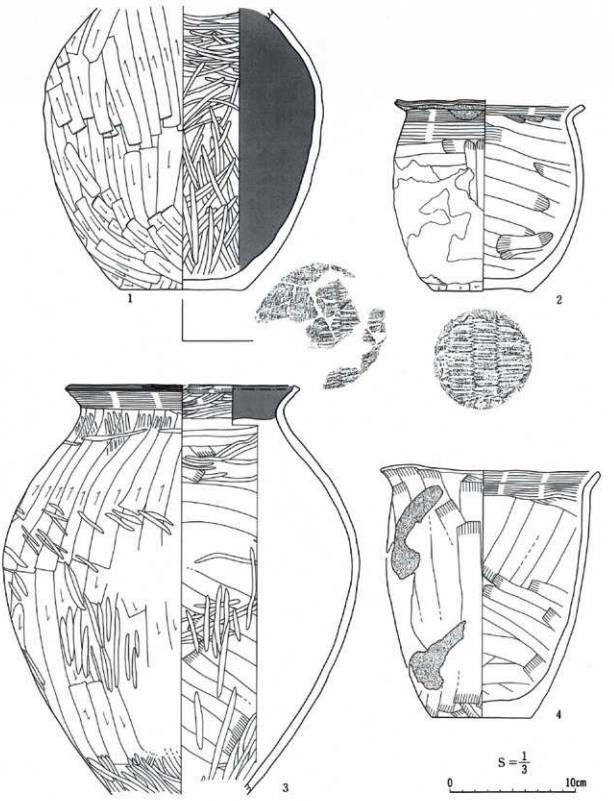




$S=\frac{1}{3}$　0　10cm

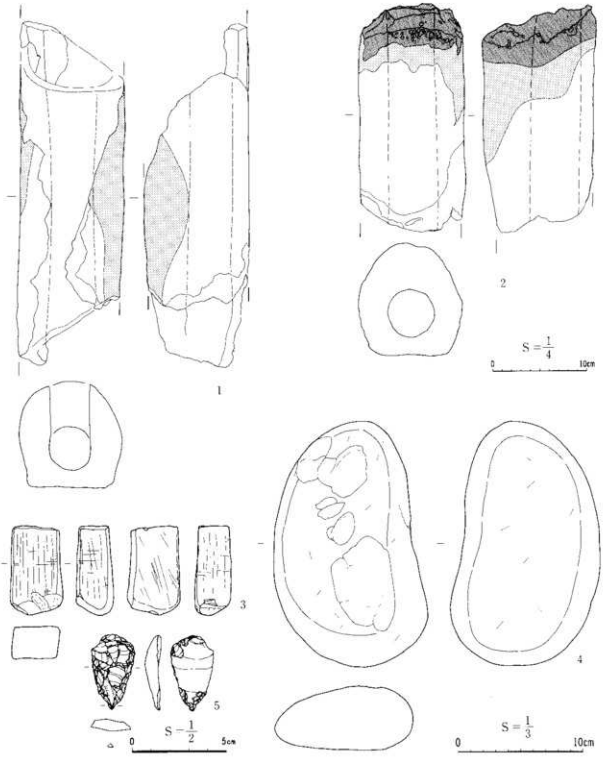
番号	種類	器種	出土位置	横径	口径	底径	高高	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	分類	備考	掲載ページ
1	土師器	壺		床面	15.3	6.8	17.4	ヨコナデ・ヘラケズーケズリ	ヘラナデ	無底	小礫中量	B1a	1は7層上層口 1は生活面と接合	6
2	〃	鉢	－	5層	(17.4)	7.8	15.7	ヨコナデ→ユビナデ	ヨコナデ、ユビナデ　ナデ		粗砂中量		9はカマド・覆土と接合	2

図67　第17号住居跡・カマド・炭化材・出土遺物－1



番号	種類	形態	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	胎土調整	胎土	分類	備考	挿図番号
1	土師器	壺	カマド	床直		10.0	—	ケズリ	ミガキ	磨滅	粗砂多量		内面黒化処理	5
2	〃	甕	—	5層	15.0	8.0	15.0	ナデ、ケズリ	ユビナデ	磨滅	小礫多量	IIIB b	外面に火付着、外面煤黒こげ	3
3	〃	甕	カマド	床直	18.6	—	—	横位タタキ(1)→ケズリ→ミガキ	ヘラナデ・ミガキ	—	角礫砂粒・礫		1住9類、1住P14、12住カマドと接合	1
4	〃	甕	—	床直	18.6	7.8	19.8	ヘラナデ	ヘラナデ・ヨコナデ	ナデ?	小礫多量	II Ia	外面に火付着、外面煤黒こげ	4

図68　第17号住居跡出土遺物―2



番号	種類	出土位置	層位	長さ(cm)	外径(cm)	内径(cm)	重量(g)	備考	実測番号
1	羽口	17住カマド	覆土	36.0	11.0	4.4	2961		19
2	〃	17住	5層	24.2	11.0	5.1	2236.6		4

番号	種類	出土地点・層	器種	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	実測番号
3	石器	17住床直	砥石	A 1	砂　岩	(7.0)	4.2	2.2	123.7	S－1。欠損。	68
4	〃	17住5層	台石類	C 2	安 山 岩	19.4	12.0	5.3	1812.4	S－3。被熱による火ハジケ。表面剥ろか（とくに平坦面）。	76
5	〃	17住床直	石鏃		珪質頁岩	4.0	2.2	0.7	6.8	S－2。	17

図69　第17号住居跡出土遺物－3

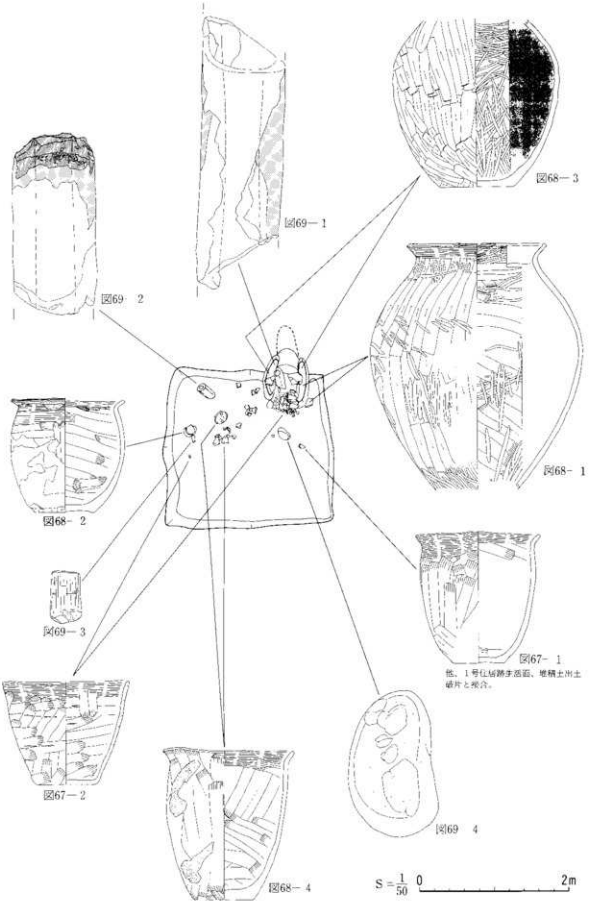


図70　第17号住居跡遺物出土状況

第18号住居跡（図71、写真12）

［位置］　G－67グリッドに位置している。煙道部のみの検出で、住居跡本体は調査区域外にある。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　平面形、規模ともに不明である。主軸方位はN－100°－E前後である。

［壁・床面］　調査出来なかった。

［カマド］　カマドは東壁側に構築されているものと思われる。煙道部のみの検出で、地下式の構造である。煙出し孔は38×42cmの不整な楕円形で、内壁には5cmの厚さの粘土が貼られている（焼土化している）。検出面からの深さは70cmである。煙道は幅40cm、高さ40～45cmの断面楕円形で、トンネル状に掘り込まれている。

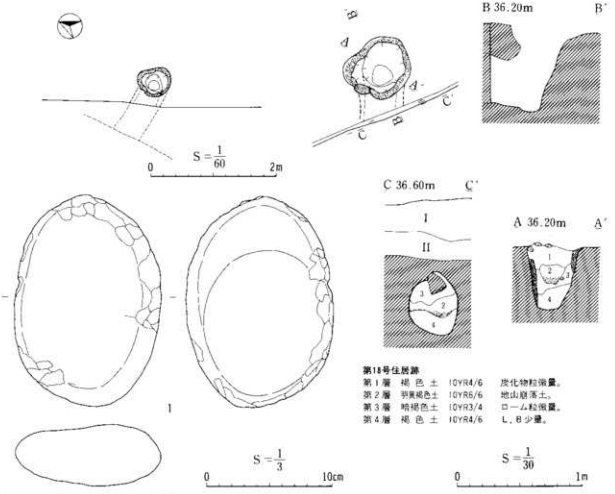
［壁溝］　調査出来なかった。

［柱穴・ピット］　調査出来なかった。

［堆積土］　調査できなかった。

［出土遺物］　土師器甕の細片数片と台石とみられるもの？が出土したのみである。

（畠山　昇）



番号	種類	出土地点	器種	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	実測図
1	石器	18号煙出孔	台石類	C 2	安山岩	(16.7)	(11.7)	4.8	1197	被熱。とくに安山岩からL面を側に著しい。全体にザラつく。	96

図71　第18号住居跡・カマド・出土遺物

第101号住居跡（図72・73、写真12・26）

［位置］　A－45グリッドに位置している。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　平面形は方形で、東壁4.45m、南壁4.42mで、推定床面積は19.4m²である。主軸方位はN－106°－Eである。

［壁・床面］　大半を削平されて床面のみの確認である。床面のうち北西部は検出出来なかった。全般に、床面は平坦で、堅緻である。

［カマド］　東壁に新旧二つのカマドを検出した。残存状況は良くない。

新カマドは北寄りに構築されているが、煙道部は確認できなかった。火床面は60×100cmの楕円形状を呈している。

旧カマドは南寄りに検出され、壁辺のおよそ三分の一の所に構築されている。火床面は45×52cmの不整円形を呈している。煙道部は黄褐色土の粘土で塞がれていた。煙道部は壁から1m外方へ延びている。表土から深さ1m近く削平された状況での確認であることから、新カマドは半地下式、旧カマドは地下式の構造であった可能性が考えられる。

［壁溝］　幅10～15cm、深さ5cmほどの壁溝を検出した。

［柱穴・ピット］　4個のピットを検出した。このうち、柱穴と思われるのは、壁のコーナーに検出した3個のピットである。もう1個は削平のため検出できなかったが、四隅に柱を持つタイプと思われる。

［堆積土］　南側の部分で、10cmほどの厚さの堆積土を確認しただけである。2層に分層できた。何れも黄褐色土であるが、床面を覆っている土はやや暗い色調で、ローム粒やロームの小ブロックを多量に含んでいる。また、第1層の上部から、白頭山火山灰の堆積が小ブロック状に検出されている。

［出土遺物］　床面から少量の土師器と炭化材が出土している。確認面が既に床面直上に近い状況であったため、遺物の残存状態が悪い。土師器は、カマド近辺からのものが多い。住居の床面及びカマドの床面直上から土師器甕片約70点、坏片1点、須恵器大甕片1点、旧カマド煙道部から土師器甕片約30点が出土している。堆積土及び確認面からは、土師器甕片約110点、坏片2点、須恵器大甕片2点、鉄滓4点が出土した。土師器の胎土には小礫が多量に含まれている。図73-11は須恵器大甕の胴部である。色調は鈍い黄橙色を呈する。土師器甕と比べて胎土は緻密であるが、酸化焔焼成のため還元焔焼成の須恵器ほど硬質ではなく、もろい。炭化材は、板状の小さなものが多い。

（畠山　昇・赤羽 真由美）

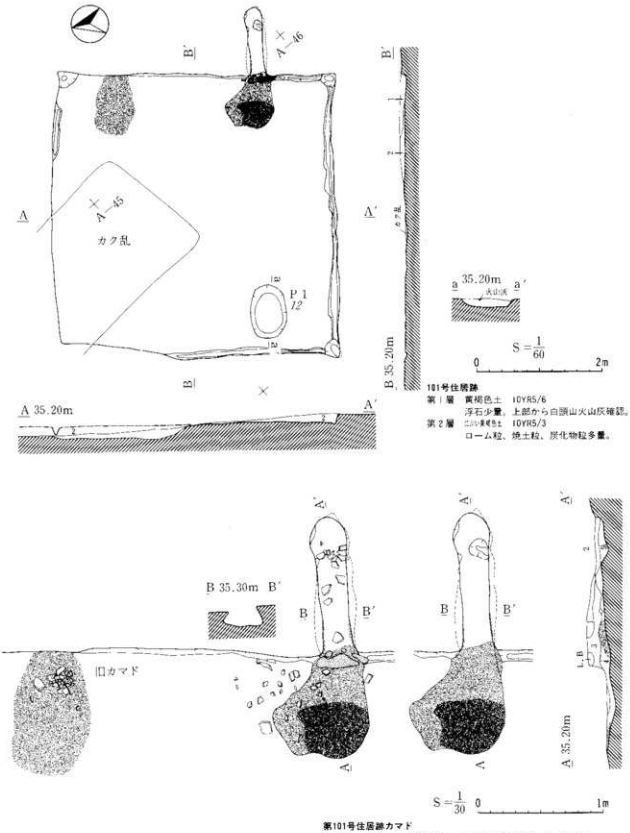
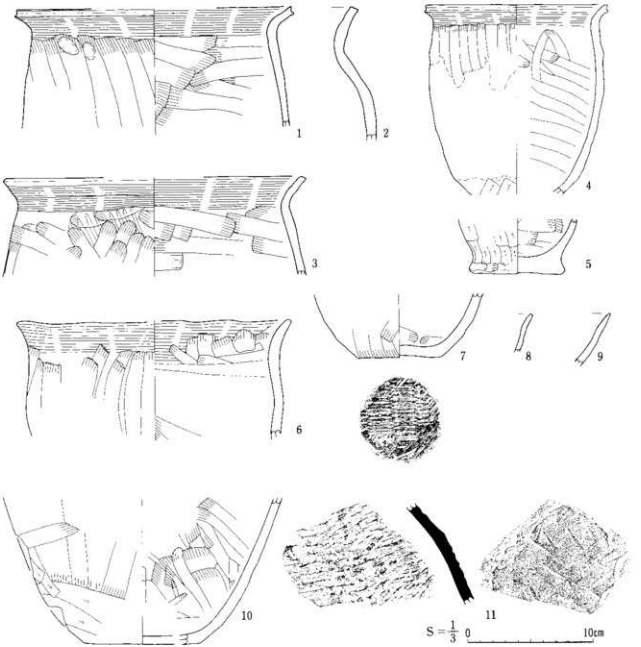


図72　第101号住居跡・カマド



番号	種類	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底部調整	胎土	分類	備考	整理番号
1	土師器	壺	－	床面	22.0	－	－	ヨコナデ→ヘラナデ	ヘラナデ→ヨコナデ	－	粗砂中量	AIII		4
2	〃	壺	カが伸長	覆土	－	－	－	ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		小礫中量	BII		6
3	〃	壺	－	1層	23.6			ヨコナデ タテキメ→ユビナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	粗砂中量	AIII		7
4	〃	壺	カマド	床面	14.4	－	－	ヨコナデ→ヘラナデ ケズリ	ヘラナデ		小礫多量	BIIIb	赤出が刺繍している	2
5	〃	壺	－	床面	－	7.6	－	ケズリ→ユビナデ	ヘラナデ	－	小礫多量	BVb		3
6	〃	甕		床面				ヨコナデ →ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラナデ	－	小礫中量	AIV		5
7	〃	壺	－	床面	－	6.8	－	ヘラナデ	ユビナデ	糸痕	粗砂中量	BIIIb		10
8	〃	坏		床面	12～13			ロクロ	ロクロ	－	密	AId		9
9	〃	坏	脚カマド	床面	－	－	－	ヘラナデ	ナデ	－	粗砂少量	HI		8
10	〃	壺	－	床面	－	－	－	ヘラナデ→ケズリ	ヘラナデ	ケズリ	小礫多量	AVb		1
11	須恵器	壺	脚カマド	床面	－			タタキ（格子）	当て具痕		粗砂少量		灰白～黒褐色 ニ重焼に伴う	3.54

図73　第101号住居跡出土遺物

２．　掘立柱建物跡

今回の調査で検出した掘立柱建物跡は８棟である。また、これ以外にも多数の柱穴状のピットを検出しており（特にＤ－63･64付近に多い）、掘立柱建物跡があった可能性が強い。

第１号掘立柱建物跡（図74、写真12）

［位置］　Ｅ・Ｆ－37・38グリッドに位置する。

［重複］　なし。

［規模・柱間寸法］　西側の一部が調査区域外にあるため確認できなかったが、東西２間、南北２間の建物と思われる。規模は北側柱列で3.84m、東側柱列で5.28mで、長軸方向はＮ－73°－Ｗである。各柱列間の寸法は、北側柱列で西から2.02・1.82m、東側柱列が北から1.58・1.55m、南側柱列は東から1.90・（不明）mである。

柱痕は確認できなかったが、柱穴の掘り方の平面形は楕円形あるいは隅丸方形を基調としている。検出面からの深さはＰ６は35cmと深いが、外の柱穴は７～15cmとやや浅い。

［出土遺物］　なし。

第２号掘立柱建物跡（図74、写真12）

［位置］　Ｃ～Ｅ－55・56グリッドに位置する。

［重複］　第４号土坑と重複し、これより古い。

［規模・柱間寸法］　東西２間、南北３間の建物である。規模は北側柱列で2.80m、東側柱列で4.12m、南側柱列が2.85m、東側柱列が4.28mである。また、長軸方向はＮ－24°－Ｅである。各柱列間の寸法は北側柱列が西から1.46･1.46m、東側柱列が北から1.40･1.32･1.40m、南側柱列が東から1.40･1.45m、西側柱列が南から1.38・1.45・1.45mを測る。

柱痕は確認出来なかったが、掘り方の平面形は楕円形のものが多い。検出面からの深さは10～15cmと浅い。

［出土遺物］　なし。

第３号掘立柱建物跡（図75、写真12）

［位置］　Ｄ・Ｅ－57・58グリッドに位置する。

［重複］　なし。

［規模・柱間寸法］　東西２間、南北２間の総柱の建物である。規模は北側柱列で2.74m、東側柱列で2.71m、南側柱列が2.93m、西側柱列が2.97mである。また、長軸方向はＮ－19°－Ｅである。各柱列間の寸法は北側柱列が西から1.53･1.21m、東側柱列が北から1.28･1.43m、南側柱列が東から1.38･1.55m、西側柱列が南から1.50・1.47mを測る。

柱痕は確認出来なかったが、掘り方の平面形は隅丸方形あるいは楕円形を基調としている。Ｐ９・Ｐ６は掘り方底面が小穴状に一段低くくぼんでいる。また、Ｐ３はＰ２を壊してつくられており、近・現代のものの可能性がある。検出面からの深さは20～30cm前後のものが多いが、45cmのピット（Ｐ10）

もある。また、掘り方の底面直上に数cmのロームが貼られている。この部分は非常に硬く、堅緻である。

［出土遺物］　なし。

第４号掘立柱建物跡（図75）

［位置］　Ｅ・Ｆ－50・51グリッドに位置する。

［重複］　第４号住居跡と重複し、これより古い。

［規模・柱間寸法］　東西２間、南北２間の総柱の建物である。

規模は、北側柱列が3.21m、東側柱列が3.07m、南側柱列が3.13m、西側柱列が3.20mである。長軸方向はＮ－35°－Ｅである。各柱列間の寸法は、北側柱列が西から1.54・1.67m、東側柱列が北から1.47・1.60m、南側柱列が東から1.55・1.58m、西側柱列が1.60・1.60mである。

柱穴の掘り方は楕円形のものが多い。検出面からの深さは15～30cm前後のものが多いが、45cmを測るものもある（Ｐ７）。

［出土遺物］　なし。

第５号掘立柱建物跡（図76）

［位置］　Ｅ・Ｆ－58・59グリッドに位置する。

［重複］　第６号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。しかし、西南端のピット（Ｐ１）を第６号掘立柱建物跡と共有していることから、さほどの時間差がないものと考えられる。

［規模・柱間寸法］　東西１間、南北２間の建物跡であるが、東・西柱列の中間に柱穴は検出されなかった。規模は北側柱列が3.26m、東側柱列が3.33m、南側柱列が3.14m、西側柱列が3.32mのほぼ方形である。また、東側柱列の寸法は北から1.65・1.68m、西側柱列の寸法は南から1.72m・1.60mである。長軸方向は、Ｎ－81°－Ｅである。

［柱穴］　柱穴の掘り方の平面形は円形及び楕円形であり、掘り方底面が小穴状にくぼんでいるものがある。検出面からの深さは、東側柱列は15～20cm、西側柱列は30～40cmである。

［出土遺物］　なし。

第６号掘立柱建物跡（図76）

［位置］　Ｅ・Ｆ－58・59グリッドに位置する。

［重複］　第５号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。また、北東端のピットが重複していること（Ｐ９・10）と、Ｐ７・８・１１の壁上半部が段状になっていて、掘り直されたように見られたことから、同位置での立て替えが行われたものと判断した。古いものを６ｂ号、新しい方を６ａ号とする。

［規模・柱間寸法］　６ａ号、６ｂ号ともに東西１間、南北２間の建物跡であるが、第５号掘立柱建物跡と同様に、東・西柱列の中間に柱穴は見られない。６ａ号の規模は北側柱列が3.08m、東側柱列が

3.34m、南側柱列が3.24m、西側柱列が3.50mである。また、東側柱列の寸法は北から1.73・1.61m、

西側柱列の寸法は南から1.85m・1.65mである。これより古い6b号の規模は、北東端のピットが20cmほど内側にあるだけで（東側柱列の北側が1.53mとやや狭い）、ほとんど変化がない。長軸方向は、N－1°－Eである。

［柱穴］　柱穴の掘り形の平面形は楕円形が基調であり、検出面からの深さは30～40cmである。

［出土遺物］　なし。

第7号掘立柱建物跡（図77）

［位置］　C・D－52・53グリッドに位置し、第4号住居跡のカマドが構築されている東側に隣接して検出した。

［重複］　第3号住居跡と重複し、これより古い可能性がある。また、周辺から多数のピットを検出したが、これとの関係は不明である。

［規模・柱間寸法］　北側が第3号住居跡及び調査区外にあるため明確に出来なかったが、東西2間、南北2間の総柱の建物跡と思われる。規模は北側柱列が4.7m（推定）、東側柱列が4.4m（推定）、南側柱列が4.73m、西側柱列が4.4m（推定）である。各柱列の寸法は、東側柱列の南側は2.25m、南側柱列は東から2.18m・2.55m、西側柱列の南側2.35mである。

［柱穴］　柱穴の掘り形の平面形は隅丸方形と楕円形である。検出面からの深さは20～45cmである。

［出土遺物］　なし。

［年代］　平安時代と思われる。

第8号掘立柱建物跡（図77）

［位置］　F－59・60グリッドに位置する。北側のみの確認で、南側は調査区域外へ延びている。

［重複］　なし。

［規模・柱間寸法］　南側が調査出来なかったが、東西2間、南北2間の建物跡と思われる。北側柱列の柱間寸法は1.75m、東側柱列が北から1.66・1.66mである。

［柱穴］　柱穴の掘り形の平面形は楕円形であり、検出面からの深さは20cm前後である。

［出土遺物］　なし。

［年代］　平安時代と思われる。　（畠山　昇）

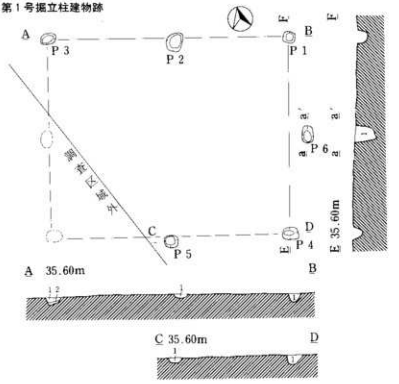
（小桔）

今回の調査で検出した8軒の掘立柱建物跡は、竪穴住居跡の向きと方向が一致している。これらの建物跡の年代は、建物跡の内側やピット内から出土した遺物がないため断定はできないが、平安時代の可能性が強い。特に、第2号住居跡の周囲は住居跡が少なく、第2号、3号、5号、6号、8号掘立柱建物跡とD－63・64付近の柱穴群が第2号住居跡を囲うように分布している。このため、掘立柱建物が竪穴住居と同じ時期に営まれた可能性も少なくない。

第7号掘立柱建物跡については、白頭山火山灰降下前後の北日本において、竪穴住居跡のカマド側に掘立柱建物跡が付随する構造の建物が存在する事が最近の調査で分かってきている。第7号掘立柱建物跡の例は、これと同様に第4号住居跡に伴う構造の建物である可能性がある。

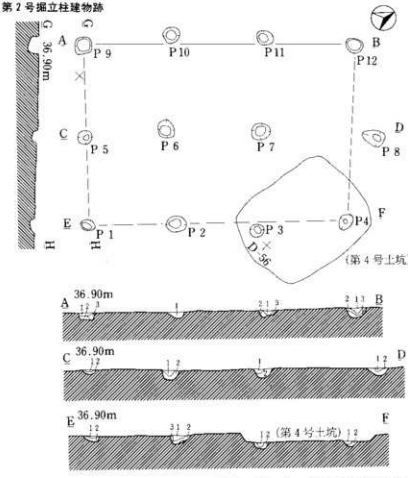
（赤羽　真由美）

第1号掘立柱建物跡



第1号掘立柱建物跡
ピット1
第1層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒微量。
ピット2
第1層　褐色土　10YR4/4
ピット3
第1層　褐色土　10YR4/4
第2層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒微量。
ピット4
第1層　褐色土　10YR4/4
ピット5　暗褐色土　10YR3/4
ピット6
第1層　暗褐色土　10YR3/4

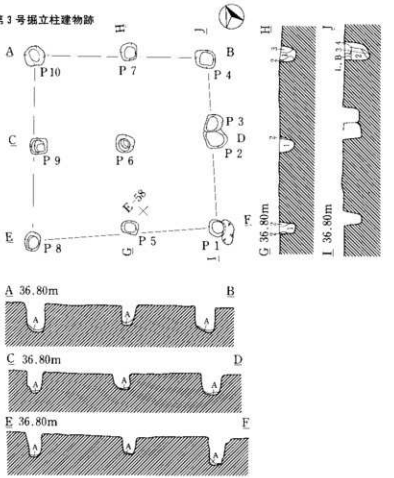
第2号掘立柱建物跡



第2号掘立柱建物跡
ピット1
第1層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒少量。
第2層　褐色土　10YR4/4　ローム質。
ピット2
第1層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒微量。
第2層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒少量。
第3層　黒褐色土　10YR2/3
ピット3
第1層　暗褐色土　10YR3/3
第2層　黒褐色土　10YR2/4　L、B少量。
ピット4
第1層　褐色土　10YR4/4　ローム粒少量。
第2層　褐色土　10YR4/6　ローム粒少量。
ピット5
第1層　にぶい黄褐色土　10YR4/3
第2層　褐色土　10YR4/6　火山灰？微量。
ピット6
第1層　暗褐色土　10YR3/3　L、B少量。
第2層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒中量。
ピット7
第1層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒微量。
第2層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒微量。
ピット8
第1層　褐色土　10YR4/4
第2層　褐色土　10YR4/6　L、B少量。
ピット9
第1層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒微量。
第2層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒少量。
第3層　暗褐色土　10YR3/3　L、B微量。
ピット10
第1層　黒褐色土　10YR2/3　炭化物微量。
第2層　褐色土　10YR4/6
第3層　褐色土　10YR4/4　炭化物微量。
ピット11
第1層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒微量。
ピット12
第1層　褐色土　10YR4/4　L、B、焼土微量。
第2層　褐色土　10YR4/6　ローム質。
第3層　褐色土　10YR4/4　ローム質。

S＝1／60
0　2m

図74　第1号・第2号掘立柱建物跡



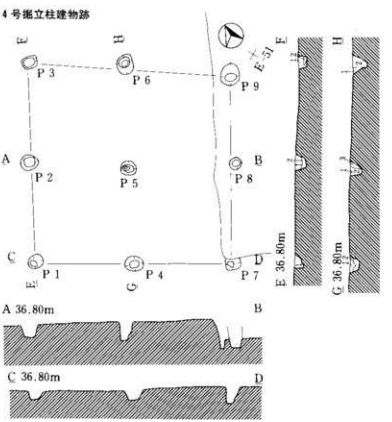
第3号掘立柱建物跡

ピット4
第1層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒少量。
第2層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒少量。
第3層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒多量。
第4層　褐色土　10YR4/4　ローム粒多量。

ピット5
第1層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒少量。
第2層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒少量。

ピット6
第1層　暗褐色土　10YR3/3
第2層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒多量。

ピット7
第1層　暗褐色土　10YR3/3
第2層　暗褐色土　10YR3/4　炭化物少量。
第3層　褐色土　10YR4/4　L、B少量。
第4層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒少量。
A層　褐色土　10YR4/6　しまり強い。



第4号掘立柱建物跡

ピット1
第1層　暗褐色土　10YR3/4

ピット2
第1層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒微量。

ピット3
第1層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒微量。
第2層　暗褐色土　10YR3/4　L、B、炭化物微量。
第3層　褐色土　10YR4/6　炭化物少量。

ピット4
第1層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒微量。
第2層　暗褐色土　10YR3/4　褐色土少量。

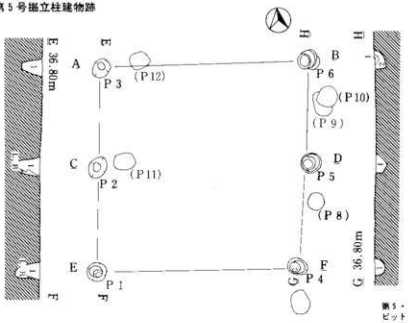
ピット5
第1層　暗褐色土　10YR3/4
第2層　黒色土　10YR2/1　ローム粒微量。
第3層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒微量。

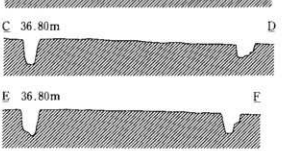
ピット6
第1層　暗褐色土　10YR3/4　L、B、ローム粒微量。
第2層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒微量。

S＝1／60
0　2m

図75　第3号・第4号掘立柱建物跡

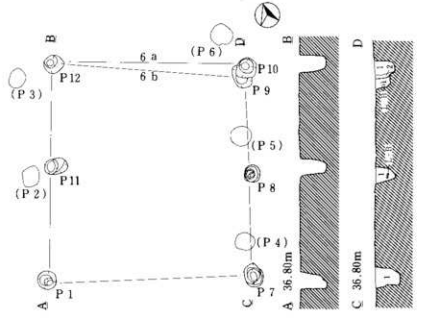
第５号掘立柱建物跡





第５・６号掘立柱建物跡
ピット１
第１層　黒褐色土　10YR2/3　L，B，ローム粒微量。
ピット２
第１層　黒褐色土　10YR2/3　L，B，ローム粒微量。
ピット３
第１層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒微量。
ピット４
第１層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量。
ピット５
第１層　黒褐色土　10YR2/3　L，B，ローム粒微量。
ピット６
第１層　暗褐色土　10YR3/4　ローム質。
第２層　黒褐色土　10YR2/3　L，B，ローム粒微量。
ピット７
第１層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量。
ピット８
第１層　暗褐色土　10YR3/4　L，B，ローム粒少量。
ピット９
第１層　暗褐色土　10YR3/4　L，B，ローム粒中量。
ピット10
第１層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒微量。
第２層　褐色土　10YR4/6　L，B主体。

第６ａ号・６ｂ号掘立柱建物跡



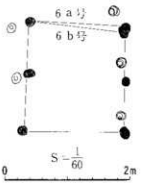
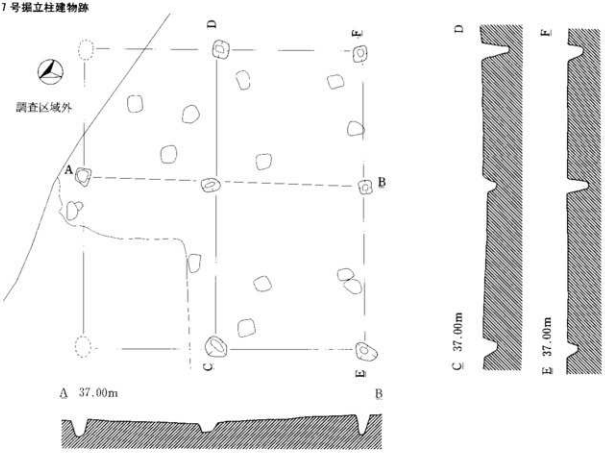
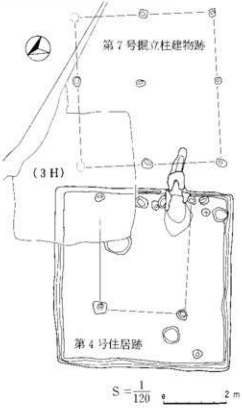


図76　第５号・６ａ号・６ｂ号掘立柱建物跡

第７号掘立柱建物跡



第７号掘立柱建物跡と第４号住居跡



第８号掘立柱建物跡

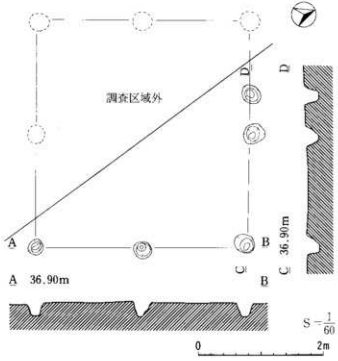


図77　第７号・８号掘立柱建物跡

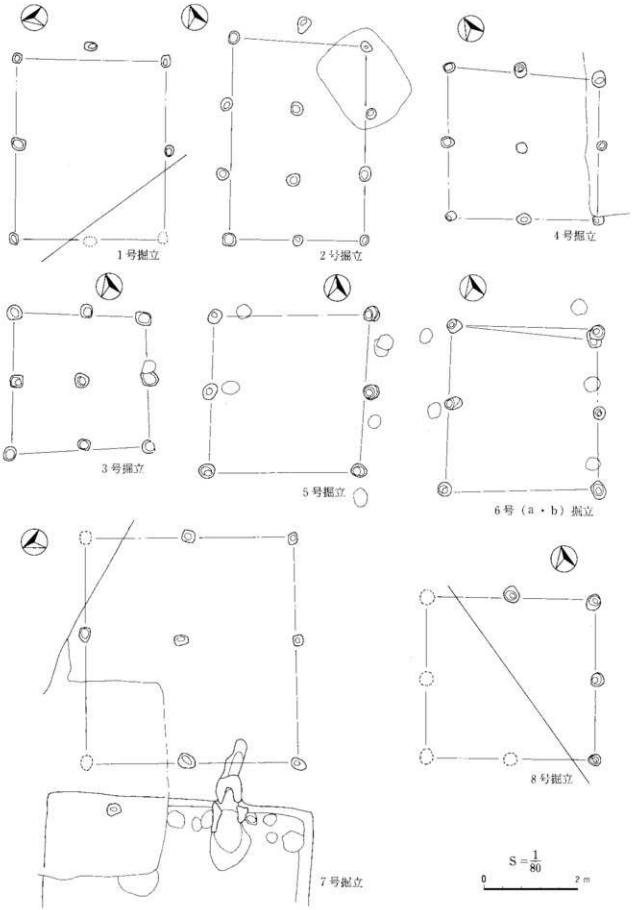


図78　掘立柱建物跡集成図

３　土　坑・工房跡

第１号土坑（図79、写真13）

［位置］　Ｅ・Ｆ－11グリッドに位置する。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　短軸171cm、長軸215cmの隅丸長方形で、深さ26cmである。

［壁・底面］　壁は垂直に近く立ち上がる。底面はほぼ平坦で、全体に焼土の散らばりが見られ、壁、床面の一部は焼けている部分が認められる。

［堆積土］　確認面上に白頭山火山灰の堆積がドーナツ状に見られた。堆積土は６層に分層でき、白頭山火山灰は、第４層に相当する。第６層は炭化物を多量に含むものである。

［出土遺物］　なし。

［年代］　白頭山火山灰の堆積から、平安時代のもである。

第２号土坑（図79、写真13）

［位置］　Ｅ－24グリッドに位置する。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　短軸83～100cm、長軸170cmの長方形状で、深さ35cmほどである。

［壁・底面］　壁は急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］　人為堆積で、全体にローム粒やL.Bを含む黒褐色土の堆積が見られた。

［出土遺物］　なし。

［年代］　不明。

第３号土坑（図79、写真13）

［位置］　Ｄ－24グリッドに位置する。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　短軸100～125cm、長軸125cmほどで、台形状を呈する。深さ12～20cmほどである。

［壁・底面］　壁は垂直に近く立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］　人為堆積で１層しか確認できなかった。全体にローム粒やL.Bを含む黒褐色土の堆積が見られた。

［出土遺物］　なし。

［年代］　不明。

第４号土坑（図79、写真13・26）

［位置］　Ｃ・Ｄ－55・56グリッドに位置する。

［重複］　第２号掘立柱建物跡と重複し、これより新しい。

［平面形・規模］　短軸116cm、長軸192cmの隅丸長方形で、深さ15～20cmである。

［壁・底面］　北壁は緩やかに立ち上がるが、他の壁は急に立ち上がる。底面は平坦である。

［堆積土］　確認面上に焼土の広がりと白頭山火山灰がブロック状に見られた。6層に分層できたが、全体にローム粒やL.Bが多く含まれ、人為堆積の様相を呈している。

［出土遺物］　堆積土より、土師器甕2点、壷？1点、坏1点、ミニチュア2点、フレイク1点、が出土した。また、本土坑より出土した土師器甕・壷・鍋？の破片数点が第15号土坑から出土した破片に接合した。

［年代］　平安時代と思われる。

第5号土坑（図79、写真14）

［位置］　E－52・53グリッドに位置する。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　短軸128cm、長軸173cmの楕円形で、深さ20cmほどである。

［壁・底面］　壁は緩やかに立ち上がり、底面は多少の凹凸の見られるものの、ほぼ平坦である。

［堆積土］　1層のみの堆積で、L.Bを含む黒褐色土の堆積が見られた。

［出土遺物］　堆積土より、須恵器の長頸壷片1点、坏片3点、フレイク1点が出土した。

［年代］　不明。

第6号土坑（図80、写真14）

［位置］　C－54・55グリッドに位置する。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　短軸140cm、長軸145cmのほぼ方形で、深さ10cmほどである。

［壁・底面］　壁は急に立ち上がり、底面には凹凸が認められる。

［堆積土］　2層に分層でき、人為堆積である。底面直上に炭化物が見られた（第2層）。

［出土遺物］　なし。

［年代］　平安時代と思われる。

第8号土坑（図80、写真14）

［位置］　F－55グリッドに位置する。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　直径70cm程の円形で、深さ12cmである。

［壁・底面］　壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸が見られる。

［堆積土］　4層に分層されたが、暗褐色土が主体であり、少量の焼土の混入が見られた。

［出土遺物］　堆積土より、須恵器壷片1点、鉄滓1点が出土した。

［年代］　不明。

第9号土坑（図80、写真14）

［位置］　E－55グリッドに位置する。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　短軸78cm、長軸108cm、深さ7cmほどの長方形である。
［壁・底面］　壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸が見られる。
［堆積土］　１層のみの確認で、ローム粒を含む暗褐色土の堆積が認められた。
［出土遺物］　堆積土より、土師器の支脚底部片１点とミニチュア１点が出土した。
［年代］　不明。平安時代か。

第10号土坑（図80、写真15）
［位置］　F－63グリッドに位置する。
［重複］　第７号住居跡と重複し、これより新しい。
［平面形・規模］　調査区域外に一部が延びているため完掘出来なかったため、全体の規模は不明である。短軸が127cmの長方形を呈するものと思われる。深さ37cmである。
［壁・底面］　壁は急に立ち上がり、底面は平坦である。
［堆積土］　９層に分層した。第２層は白頭山火山灰、第６層は灰の堆積層である。第６層より下位には焼土粒や炭化物粒が見られている。
［出土遺物］　堆積土より、土師器甕片約20点、須恵器壺片１点、鉄滓１点が出土した。
［年代］　白頭山火山灰の降下以前に構築され、廃棄されている。平安時代。

第11号土坑（図80、写真15）
［位置］　D・E－50グリッドに位置する。
［重複］　なし。
［平面形・規模］　短軸198cm、長軸236cm、深さ20cmほどの長方形である。南側が7cmほどやや高くなっている。
［壁・底面］　南壁は緩やかに立ち上がるほかは、急な立ち上がりである。底面はほぼ平坦であり、南側がテラス上にやや高い。コーナーの辺りが焼けており、30×40cmの楕円形状の酸化面が見られた。また、北側に２個の小ピットを検出したが、このうち壁際のより小さいピット（深さ40cm）は本土坑に伴うものと考えられるが、やや内側に検出した方形状のピットは本土坑より古い可能性がある。
［堆積土］　９層に分層出来たが、下部にローム粒やローム・ブロックが多量に堆積している。
［出土遺物］堆積土より、土師器甕片16点が出土している。
［年代］　平安時代と思われる。

第12号土坑（図80、写真15）
［位置］　D・E－64グリッドに位置する。
［重複］
［平面形・規模］　短軸154cm、長軸170cmの楕円形で、深さ42cmである。
［壁・底面］　壁はやや急に立ち上がり、底面には凹凸が見られる。北側壁に深さ30cmのピットが検出された。
［堆積土］　２層に分層したが、黒褐色土で埋められた状況を示している。

［出土遺物］　堆積土より、土師器甕片約20点、須恵器片２点、フレイク１点、羽口片１点、鉄滓３点が出土した。図82-11はＣ－64･65グリッドに位置する風倒木痕から出土した破片と接合したものである。鉄滓３点のうち１点は碗形鉄滓である。

［年代］　平安時代と思われる。

第13号土坑（図81、写真15）

［位置］　Ｄ・Ｅ－67・68グリッドに位置する。

［重複］　第14号土坑と重複し、これより古い。

［平面形・規模］　径94cm前後の隅丸方形状で、深さ27cmである。

［壁・底面］　壁は急な立ち上がりで、底面には凹凸が見られる。

［堆積土］　４層に分層できたが、人為堆積の様相が強い。

［出土遺物］　堆積土より、土師器甕数片と羽口片１点が出土した。

［年代］　不明。平安時代の可能性が強い。

第14号土坑（図81、写真15）

［位置］　Ｅ－68グリッドに位置する。

［重複］　第13号土坑と重複し、これより新しい。

［平面形・規模］　短軸75cm、長軸110cm、深さ20～35cmの楕円形である。

［壁・底面］　壁はやや急な立ち上がりで、底面には凹凸が見られる。また、底面は東側から西側へと傾斜している。

［堆積土］　７層に分層できたが、焼土を含む暗褐色土が主体となったいる。

［出土遺物］　堆積土より、土師器甕片数点が出土したのみである。

［年代］　不明。平安時代の可能性が強い。

第15号土坑（図83～85、写真16・27）

［位置］　Ｄ－65グリッドに位置する。

［重複］　重複はないが、第１号工房跡及び第22号土坑と隣接している。

［平面形・規模］　短軸135～160cm、長軸160cmの隅丸方形状で、深さ25cmである。

［壁・底面］　壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸が激しい。また底面・壁には焼けた痕跡が見られた。

［堆積土］　３層に分層できたが、人為堆積の様相が強い。上部には多量の焼土が見られ、底面には黄褐色土が貼られていた。

［出土遺物］　底面から土師器甕片約20点、鉄滓２点が出土した。確認面及び堆積土からは土師器甕片約30点、壷片５点、鍋？片５点、須恵器長頸壷片２点、坏片１点、フレイク１点、羽口片１点、鉄滓20点が出土した。図84-1･3とも第４号土坑から出土した破片と接合したものである。図示しない遺物にも、第15号土坑と接合する破片が数点ある。須恵器の長頸壷のうち１点は、第１号工房跡から出土した破片に接合した。また、本土坑の周辺からは多量の鉄滓が出土している。

［年代］　平安時代。

第16号土坑（図81、写真15）

［位置］　Ｃ－66グリッドに位置する。

［重複］　第17号土坑と重複し、これより新しい。

［平面形・規模］　短軸100cm、長軸112cmの楕円形を呈し、深さ12cmほどである。

［壁・底面］　壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸が見られた。

［堆積土］　２層に分層でき、自然堆積の様相が強い。

［出土遺物］　第16号・17号土坑の堆積土より、土師器甕片約20点、須恵器大甕片数点、砥石１点が出土した。須恵器大甕片のうち１点が第15号住居跡の堆積土より出土した破片に接合した。

［年代］　不明。

第17号土坑（図81、写真15）

［位置］　Ｃ－66グリッドに位置する。

［重複］　第16号土坑と重複し、これより古い。

［平面形・規模］　短軸100cm、長軸（160cm、推定）の不整形長方形で、深さ32cm（最大）である。

［壁・底面］　北壁は緩やかであるが、ほかは急な立ち上がりである。壁・底面とも凹凸が見られ、平面においても乱れた形状を見せる。北側が10cmほど高くなっている。

［堆積土］　４層に分層でき、黒～暗褐色土が主体である。

［出土遺物］　なし。

［年代］　不明。

第18号土坑（図81、写真15）

［位置］　Ｄ－59グリッドに位置する。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　径100cm前後の円形を呈し、深さ22cmである。

［壁・底面］　壁はやや急な立ち上がりで、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］　２層に分層できたが、ローム粒・塊を多量に含んだ暗褐色土主体である。人為堆積である。

［出土遺物］　なし。

［年代］　不明。平安時代の可能性が強い。

第19号土坑（図81、写真15）

［位置］　Ｆ－70グリッドに位置する。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　短軸60cm、長軸90cmの不整楕円形を呈し、深さ15cmである。

［壁・底面］　壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。北東側がやや高くなっている。

［堆積土］　2層に分層でき、暗褐色土主体である。

［出土遺物］　堆積土中より、土師器甕片約20点、須恵器大甕片3片が出土した。このうち、土師器甕片1点が第1号住居跡出土の小型甕に接合した。また、鈍い黄橙色を呈する須恵器大甕片1点が第1号住居跡カマド煙出し付近出土の破片と接合した。

第20号土坑（図81、写真15・26）

［位置］　G－70　グリッドに位置する。

［重複］　第1号住居跡と重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模］　径100cm程度の円形を呈し、深さ90cmである。

［壁・底面］　壁はフラスコ状に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。北側約半分は、第1号住居跡新・旧カマド及び旧カマド堀方によって切られており、立ち上がりを確認出来なかった。

［堆積土］　2層に分層でき、黒褐色土主体である。

［出土遺物］　敲磨器が1点出土した。

［年代］出土遺物から、縄文時代と思われる。

第21号土坑（図81）

［位置］　E－52グリッドに位置する。

［重複］　なし。

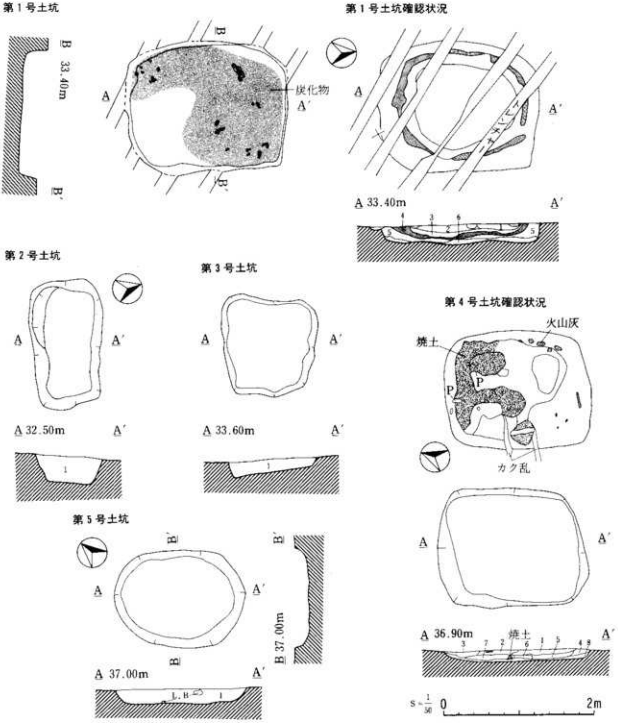
［平面形・規模］　短軸60cm、長軸95cmの隅丸長方形で、深さ10cmである。

［壁・底面］　壁は急な立ち上がりで、底面はほぼ平坦である。底面北側に深さ5cmのピットが掘られている。

［堆積土］　暗褐色土のみの確認である。

［出土遺物］　なし。

（第20号土坑は赤羽真由美、ほかは畠山　昇）



第1号土坑

第1層	黒褐色土	10YR2/2	
第2層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒、焼土粒微量。
第3層	黒 色 土	10YR2/1	
第4層	黒褐色土	10YR2/2	白頭山火山灰多量。
第5層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量。焼土粒微量。
第6層	炭化物層		

第2号土坑

第1層	黒褐色土	10YR2/2	全体にL、B、ローム粒中量。

第3号土坑

第1層	黒褐色土	10YR2/3	全体にL、B、ローム粒多量。

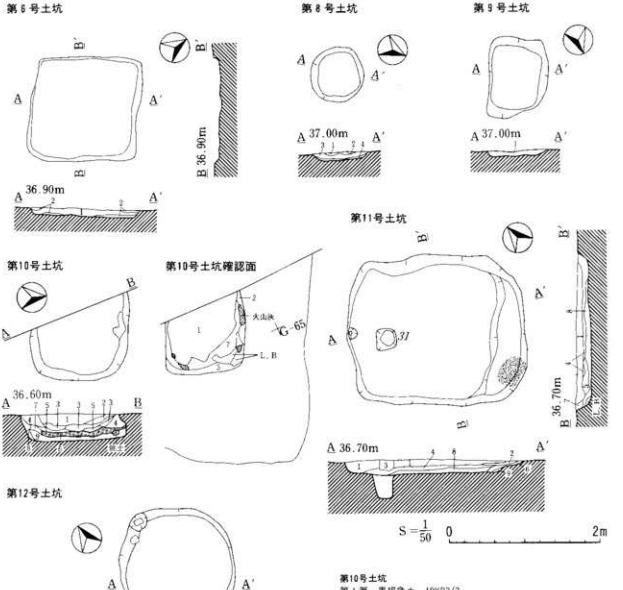
第4号土坑

第1層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒中量。
第2層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量。
第3層	暗褐色土	10YR3/3	炭化物粒少量。
第4層	暗褐色土	10YR3/3	
第5層	明褐色土	7.5YR5/8	ローム粒多量。
第6層	明褐色土	7.5YR5/8	ローム粒多量。
第7層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒中量。
第8層	黒 色 土	10YR2/1	

第5号土坑

第1層	黒褐色土	10YR2/3	L、B、ローム粒多量。焼土粒少量。炭化物微量。

図79　土坑1（第1号～5号）



第6号土坑

第1層	褐色土	10YR4/4	L.B少量、焼土粒・炭化物微量。
第2層			炭化物量。

第8号土坑

第1層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	焼土粒少量。
第2層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	
第3層	暗褐色土	10YR3/4	焼土粒少量。
第4層	褐色土	10YR4/6	ローム粒微量。

第9号土坑

第1層	暗褐色土	10YR3/4	L.B、ローム粒中量。

第10号土坑

第1層	黒褐色土	10YR2/2	
第2層	暗褐色土	10YR3/4	白頭山火山灰中量。
第3層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	白頭山火山灰ブロック。
第4層	暗褐色土	10YR3/4	焼土粒、白頭山火山灰含む。
第5層	暗褐色土	10YR3/4	焼土粒、灰少量。
第6層	暗オリーブ灰	2.5YR3/3	白頭山火山灰。
第7層	黒褐色土	10YR2/3	焼土粒中量。
第8層	黒褐色土	10YR2/3	
第9層	黒褐色土	10YR2/3	焼土粒、炭化物粒少量。

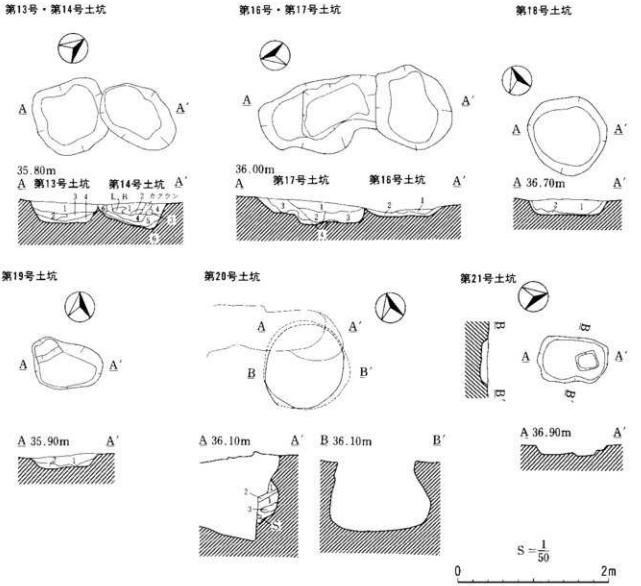
第11号土坑

第1層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒、焼土粒微量。
第2層	褐色土	10YR4/4	ローム粒多量。やや硬い。
第3層	黄褐色土	10YR5/8	L.B、ローム粒の層。
第4層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒、炭化物微量。
第5層	暗褐色土	10YR3/4	やや硬い。
第6層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒微量。
第7層	褐色土	10YR4/6	硬い。
第8層	褐色土	10YR4/6	L.B、ローム粒多量。焼土粒微量。
第9層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒多量。

第12号土坑

第1層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒、炭化物微量。
第2層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒、炭化物微量。

図80　土坑2（第6号・第8号～12号）



第13号土坑

第1層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量、炭化物微量。
第2層	にぶい黄褐土	10YR4/3	ローム粒中量。
第3層	褐色土	10YR4/4	L、B、ローム粒多量。
第4層	褐色土	10YR4/6	ローム粒中量。

第14号土坑

第1層	暗褐色土	10YR3/3	炭化物少量、焼土粒微量。
第2層	褐色土	10YR4/4	ローム粒少量、焼土粒微量。
第3層	褐色土	10YR4/4	焼土少量。
第4層	暗褐色土	10YR3/4	炭化物・焼土粒微量。
第5層	褐色土	10YR4/4	焼土粒中量。
第6層	暗褐色土	10YR3/3	
第7層	暗褐色土	10YR3/4	焼土粒少量。

第16号土坑

第1層	黒褐色土	10YR2/2	
第2層	黒褐色土	10YR2/3	

第17号土坑

第1層	黒褐色土	10YR2/3	炭化物少量。
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量。
第3層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒微量。
第4層	褐色土	10YR4/4	ローム主体。

第18号土坑

第1層	褐色土	10YR4/4	L、B、ローム粒多量。
第2層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒微量。

第19号土坑

第1層	暗褐色土	7YR3/4	焼土粒・炭化物微量。
第2層	褐色土	7YR4/4	L、B中量。硬い。

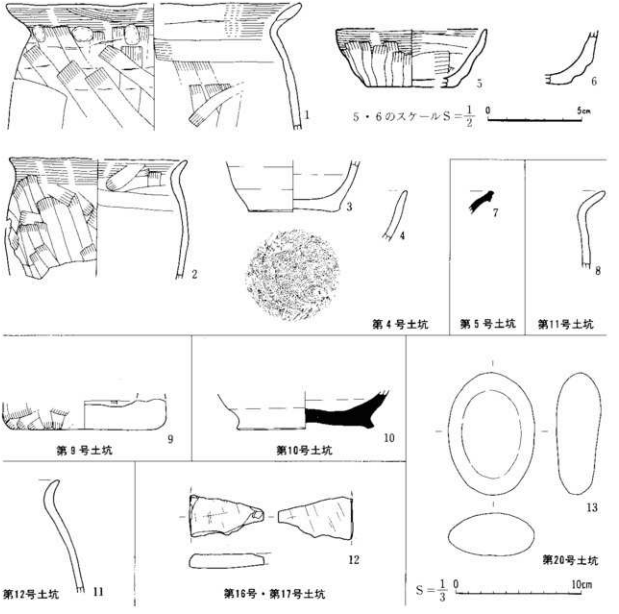
第20号土坑

第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒中量混入。しまり無し。
第2層	褐色土	10YR4/6	L、B主体で第1層が少量混入。

第21号土坑

第1層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒、炭化物微量。
第2層	暗褐色土	10YR3/4	炭化物少量。
第3層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒微量。
第4層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量。

図81　土坑3（第13号・第14号・第16号～21号）



番号	種類	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	分類	備考	遺物番号
1	土師器	甕	4土	1層	(23.4)			ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラナデ		粗砂多量	AII		2
2	〃	壺	4土	1層	(14.2)	—	—	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラナデ		小礫多量	B1a		1
3	〃	壺か甕	4土	1層	—	7.4	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細砂多量	BVb		7
4	〃	坏	4土	1層	(11.4)			ミガキ	ミガキ		密	S1a	内面黒色処理	8
5	〃	ミニチュア	4土	覆土	(7.0)	(4.7)	3.1	ヨコナデ→ヘラナデ	ユビナデ	ヘラナデ	密			1-5
6	〃	ミニチュア	4土	1層				ユビナデ	ユビナデ					1-22
7	須恵器	長頸壺	3土	覆土	(10.0)	—	—	ロクロ	ロクロ	—			明灰色（断面に赤い赤褐色）	X-36
8	土師器	壺	11土	覆土	—	—	—	ヨコナデ	ヘラナデ		小礫少量	B1a		6
9	〃	支脚	9土	1層		(11.4)		ユビナデ→ヘラナデ	ユビナデ					9
10	須恵器	壺	10土	覆土	—	(11.0)	—	ロクロ	ロクロ				にぶい黄橙色（断面に赤い褐灰色）	X-35
11	土師器	甕	12土	覆土	—	—	—	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ		小礫少量	AIV	褐灰色（断面は赤色、口縁に煤が付）	10

番号	種類	出土地点	器種	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	遺物番号
12	石器	16・17土覆土	磨石	A-1	流紋岩	(3.2)	15.9	1.4	31.6	破片。時期不明。	101
13	〃	20土覆	台石類	C-1	閃緑石	9.8	6.8	2.3	366.6	S＝1。磨石。表面焼けあり。	93

図82　土坑出土遺物

第１号工房跡（図83～85、写真16・26）

Ｄ・Ｅ－65グリッドに検出した遺構は、調査時点では第14号住居跡としていた。しかし、調査の進展に伴って、カマド（炉）が竪穴部分より外にあることから、住居跡とは呼べない状況となった。検出状況からは何らかの鉄生産の工程を荷った工房跡の可能性が考えられるので、ここでは第１号工房跡として報告し、類例の増加を待ちたい。なお、これに隣接して検出した第15号土坑にも、本遺構と強い関連性が窺われることを併記しておく。

［位置］　Ｄ・Ｅ－65グリッドに位置する。

［重複］　重複はないが、第15号土坑と隣接している。

［平面形・規模］　竪穴部分は短軸175cm、長軸230cmの長方形状を呈し、深さ15cmである。

［壁・底面］　竪穴部分の壁は緩やかに立ち上がる。底面は凹凸が激しいが、硬く踏みしめられ、第１号炉に近い部分には焼けた痕跡が見られた。

［堆積土］　竪穴部分は３層に分層できたが、覆土中に炭化物や焼土が含まれている。また、底面及び底面直上に炭化物も若干見られた。

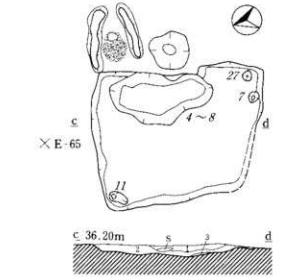
［炉］　竪穴部分の東壁北端に隣接して構築されている。炉本体は黄褐色土及び白色粘土で構築され、部分的に砂の混入が認められている。炉断面の状況から、天井部は構築されていなかった可能性がうかがわれる。炉の袖はハの字状に構築され、いわゆる前庭部方向の開放された部分の内壁の幅は48cm、これに対する煙道部方向の閉じている部分の幅は10cmほどである。燃焼部は32×42cmの楕円形状の弱い酸化面が見られ、支脚として円形の礫が設置されている。覆土中から土師器甕の破片が出土している。

［出土遺物］　竪穴部分からやや多量の鉄滓と少量の土師器が出土している。床面からは、土師器甕片約50点、須恵器大甕片３点、スクレイパー１点が出土した。図85-1は須恵器の大甕であり、第６号土坑の堆積土から出土した須恵器片と接合した。堆積土からは、土師器甕片約70点、坏片５点、内面黒色処理の壷１点、須恵器壺片５点、大甕片１点、台石１点、台石片？２点、羽口片１点、鉄滓多量（うち、碗形鉄滓２点）、炭化した栃の実２点が出土した。84-5は内面黒色処理の高台付坏である。高台部の接合部分に刻みが観察された。詳しくは第５章第３節で述べる。図85-4の須恵器壺は第15号土坑から出土した破片と、図85-1の須恵器大甕は第６号土坑から出土した破片と接合したものである。１号炉部分からは、土師器甕片約30点、中礫１点が出土した。

［年代］　平安時代。

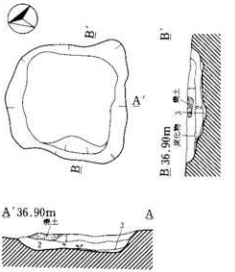
（畠山　昇・赤羽 真由美）

第１号工房跡



第１号工房跡
第１層　暗褐色土　7.5YR3/3　焼土微量混入。
第２層　黒褐色土　7.5YR2/2　炭化物多量、焼土少量混入。
第３層　暗褐色土　10YR3/3　粘土粒、焼土微量混入。

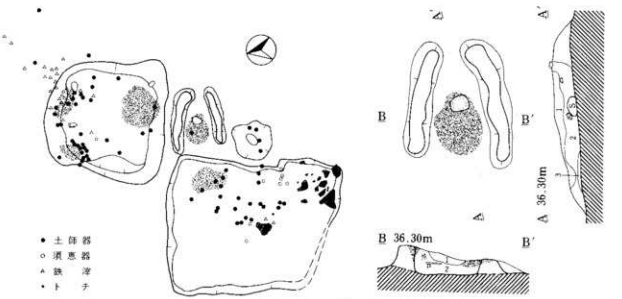
第15号土坑



第15号土坑
第１層　灰褐色土　7.5YR4/2　炭化物・焼土多量混入。
第２層　黒褐色土　10YR2/2　炭化物・焼土微量混入。
第３層　にぶい黄褐色土　10YR4/3

S＝1/50
0　2m

遺物出土状況

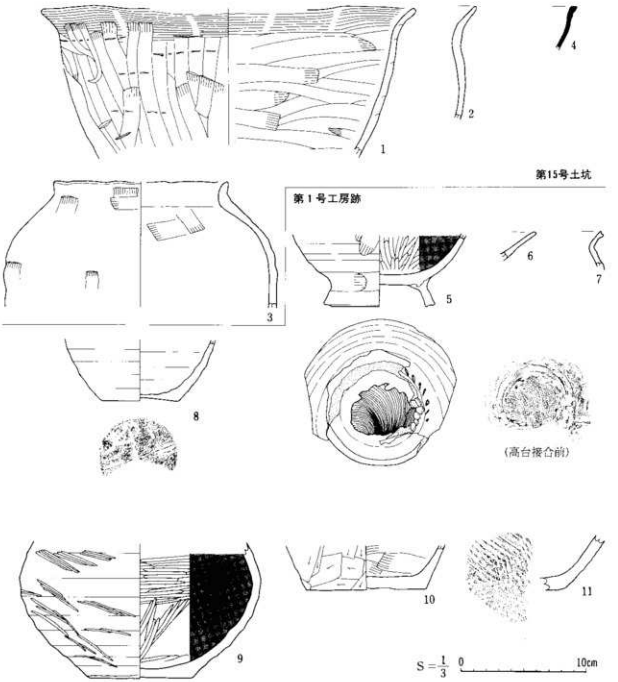


炉
第１層　暗褐色土　10YR3/3　焼土少量、炭化物粒微量混入。
第２層　褐灰色土　5YR2/3　焼土多量、炭化物少量混入。
第３層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒混入。

S＝1/50
0　2m

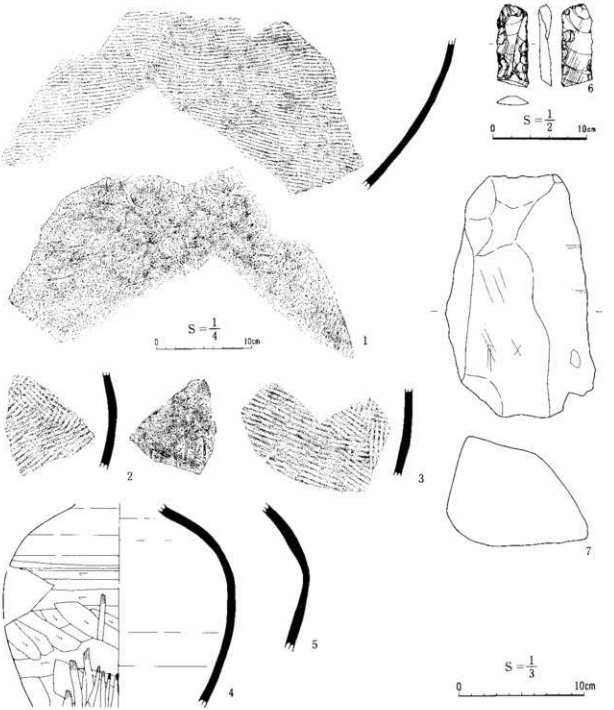
S＝1/25
0　1m

図83　第15号土坑と第１号工房跡



番号	種類	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	分類	備考	整理番号
1	土師器	鍋？	15上	縁部面	(14.8)	－	－	コロナデ→ヘラナデ	コロナデ→ヘラナデ	－	密		4土縁部面1層と接合	4
3	〃	甕	1a上	器面	(13.6)	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ		小礫多量	BII	4土1層、D−6杯台部と接合 燃料脆しい	3
4	須恵器	坏	15上	覆土				ロクロ	ロクロ	－	粗砂少量		灰黄褐色	X-38
5	土師器	高台付坏	1号工房	覆土	－	(8.2)	－	ユビナデ	ミガキ	回転糸切・粗ち取付	粗砂多量・密	AII	内面黒色処理	3
6	〃	坏	〃	覆土	－	－	－	ロクロ	ロクロ		密	AII	浅い坏	8
7	〃	甕	〃	床面	12.5			ロクロ	ロクロ	－	密	BIIIb		7
8	〃	坏	〃	生活面	－	6	－	ロクロ	ロクロ	回転糸切	小礫少量	AIe		2
9	〃	皿	〃	覆土	－	(8.4)	－	ロクロ→簡素なミガキ	ミガキ	ケズリ	密		内面黒色処理	1
10	〃	甕	〃	覆土		(9.6)		ケズリ	ヘラナデ	ナデ	粗砂多量	AVb		5
11	〃	甕	〃	1層	－	－	－	ナデ	ユビナデ	砂擦		AVb		6

図84　第15号土坑と第1号工房跡出土遺物―1



番号	種類	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	分類	備考	整理番号
1	縄文土器	大型	1号工房	床面	—	·	·	タタキメ	当て具痕		砂分多・赤		6土器胎土と同色 比色（断面において暗褐色）	X-11
2	〃	大型	〃	床面		·	—	タタキメ（格子）	当て具痕	—			表面色に白色粒子多 内面色は白	X-32
3	〃	大型	〃	床面	—	—		タタキメ（格子）	当て具痕	—			灰色、外面に白色粒子多（断面図参照）・赤褐色	X-33
4	〃	壺	〃	覆土	—	—	—	ロクロ→ケズリ→ナデ	ロクロ	—	密		胎土と同色・白色粒子多 にぶい黄褐色 胎土分析No.1・6	X-16
5	〃	壺	〃	覆土			—	ロクロ→ケズリ	ロクロ→ナデ	—			にぶい褐色・胎土分析No5	X-5

番号	種類	出土地・層	器種	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	整理番号
6	石器	1号工房床面	スクレイパー		黒曜石	4.2	1.6	0.6	5	サイドスクレイパー	15
7	〃	1号工房	台石類	C 3	安山岩	(19.3)	11.5	7.5	2119.2	S・3、面研(1)？。ややザラつく。平坦面は磨られ。	90

図85　第15号土坑と第1号工房跡出土遺物－2

第２節　遺構外の出土遺物

１．平安時代の出土遺物（写真27）

Ｃ－64・65グリッドに位置する風倒木痕からややまとまって土師器等が出土したため、風倒木痕内から出土した遺物を一括して述べ、それ以外を種類別に述べることとする。

（１）風倒木痕出土遺物（図86）

土師器甕片約300点、坏片数点、鍋片１点、須恵器壺片数点、鉄滓１点、縄文土器片１点が出土した。図示したものは土師器甕６点、坏１点、鍋１点、縄文土器１点である。風倒木痕内の出土遺物は、他の遺構外の出土遺物と比べて破片が大きく、摩耗していない。また、数片が第８号住居跡床面、第12号土坑堆積土出土の土師器甕と接合した（図45－9、82－11）。

（２）土師器（図87･89）

甕片約3,000点、坏片約100点、壺片数点、ミニチュア片数点、製塩土器？片約120点が出土した。製塩土器？片は、第８号住居跡を中心に、60ライン以南に散在していた。全て細片で、接合したものはわずかである。３点を図示した（図89-1･3･4）。１は胴部、３・４は底部のようである。４は、穿孔しているように観察される。

（３）須恵器（図88）

本遺跡からは須恵器はあまり出土していないが、出土した須恵器の内の大部分は遺構外から出土したもので、灰色の大甕片約50点、鈍い黄橙色の大甕片約70点、鈍い赤褐色の大甕片10点、壺片約40点、坏片数点が出土した。６は壺の口縁部である。頸部に刻書がみられる。割れているために判然としないが、「六」と読める。７･10･13は鈍い黄橙色の甕である。第１号住居跡周辺に散在していた。

（４）羽口・鉄滓

羽口片50点、鉄滓130点が出土した。羽口片は住居跡近くから多く出土したが、どれも細片であるため図示しなかった。鉄滓は第15号土坑・１号工房跡付近で最も多く出土した。遺構外から出土した碗形鉄滓３点のうち２点も、第15号土坑・１号工房跡付近から出土したものである。　（赤羽 真由美）

（５）石器（図90）

平安時代と考えられる遺構外出土の石器は２点である。７は砥石である。Ⅱ層から出土した。扁平な礫を利用したもので、表面には滑らかな研ぎ痕が見られる。石質は流紋岩である。８は台石？としたもので、Ⅱ層から出土した。被熱のため欠損しており、火ハジケの痕跡も見られる。表面は滑らかである。石質は安山岩である。　（畠山　昇）

２．平安時代以外の出土遺物

（１）縄文時代の土器（図20-6、図49-4、図86-11、図91-1･2）

縄文時代中期（図91-2）

深鉢形土器の突起部分である。山形の突起を縁取る広い隆帯と、頂部より垂下する隆帯がみられる。隆帯の上には、横位の０段多条による撚糸圧痕と、０段多条の絡条体圧痕が施されている。

縄文時代後期（図20-6、図49-4、図86-11、図91-2）

第２号住居跡から出土した図20-6と風倒木痕から出土した図86-11は無文の深鉢形土器の口縁部で

ある。図49-4は第8号住居跡覆土から出土した。沈線文の施文後、磨きを施している。図91-1は、縦位のL縄文の後、沈線文を施している。一部磨消による無文帯もみられる。図91-2は表土から出土した。深鉢形土器の突起部分である。山形の突起を縁取る広い隆帯と、頂部より垂下する隆帯がみられる。隆帯の上には、横位の0段多条による撚糸圧痕と、0段多条の絡条体圧痕が施されている。中期前半と思われる。 (赤羽 真由美)

(2) 縄文時代の石器

縄文時代と考えられる石器は、59点出土した。平安時代の住居跡覆土から出土したものが少数あるが、大半は遺構外からの出土である。以下、器種ごとに概略を述べる。

石鏃 (図91-3・4)

Ⅰ層から2点出土した。4は全体に五角形気味で平基、3は柳葉形を呈している。石質は、4が黒曜石、3は珪質頁岩である。

石錐 (図69-5)

第17号住居跡の床面直上から1点出土した。三角形状の形状で、先端部に錐部を作出している。

石箆 (図23-7)

第3号住居跡の7層から出土した。短冊形で、片面加工である。刃部は急斜度調整である。

スクレイパー (図20-8、図85-6、図91-5～9・11)

第2号住居跡から1点、第1号工房跡から1点、遺構外から6点の出土である。第2号住居跡出土のもの(図20-8)は、黒曜石製で、剥片の末端に急斜度の調整が施されている。第1号工房跡から出土のものは、長方形状の剥片の側縁にラフな調整が連続して施されている。これも黒曜石製である。遺構外から出土したものは、全て珪質頁岩製で、不定形剥片の側縁に連続した調整が施されている。

R－フレイク (図91-10、図39-2)

不定形石器のうち、刃部作出のための細部調整が縁辺の1/2以下のものである。平安時代の住居跡(1号、2号、4号、7号、11号、12号)覆土から5点、遺構外から9点の出土である。

フレイク

平安時代の住居跡(1号、6号、11号、12号、18号)から6点、土坑(4号、5号、12号、15号)から4点、遺構外から16点出土した。石質は大半が珪質頁岩であるが、黒曜石のものが6点ある。

磨製石斧 (図90-1～3)

遺構外のⅠ層から3点出土した。56は刃部片で、頁岩を素材としている。57は基部片で、安山岩を素材としている。102は粘板岩を素材としているせいか、節理面にそって縦に欠損している。

敲磨器類 (図90-4～6・9、図82-13)

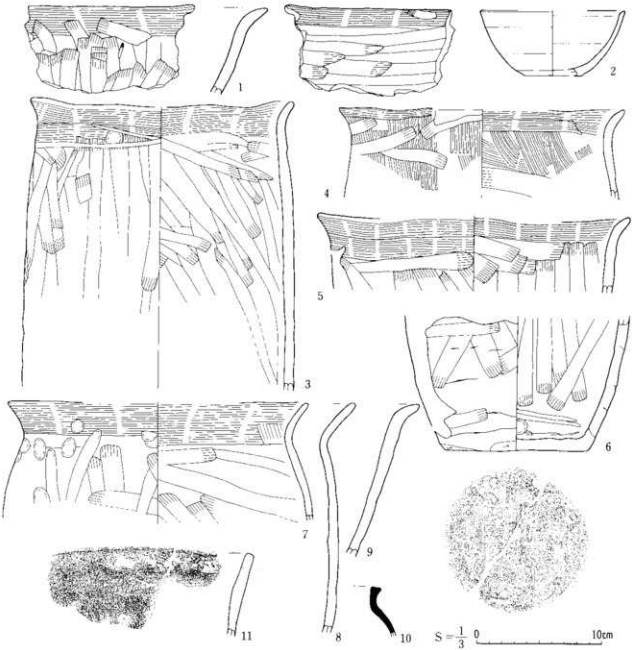
遺構外のⅠ層から3点、第20号土坑から1点出土した。図90-4は半円状扁平打製石器で、一部欠損している。下側縁には弱い打痕が見られる。図90-5・6は三角柱状磨石である。下側縁には敲磨痕が見られ、平坦面には凹孔が見られる。図82-13は扁平な楕円礫を利用した磨石である。全体に丸みが強く、器面はややザラついている。 (畠山 昇)

(3) 古銭 (図89-8)

寛永通寶1枚が表土から出土した。摩耗が激しく、ゆがみがある。新寛永か。

(4) 土製垂飾品 (図89-7)

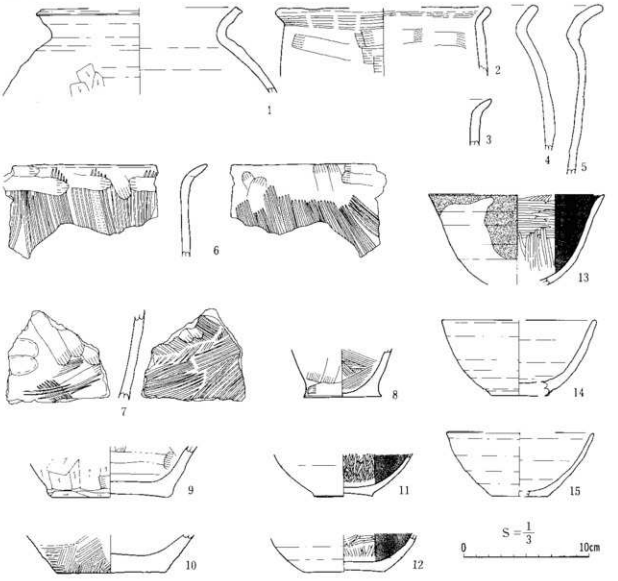
表面採集した。時期不明である。一部に赤色顔料らしいものが付着している。 (赤羽 真由美)



番号	器種	器種	出土位置	遺存	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	分類	備考	実測番号
1	土製品	鳥？	風倒木痕	覆土	(35.4)			ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラナデ	－	小礫少量			9
2	〃	坏	〃	覆土	(11.6)	(4.6)	5.2	ロクロ	ロクロ			A3c		8
3	〃	壺	〃	覆土	(21.0)			ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラナデ	－	小礫少量	A1		2
4	〃	壺	〃	覆土	(22.4)	－	－	ヨコナデ→ハケメ	ヨコナデ→ハケメ	－	小礫中量	AIV		7
5	〃	壺	〃	覆土	－			ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラナデ	－	黒鉱粒・雲	A1		4
6	〃	壺	〃	覆土		11.4	－	ヘラナデ、ケズリ	ヘラナデ	竹編痕	密	AVb		1
7	〃	壺	〃	覆土	(24.0)	－		ヨコナデ・ユビナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	粗砂多量	AIV		11
8	〃	壺	〃	覆土	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	密	A1		3
9	〃	壺？	〃	覆土		－	－	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラナデ	－	粗砂少量	AIV		10
10	須恵器	壺	〃	覆土	－	－	－	ロクロ	ロクロ		密		C.ii.h・黒鉱色、1個面に炭化物分析No.15	不1y

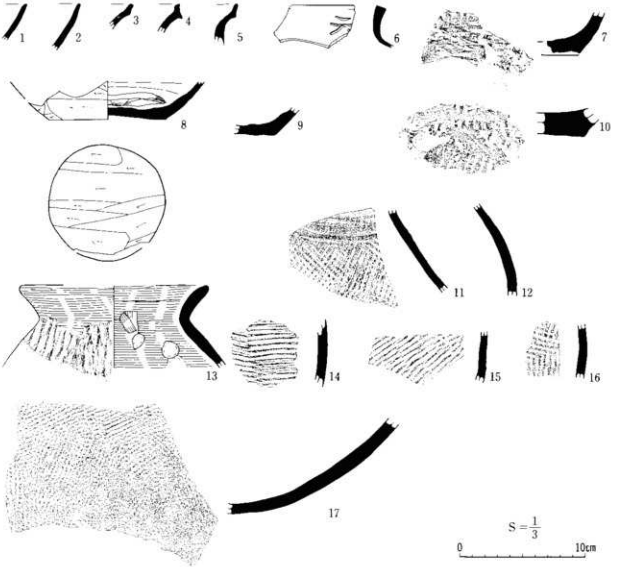
番号	器種	器種	出土位置	遺存	外面の文様・地文	内面調整	備考	実測番号
11	土製品	錘車	－	覆土	無文	撫で	指紋痕計測入	5

図86　遺構外の出土遺物－1（風倒木痕）



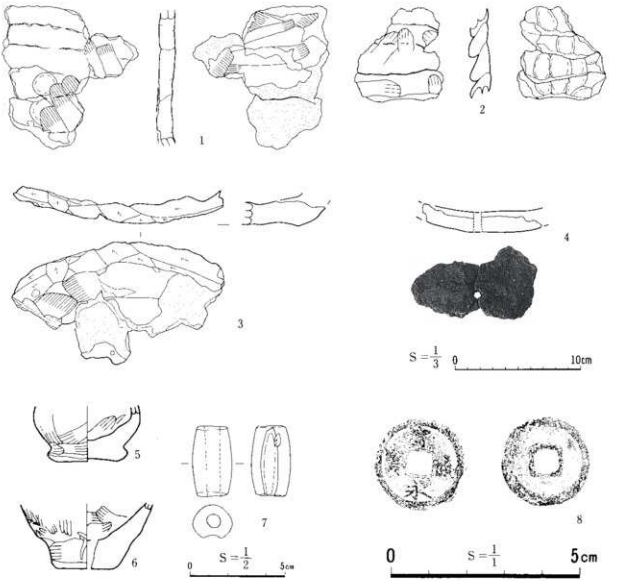
番号	種類	器種	出土位置	器内	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底部調整	胎土	分類	備考	実測番号
1	土師器	皿	C・D-71	表土	－	－	－	ロクロ・ケズリ	ロクロ	－	細砂多量			9
2	〃	壺	C・D-71	表土	(6.6)	－	－	コウナデ、ヘラナデ	ヨコナデ	－	小礫少量	B1a	磨耗激しい	5
3	〃	壺	D-65	生活面	(18.6)		－	ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	指頭痕針痕中量		AIVa		10
4	〃	壺	C・D-71	表土	－	－	－	ヨコナデ・ケズリ	ハケメ→ヘラナデ			AII		6
5	〃	壺	C-64	II層			－	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	海綿骨針小礫中量	AI		3
6	〃	壺	D-65	生活面	－	－	－	ハケメ→ユビナデ	ハケメ→ユビナデ	－	粗砂少量	AIV		7
7	〃	壺	D-62	I層	－	－	－	ハケメ・ユビナデ	ハケメ→ユビナデ		小礫少量			18
8	〃	壺	C-64	開墾	－	6.2	－	ヘラナデ	ハケメ		小礫中量	AIb		11
9	〃	壺	C・D-71	表土	－	9.2	－	ケズリ	ユビナデ		粗砂多量	AVa		1
10	〃	壺	C・F-71	II層	－	(8.6)	－	ハケメ		砂痕		AVb		17
11	〃	ﾐﾆ	E-71	II層	－	4.7	－	ロクロ	ミガキ	回転糸切	海綿骨・2	AIc	内面黒色処理	13
12	〃	坏	G-73	III層		(6.4)	－	ロクロ	ミガキ	回転糸切	海綿骨針・2	AIc	内面黒色処理	12
13	〃	坏	D-67	II層	(14.0)	－	－	ロクロ	ミガキ	－	密	AId	内面黒色処理、外面にも見る	14
14	〃	坏	F-78	II層	(12.2)	(4.6)	5.1	ロクロ	ロクロ	回転糸切		AIIc		16
15	〃	坏	C-64	開墾	(11.8)	(4.4)	5.1	ロクロ	ロクロ	回転糸切	密	AIIc		15

図87　遺構外の出土遺物－2



番号	種類	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	胎土調整	胎土	分類	備考	実測番号
1	須恵器	坏	E-64	II層	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	海綿骨針・多		灰色（断面において赤褐色）胎土分析No.19	3-19
2	〃	坏	E-63	II層	－	－		ロクロ	ロクロ	－	海綿骨針・多		灰白色（断面において赤褐色）胎土分析No.18	3-18
3	〃	長頸壺	F-70		(10.0)	－	－	ロクロ	ロクロ	－			灰色（断面において赤褐色）内外面に自然釉付着	3-40
4	〃	長頸壺	C・D-70	表土	－			ロクロ	ロクロ				灰色（断面において赤褐色）内外面に自然釉付着	3-43
5	〃	長頸壺	C-65	II層	－	3.4	－	ロクロ	ロクロ	－	密		暗灰色（断面暗赤褐色）胎土分析No.16	3-16
6	〃	短頸壺？	D-65		(13.0)			ロクロ	ロクロ	－	海綿骨針・密		灰色　刻書「穴」？	3-39
7	〃	甕	C・D-71	II層	－	－	－	タタキメ（平行）	ナデ				明黄色（断面において褐色）土師器に似る	3-47
8	〃	甕	E-62	I層	－	9.2	－	ケズリ	ユビナデ	ケズリ			黒褐色（断面において赤褐色）胎土分析No.17	3-17
9	〃	壺	D-65	II層	－	(10.0)		ケズリ	ユビナデ	－			灰色（断面において赤褐色）内外面に自然釉付着	3-46
10	〃	甕	F-70	II層	－	－	－	タタキメ（平行）	ナデ	タタキメ			にぶい黄橙色、土師器に似る	3-44
11	〃	大甕	F-71	III層	－			ユニットタタキメ（格子）	ナデ	－			にぶい赤褐色（断面同色褐色）	3-42
12	〃	壺	D-67	II層	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	海綿骨針・多		灰色、外面に自然釉付着 胎土分析No.13	3-13
13	〃	大甕	C-71	II層		－	－	タタキメ（平行）	ヨコナデ、ユビアト		粗砂少量		にぶい黄橙色、土師器に似る 胎土分析No.12	3-12
14	〃	甕	F-66	II層	－	－		タタキメ	ナデ	－			明褐色（断面明黄褐色）(1)	16
15	〃	大甕	D-63	II層			－	タタキメ（格子）	当て具痕		密		にぶい黄橙色（断面色）胎土分析No.8	3-8
16	〃	甕	E-64	II層	－	－	－	タタキメ（格子）	当て具痕		黒ウンモ？		黄灰色（断面において黄色）外面に自然釉付着 胎土分析No.20	3-20
17	〃	大甕	D-71	II層	－	－	－	タタキメ（格子）	ナデ	タタキメ（格子）	粗砂少量		灰色（断面において赤褐色）	3-21

図88　遺構外の出土遺物－3

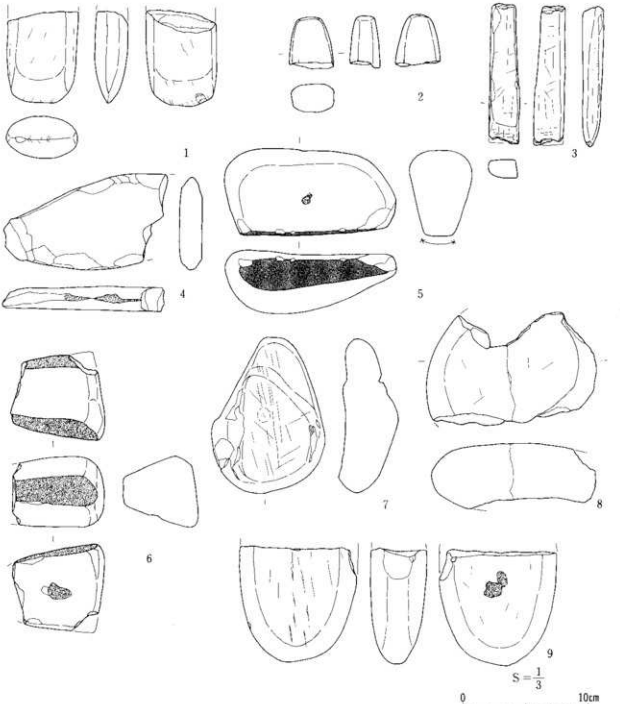


番号	種類	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	外底調整	内面調整	底部調整	胎土	分類	備考	遺物番号
1	土師器	製塩土器	G-73	田層	－	－	－	ユビナデ	ユビナデ		小礫多量		輪積痕明瞭	23
2	〃	壺類	E-66	埋土	－	－	－	ユビナデ	ユビナデ		小礫中量		輪積痕明瞭	25
3	〃	製塩土器	G-73	田層				ケズリ	ユビナデ	砂底	小礫多量			22
4	〃	製塩土器	G-73	田層	－	－	－	－		砂底	小礫多量		底部穿孔？	24
5	〃	ミニチュア	D-65	田層				ユビナデ	ユビナデ		密			1-8
6	〃	ミニチュア	C・D-70	表土	－	－	－	ユビナデ＋ミガキ	ユビナデ		密			1-16

番号	種類	名称	出土位置	層位	長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考	遺物番号
7	土製品	垂飾品	不明	表採	3.5	1.8	0.7	15.3		

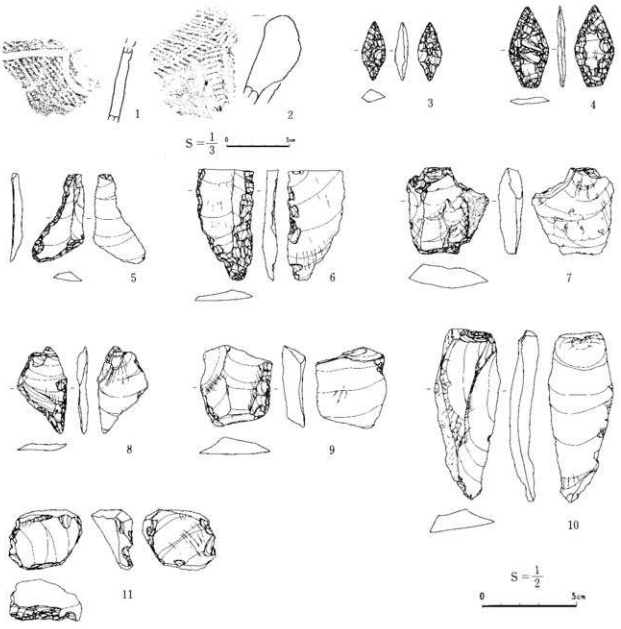
番号	種類	銭貨名	出土地点	層位	径(mm)	外縁厚(mm)	外縁幅(mm)	重さ(g)	備考	遺物番号
8	古銭	寛永通宝	F-19	I層	23.9	6.5	8.9	2.2	砂質土	

図89　遺構外の出土遺物－4



番号	種類	出土地点・層	器種	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	実測番号
1	石器	E−64、I	磨製石斧		真　岡	(7.5)	(5.6)	(3.3)	(195.4)	刃部片。	36
2	〃	E−69、I	磨製石斧		安山岩	(3.8)	(3.3)	(2.3)	(53.0)	基部片	57
3	〃	C−62、I	磨製石斧		粘板岩	(11.2)	(2.4)	1.7	87.1	刃部欠損。	102
4	〃	表採	平円状扁平打製石斧		安山岩	(7.4)	(11.7)	1.8	233.2	下側縁に打痕。	114
5	〃	G−64、②層	敲磨器		安山岩	13.9	7.0	5.1	662.5	スリ面12〜25mm。全体に滑らか。中央に浅い打痕。	77
6	〃	F−70、I	敲磨器		安山岩	7.2	5.9	7.3	409.5	二角柱状。H面に凹孔。横断面3角。ヤク。1/3残。	65
7	〃	C−69、II	砥石	A1	流紋岩	12.4	9.1	4.3	477.4	1面使用。中央近くに深い擦打痕。	87
8	〃	C−69、II	凸石器	C2	安山岩	(7.9)	(13.5)	4.9	825.6	扁平。丸い。下端重複らか。	119
9	〃	F 70盛土下	敲磨器		安山岩	9.2	9.4	4.5	468	全体にザラつく。内面に亀裂（H面に顕著）。L面に敲打痕。	70

図90　遺構外の出土遺物—5



番号	種類	器種	出土位置	層位	外面の文様・地文	内面調整	備考	整理番号
1	縄文土器	深鉢	E－78	II層	I. (縦位) ・沈線文			2
2	〃	深鉢	C－49	I層	隆帯貼付、無節縄文(10段多条)、結束状圧痕(10段多条)			1

番号	種類	出土地点・層	器種	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	整理番号
3	石器	E－22, I	石鏃		珪質頁岩	3.1	1.3	0.7	2.2	Y基。	26
4	〃	C－22, I層	石鏃		黒曜石	4.4	2	0.3	3.4	平基、三角形鏃。	25
5	〃	F－74, I	スクレイパー		珪質頁岩	4.9	2.1	0.5	5.3		52
6	〃	F－56, I	スクレイパー		珪質頁岩	(5.9	(2.9	0.8	(12.4)	石匙？、先端ドリル状	36
7	〃	E－61, I	スクレイパー		黒曜石	4.6	4.4	1.1	24.6	焼成多い。	44
8	〃	F－63, I	スクレイパー		珪質頁岩	4.6	2.7	0.3	4.5		45
9	〃	F－56, I	スクレイパー		珪質頁岩	4.1	3.6	1.3	19.6		37
10	〃	F－74, I	R. フレイク		珪質頁岩	9	3.4	1.1	34.8		53
11	〃	D－54, I	スクレイパー		珪質頁岩	3.9	3.4	1.1	16.7		34

図91　遺構外出土遺物— 6